

青森市埋蔵文化財調査報告書 第124集

国史跡高屋敷館遺跡

環境整備報告書Ⅲ

平成30年度

青森市教育委員会

青森市埋蔵文化財調査報告書 第124集

国史跡高屋敷館遺跡

環境整備報告書Ⅲ

平成30年度

青森市教育委員会



11世紀の史跡高屋敷館遺跡推定復元図(故高島成侑氏画)



史跡高屋敷館遺跡整備状況1(S→)



史跡高屋敷館遺跡整備状況2(S→)



史跡高屋敷館遺跡内郭から山元 (1) 遺跡内区画施設を望む(NE→)

例 言

1. 本書は、国の補助金交付を受けて平成18～30年度に実施した史跡高屋敷館遺跡環境整備事業の成果を収録したものである。
2. 事業の実施にあたっては、文化庁文化財部記念物課及び青森県教育庁文化財保護課の指導・助言を受けた。
3. 本書刊行以前の事業内容及び基本構想・基本計画については、以下にまとめられている。
浪岡町教育委員会 2001『平成12年度浪岡町文化財紀要Ⅰ』
浪岡町教育委員会 2005『平成16年度浪岡町文化財紀要Ⅴ』
青森市教育委員会 2008『国指定史跡高屋敷遺跡 環境整備基本構想・基本計画』
青森市教育委員会浪岡教育事務所 2006『国史跡高屋敷館遺跡 環境整備報告書Ⅱ』
4. 本書の作成及び編集は、青森市教育委員会が行い、木村淳一が担当した。なお、第Ⅲ章第2節については、設楽政健が執筆した。また、第Ⅲ章第3節は、次の方々から玉稿を賜った（敬称略）。箱崎真隆（国立歴史民俗博物館）・木村勝彦（福島大学）・佐野雅規（早稲田大学）・對馬あかね（名古屋大学）・李貞（総合地球環境学研究所）・中塚武（総合地球環境学研究所・名古屋大学）
5. 挿図の縮尺は、各図にスケールを付した。なお、写真図版の縮尺は、統一を図っていない。
6. 図版番号及び表番号並びに写真番号は、「第○図」、「第○表」、「写真○」とし、順番に通し番号を付した。なお、第Ⅲ章第3節については、執筆者の表記に従った。
7. 出土遺物及び原図・データ等については、一括して青森市教育委員会が保管している。

例言
目次

第Ⅰ章 事業実施の概要	1
第1節 史跡高屋敷館遺跡の概要	1
1. 位置とアクセス	1
2. 指定状況	1
第2節 事業の実施体制・概要	1
1. 事務局体制	1
2. 事業概要	3
第3節 年度別整備工事等費用	4
第Ⅱ章 史跡整備の設計・施工内容	7
第1節 本報告以前の施工内容	7
1. 平成16年度	7
2. 平成17年度	7
第2節 平成18～30年度の史跡整備設計・施工内容	7
1. 平成18年度	7
2. 平成19年度	11
3. 平成20年度	15
4. 平成21年度	18
5. 平成22年度	22
6. 平成23年度	23
7. 平成24年度	25
8. 平成25年度	29
9. 平成26年度	31
10. 平成27年度	35
11. 平成28年度	39
12. 平成29年度	43
13. 平成30年度	50
第Ⅲ章 資料編	63
第1節 高屋敷館遺跡出土土器	65
第2節 高屋敷館遺跡出土鉄関連遺物について	73
第3節 酸素同位体比年輪年代法による高屋敷館遺跡東壕橋脚の年代検証	77
報告書抄録, 引用・参考文献	81
既刊埋蔵文化財関係報告書一覧	

第 I 章 事業実施の概要

第 1 節 史跡高屋敷館遺跡の概要

1. 位置とアクセス

国史跡高屋敷館遺跡は、青森市浪岡地区に所在している。浪岡地区は、平成 17 年 4 月に旧青森市と新設合併した旧南津軽郡浪岡町の行政区域内に相当する。

市町村合併により一つの市となったものの、①奥羽山脈から延びる大釈迦丘陵・梵珠山系を境に分水嶺が異なること、②鎌倉時代以降郡制が布かれた時点で、旧浪岡町（浪岡地区）は津軽山辺郡に含められたが、旧青森市は外浜の領域であったことなど、二つの地区は、地理的にも歴史的にも大きく異なる背景がある。

遺跡は、梵珠山系に連なる前田目台地の標高 40 ～ 44 m に位置し、台地の一段下の東側には岩木川水系の大釈迦川が南流している。

国史跡指定のきっかけになった国道 7 号浪岡バイパス建設事業における発掘調査の成果により、遺跡の保存とバイパスの迂回が決定しており、史跡は迂回した国道 7 号浪岡バイパスの隣接地に所在している。

JR 青森駅から約 21.5 km（車で約 30 分）、新青森駅から約 17.5 km（車で約 22 分）で、史跡に最も近い JR 奥羽本線大釈迦駅からは約 2.4 km（車で約 3 分）の距離である。

2. 指定状況

名称：史跡高屋敷館遺跡

所在地：青森県南津軽郡浪岡町大字高屋敷字野尻
（現：青森県青森市浪岡大字高屋敷字野尻）

12 番/5 のうち実測 4,982 平方メートル、21 番のうち実測 14 平方メートル、23 番/1、23 番/2、23 番/6、29 番/1 のうち実測 303 平方メートル、37 番/1 のうち実測 1,347 平方メートル、38 番/1、38 番/2、40 番/1、40 番/2、40 番/7、41 番/1 のうち実測 603 平方メートル、41 番/5 のうち実測 783 平方メートル、41 番/6 のうち実測 1,281 平方メートル、41 番/16 のうち実測 633 平方メートル 右^{※原文ママ}の地域に介在する道路敷及び水路敷を含む。

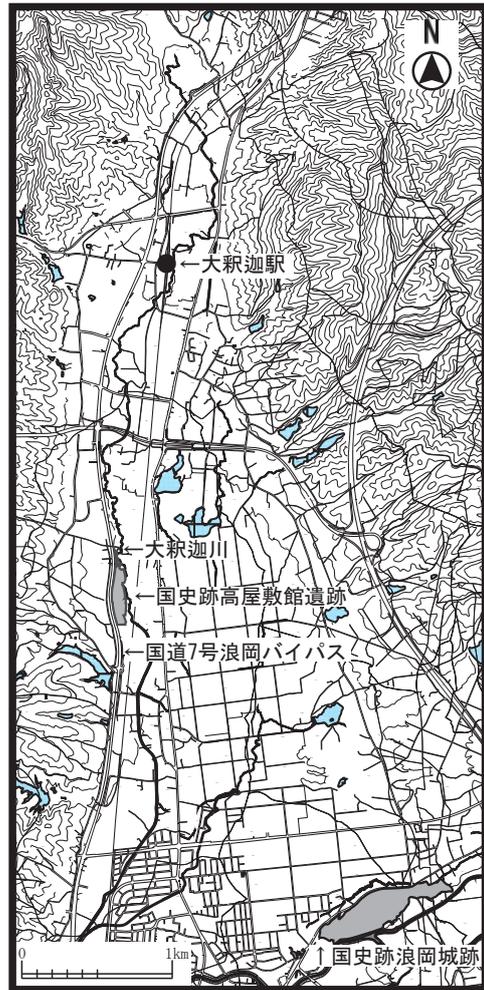
指定年月日：平成 13 年 1 月 29 日

官報号外第 15 号 文部科学省告示第 18 号

種別：史跡

面積：29,762.72 m²

指定理由：津軽中部に所在する大規模な濠と土塁を巡らした平安後期の環濠集落跡。濠と土塁を巡らす遺跡は、一般に弥生時代や中世に見られるが、古代のものは、近年、律令国家の直接支配が及ばない東北地方北部と北海道南部のみに分布することが明らかになった。本遺跡は、同種の遺跡を代表し、この地域の社会情勢を具体的に示すものとして重要である。



第 1 図 史跡高屋敷館遺跡位置図

第 2 節 事業の実施体制・概要

1. 事務局体制

平成 18 年度

教育長	角田 詮二郎
教育部長	古山 善猛
教育次長	相馬 政美
参事・文化財課長事務取扱	遠藤 正夫
主 幹	多田 弘仁
主 査	工藤 幸子
文化財主事	木村 淳一
”	小野 貴之
”	児玉 大成
”	設楽 政健
主 事	當麻 良人
”	越谷 美由紀
”	田中 浩司
”	竹ヶ原 亜希（担当）

平成 19 年度

教育長	角田 詮二郎
-----	--------

教育部長	古山 善猛	〃	児玉 大成
教育次長	相馬 政美	〃	設楽 政健
参事・文化財課長事務取扱	遠藤 正夫	主 事	吹田 夕貴
主 幹	藤村 和人	〃	對馬 広将 (担当)
主 査	工藤 幸子	平成 23 年度	
文化財主査	木村 淳一	教 育 長	月永 良彦
文化財主事	小野 貴之	教育部長	小野寺 晃
〃	児玉 大成	教育次長	金澤 保
〃	設楽 政健	文化財課長	吉田 亘
主 事	吹田 夕貴	主 幹	木村 浩一 (担当)
〃	竹ヶ原 亜希 (担当)	〃	川村 範規
平成 20 年度		主 査	齊藤 寛和
教 育 長	角田 詮二郎	文化財主査	木村 淳一
教育部長	古山 善猛	〃	小野 貴之
教育次長	今村 貴宏	〃	児玉 大成
参事・文化財課長事務取扱	遠藤 正夫	〃	設楽 政健
主 幹	藤村 和人	主 事	吹田 夕貴
主 査	工藤 幸子	〃	中村 健祐
〃	工藤 雅仁	〃	三上 貴子
文化財主査	木村 淳一	平成 24 年度	
〃	小野 貴之	教 育 長	月永 良彦
文化財主事	児玉 大成	教育部長	小野寺 晃
〃	設楽 政健	理 事	工藤 壽彦
主 事	越谷 美由紀	教育次長	金澤 保
〃	竹ヶ原 亜希 (担当)	文化財課長	吉田 亘
平成 21 年度		主 幹	木村 浩一 (担当)
教 育 長	月永 良彦	〃	川村 範規
教育部長	小林 順一	主 査	齊藤 寛和
教育次長	今村 貴宏	文化財主査	木村 淳一
文化財専門監兼文化財課長	遠藤 正夫	〃	小野 貴之
主 幹	上野 富士子	〃	児玉 大成
主 査	工藤 幸子	〃	設楽 政健
〃	工藤 雅仁	主 事	中村 健祐
文化財主査	木村 淳一	〃	三上 貴子
〃	小野 貴之	平成 25 年度	
〃	児玉 大成	教 育 長	月永 良彦
文化財主事	設楽 政健	教育部長	福井 正樹
主 事	高石 知世	理 事	工藤 壽彦
〃	吹田 夕貴	教育次長兼文化財課長	成田 聖明
〃	對馬 広将 (担当)	文化財課長	(～H26.2.7) 吉田 亘
平成 22 年度		主 幹	木村 浩一 (担当)
教 育 長	月永 良彦	〃	川村 範規
教育部長	小林 順一	文化財主査	木村 淳一
理事兼教育次長	小野寺 晃	〃	小野 貴之
文化財専門監兼文化財課長	遠藤 正夫	〃	児玉 大成
主 幹	上野 富士子	〃	設楽 政健 (担当)
主 査	高石 知世	主 事	中村 健祐
文化財主査	木村 淳一	〃	三上 貴子
〃	小野 貴之		

平成 26 年度		理 事	工藤 裕司
教 育 長	月永 良彦	文化財課長	渡邊 薫
教育部長	福井 正樹	主 幹	工藤 一天
理 事	成田 聖明	”	児玉 大成
文化財課長	白取 慎也	主 査	田中 美奈子
副 参 事	木村 浩一 (担当)	”	工藤 洋樹
主 幹	堰野端 活昭	”	辻村 泰成
主 査	齊藤 寛和	”	里村 真吾
”	澤谷 結美子	文化財主査	木村 淳一 (担当)
文化財主査	木村 淳一 (担当)	”	小野 貴之
”	小野 貴之	”	設楽 政健
”	児玉 大成	主 事	須田 祐未子
”	設楽 政健	平成 30 年度	
主 事	雪田 幸誠	教 育 長	成田 一二三
”	笹田 貴子	教育部長	工藤 裕司
平成 27 年度		理 事	佐々木 淳
教 育 長	月永 良彦	参事兼文化財課長	葛西 俊一
教育部長	成田 聖明	主 幹	工藤 一天
理 事	横山 克広	”	児玉 大成
文化財課長	白取 慎也	主 査	田中 美奈子
主 幹	伊丸岡 裕之	”	工藤 洋樹
”	児玉 大成	”	辻村 泰成
主 査	齊藤 寛和	”	里村 真吾
”	澤谷 結美子	文化財主査	木村 淳一 (担当)
”	辻村 泰成	”	小野 貴之
文化財主査	木村 淳一 (担当)	”	設楽 政健
”	小野 貴之	主 事	工藤 耕治
”	設楽 政健		
主 事	雪田 幸誠		
”	里村 真吾		
平成 28 年度			
教育長職務執行者	(~H28.6.2) 佐藤 克則		
教 育 長	成田 一二三		
教育部長	石澤 幸造		
理 事	横山 克広		
文化財課長	渡邊 薫		
主 幹	藤 一天		
”	児玉 大成		
主 査	工藤 洋樹		
”	澤谷 結美子		
”	辻村 泰成		
”	里村 真吾		
文化財主査	木村 淳一 (担当)		
”	小野 貴之		
”	設楽 政健		
主 事	須田 祐未子		
平成 29 年度			
教 育 長	成田 一二三		
教育部長	横山 克広		

2. 事業概要

本事業は、高屋敷館遺跡が平成 13 年 1 月 29 日に国の史跡に指定されたことを受け、旧浪岡町が平成 13 年度及び平成 15 年度に史跡指定地の公有化を実施し、その後、平成 17 年度に合併した青森市が史跡の保護に向けた盛土工事を中心に進めてきた。

平成 19 年度には、整備基本構想及び基本計画を策定し、平成 20 年 1 月 21 日に『国指定史跡高屋敷館遺跡 環境整備基本構想・基本計画』としてまとめている（青森市教育委員会 2008）。基本理念として、国史跡高屋敷館遺跡の次世代への継承のため適正な保存を図り、多くの人に親しまれるような活用を目指す前提で整備を進めることとしている。また、基本計画では、①復元的整備区域、②保存・修景区域、③学習施設等設置区域のゾーニングを前提に保存・保護事業、遺構復元整備、活用・ガイダンス施設等についても触れている。

平成 24 年度からは遺構の表示に関する工事等を進め、土塁・壕・柵・門などの一部の遺構については、立体表示とし、竪穴建物跡については、整備対象とした 11 世紀前半の建物 12 棟について平面表示

とした。また、史跡の南側に国土交通省が史跡見学者も利用できる簡易パーキングを整備することとなり、平成30・31年度の2カ年で進めることとなった。その他、ガイダンス施設については、既に供用されている青森市中世の館の展示室の一部を市の単独経費で改修し、青森県埋蔵文化財調査センターから譲与された発掘調査の出土品の展示なども含め、平成31年度から供用することとしている。

年度別の事業実績については、第1表を参照されたい。

第3節 年度別整備工事等費用

平成18年度

環境整備工事（有）清工業 4,866,750円

平成19年度

環境整備工事（有）水木土建 5,461,450円

平成20年度

環境整備工事（有）石村興産 7,196,700円

平成21年度

環境整備工事（有）開成工業 5,575,500円

環境整備工事（有）開成工業 2,195,550円

平成22年度

環境整備工事（有）小笠原重機建設 6,995,100円

平成23年度

実施設計 ハートエンジニアオフィス（有） 1,575,000円

環境整備工事（有）開成工業 3,465,000円

平成24年度

環境整備工事（有）開成工業 4,389,000円

平成25年度

環境整備工事（有）開成工業 3,579,800円

平成26年度

実施設計 （有）ウッドサークル 1,630,800円

環境整備工事（有）水木土建 4,082,400円

平成27年度

環境整備工事（有）開成工業 5,130,000円

平成28年度

設計調整 （有）ウッドサークル 842,400円

環境整備工事（有）鎌田組 4,785,480円

平成29年度

工事監理 （有）ウッドサークル 1,566,000円

環境整備工事（株）アオケン 17,111,520円

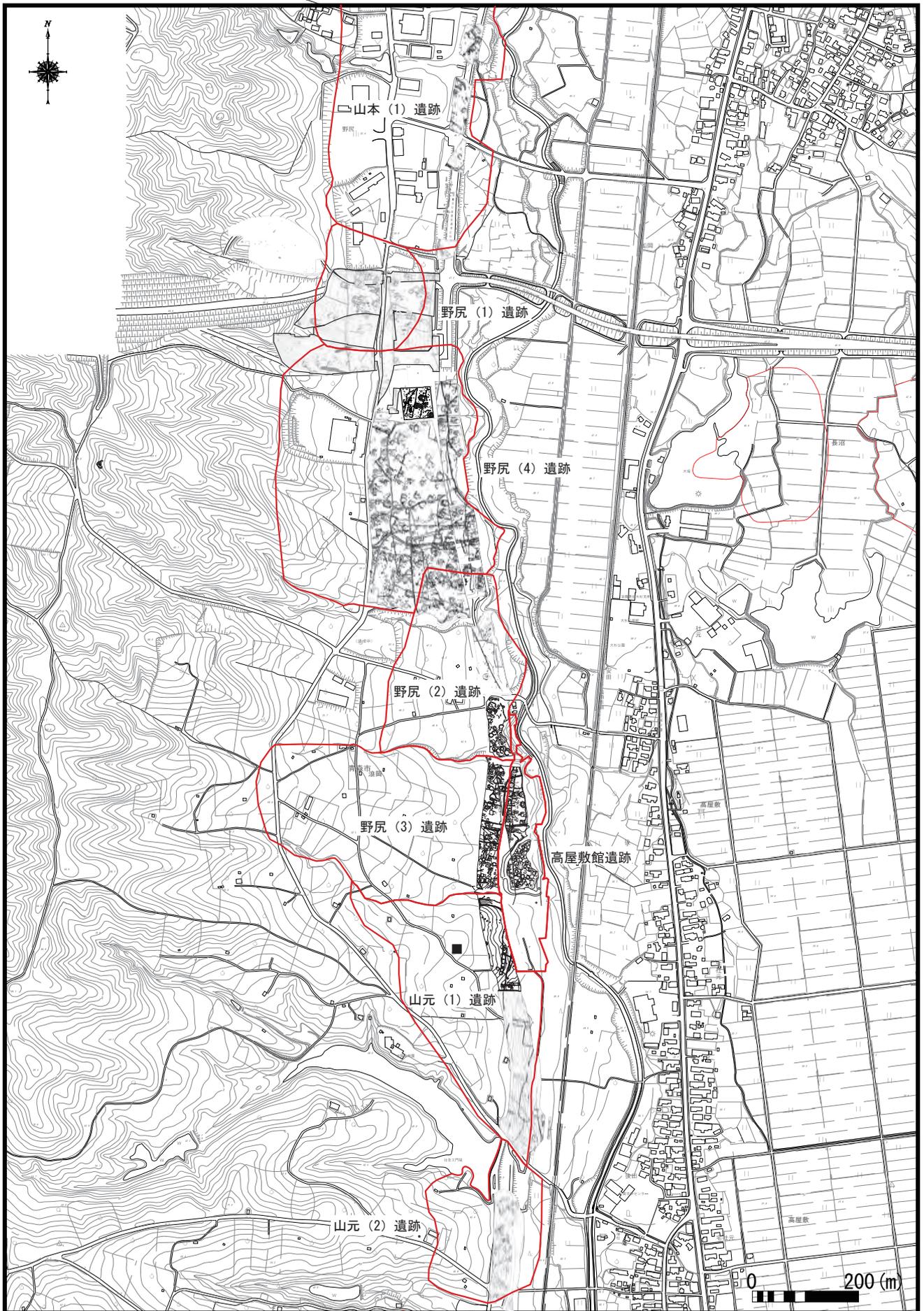
平成30年度

工事監理 （有）ウッドサークル 2,116,800円

環境整備工事（株）市川土建 45,908,640円

年度	13	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	計
(対象地区) 内容	公有化事業	公有化事業	遺構確認調査 (注要部西側) 既調査区遺構埋め戻し	遺構確認調査 (注要部西側) 遺構埋め戻し	南塚他保護盛土 (注要部南側)	南塚・東塚調査区保護盛土 (注要部南側)	北塚既調査区保護盛土 (注要部内)	既調査区保護盛土 (北側) 既調査区保護盛土 (北側)	既調査区保護盛土・緑化 (北側)	保護盛土 (注要部外南側)	既調査区保護盛土 (注要部西側)	北塚の立体表示 (注要部内)	南塚及び土塁の立体表示 (注要部西側)	南塚の立体表示 (注要部内)	(注要部)の平面表示 (東上相層)・主要部の盛土・内郭周辺の園路の整備	(注要部)の平面表示 (アスファルト舗装)・柵復元・園路整備(砕石布設)・植生土のう設置	(全体)堅穴建物跡の平面表示(舗装)・植復元・遺構埋め戻し・芝張・園路整備等	
報告			報告 「国史跡高屋敷遺跡環境整備報告書Ⅴ」	報告 「国史跡高屋敷遺跡環境整備報告書Ⅱ」													報告 「国史跡高屋敷遺跡環境整備報告書Ⅲ」	
公有化面積(m ²)	8,245.74	20,868.12						648.86										29,762.72
遺構保護保存工事(m ²)			358	900	550	1,630	1,677	3,589	3,768	1,777								14,249
整備工事(m ²)											1,559	1,881	490	1,542	961	2,640	7,580	16,653
発掘調査(m ²)				70														1,340
事業費	66,947	163,781	5,000	11,132	5,412	8,210	7,270	7,818	7,020	8,452	4,406	5,981	6,670	5,178	5,622	18,692	49,150	386,741
国庫支出金	53,330	122,657	2,500	5,400	2,500	4,105	3,635	3,909	3,510	4,226	2,203	2,990	3,335	2,589	2,811	9,346	24,575	253,621
県支出金	6,666	15,332	400	400	400	320	320	375	224	135								24,572
起債																	7,000	22,100
一般財源	6,951	25,792	2,100	5,332	2,512	3,785	3,315	3,534	3,286	4,091	2,203	2,991	3,335	2,589	2,811	2,346	2,475	79,448

第1表 史跡高屋敷遺跡年度別事業実績表



第2図 高屋敷館遺跡及び周辺の遺跡

第Ⅱ章 史跡整備の設計・施工内容

第1節 本報告以前の施工内容

1. 平成16年度

青森県埋蔵文化財調査センターが調査を実施した部分の保護盛土が極めて薄く、凍上や雑草木の根による二次的遺構破壊が懸念されたため、堅穴建物跡を中心とした 358 m²を対象に、人力で埋戻しを実施した。

※浪岡町教育委員会 2005『平成16年度浪岡町文化財紀要V』所収

2. 平成17年度

史跡南側の史跡境界の地点から主要部（内郭）に向けて上幅 5 m、延長 142 m の作業用通路（900 m²）を造成した。

※青森市教育委員会浪岡教育事務所 2006『国史跡高屋敷館遺跡環境整備報告書Ⅱ』所収



第3図 平成17年度工事対象範囲図

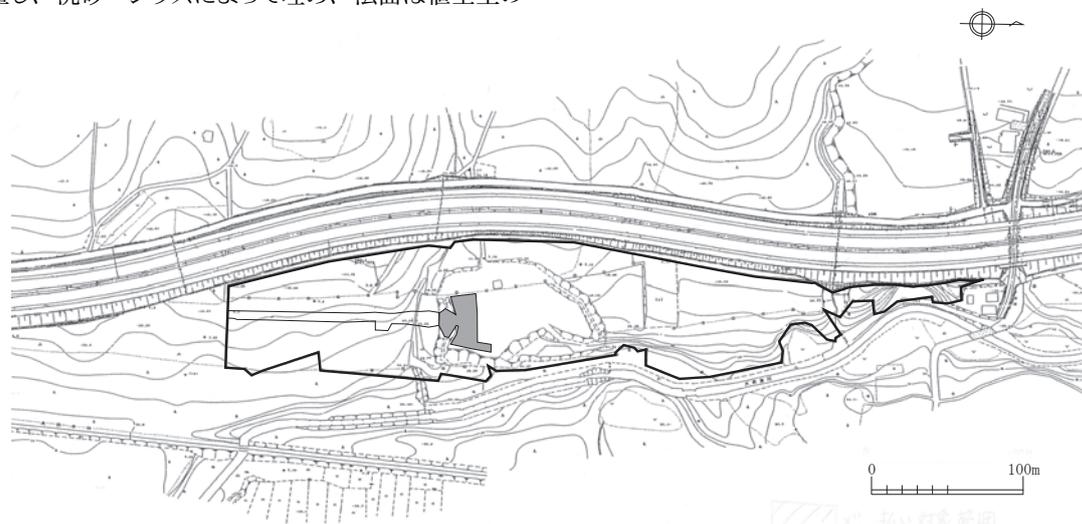
第2節 平成18～30年度の史跡整備設計・施工内容

1. 平成18年度

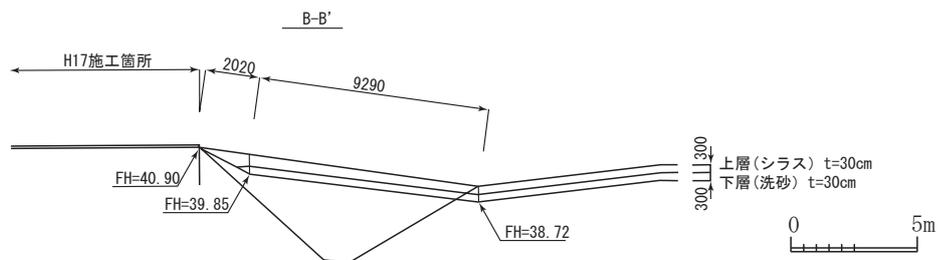
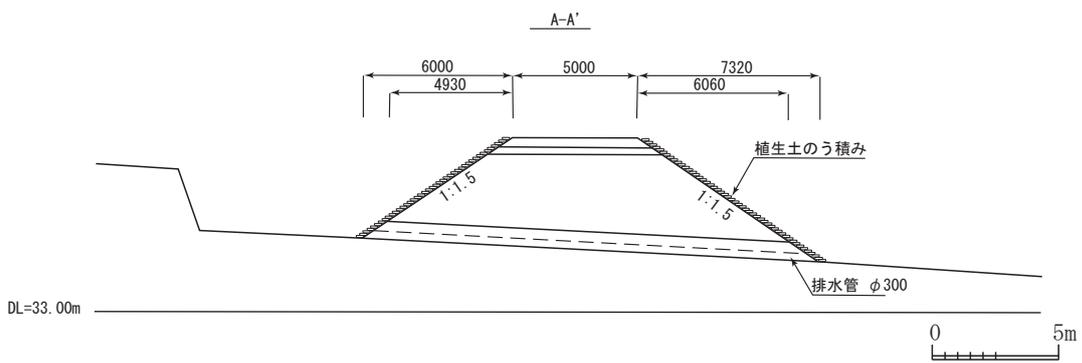
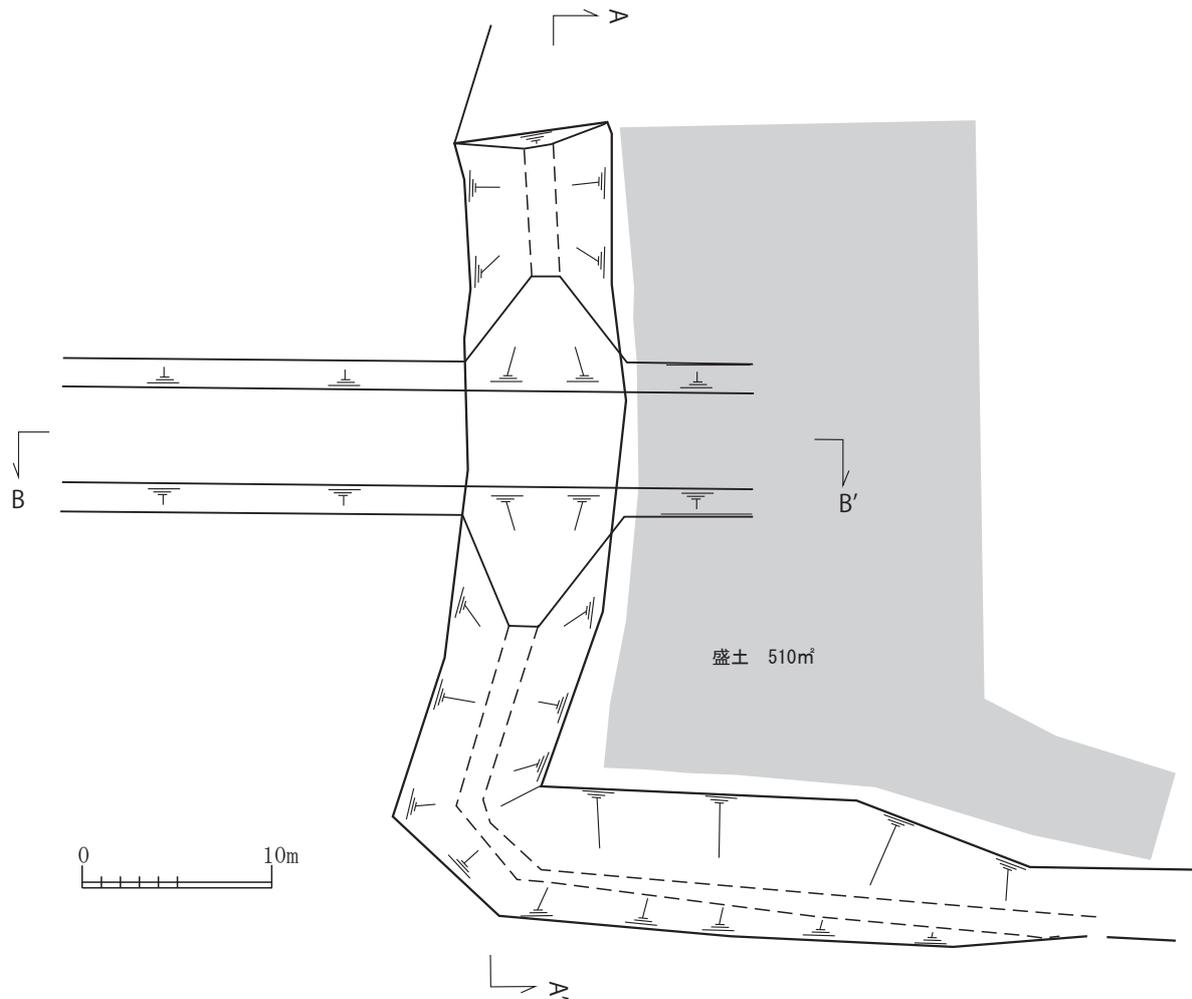
平成17年度に造成した作業用通路から内郭に入るため、壕の一部（40 m²）を埋め、作業用通路を造成する工事を計画した。壕は最下部に排水用の暗渠管を設置し、洗砂・シラスによって埋め、法面は植生土の

う積みによって崩落を防止した。

また、内郭の一部 510 m²に上層シラス（t=30cm）、下層洗砂（t=30cm）の保護盛土を実施した。



第4図 平成18年度工事対象範囲図



第5図 平成18年度工事設計図



壕盛土着工前 (N→)



壕盛土完成 (N→)



壕盛土砂搬入 (NW→)



壕盛土砂転圧状況 (W→)



壕盛土植生土のう設置状況 (N→)



壕盛土暗渠管設置状況 (E→)



壕盛土着工前 (W→)



壕盛土完成 (W→)



内郭盛土着工前 (W→)



内郭盛土完成 (W→)



内郭盛土砂敷均し状況 (E→)



内郭盛土砂転圧状況 (W→)



内郭盛土砂厚さ測定状況 (S→)



内郭盛土シラス搬入状況 (N→)



内郭盛土シラス転圧状況 (W→)



内郭盛土シラス厚さ測定状況 (S→)

2. 平成19年度

平成18年度に実施した内郭の保護盛土箇所から北側へ保護盛土を延ばす工事と、南壕～東側の一部にかけて壕の埋戻しと法面工を計画した。

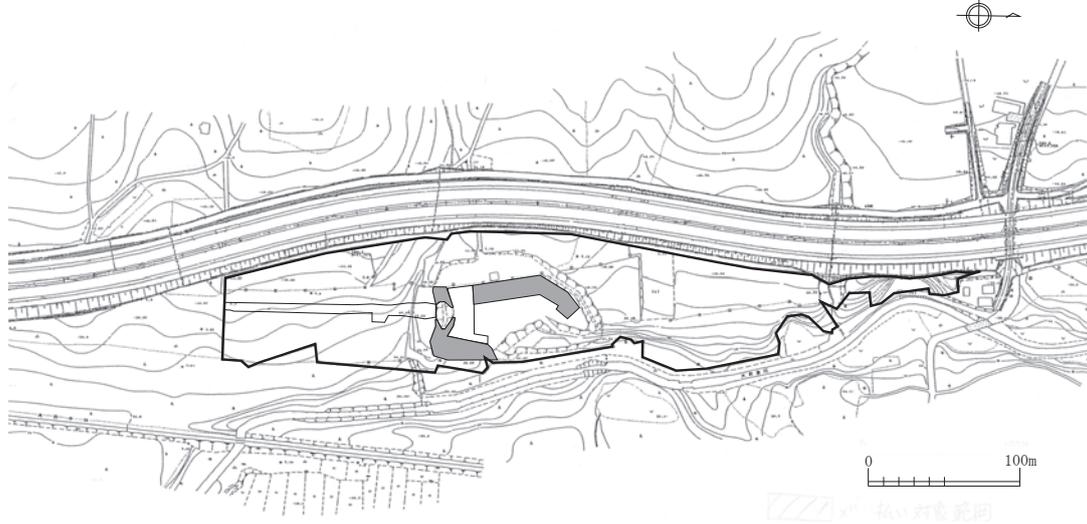
当初の設計から、工事施工に際し設計した地形と実際の地形が異なる箇所があり、数量に変更が生じたこ

とと事業促進のため、内郭平場の保護盛土を増工した。

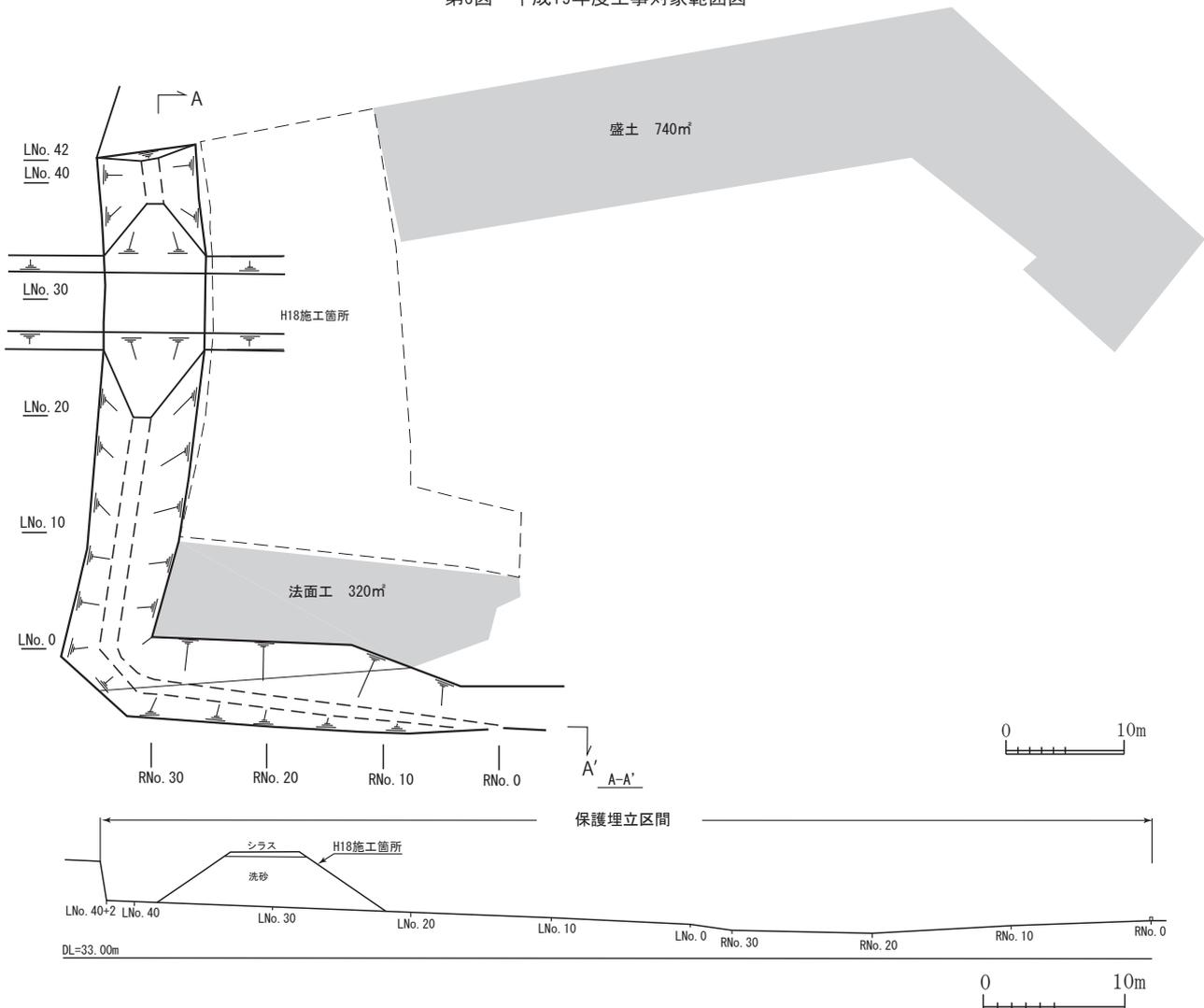
盛土(シラス) 当初 130m³→ 570m³

内郭盛土 当初 60 m²→ 740 m²

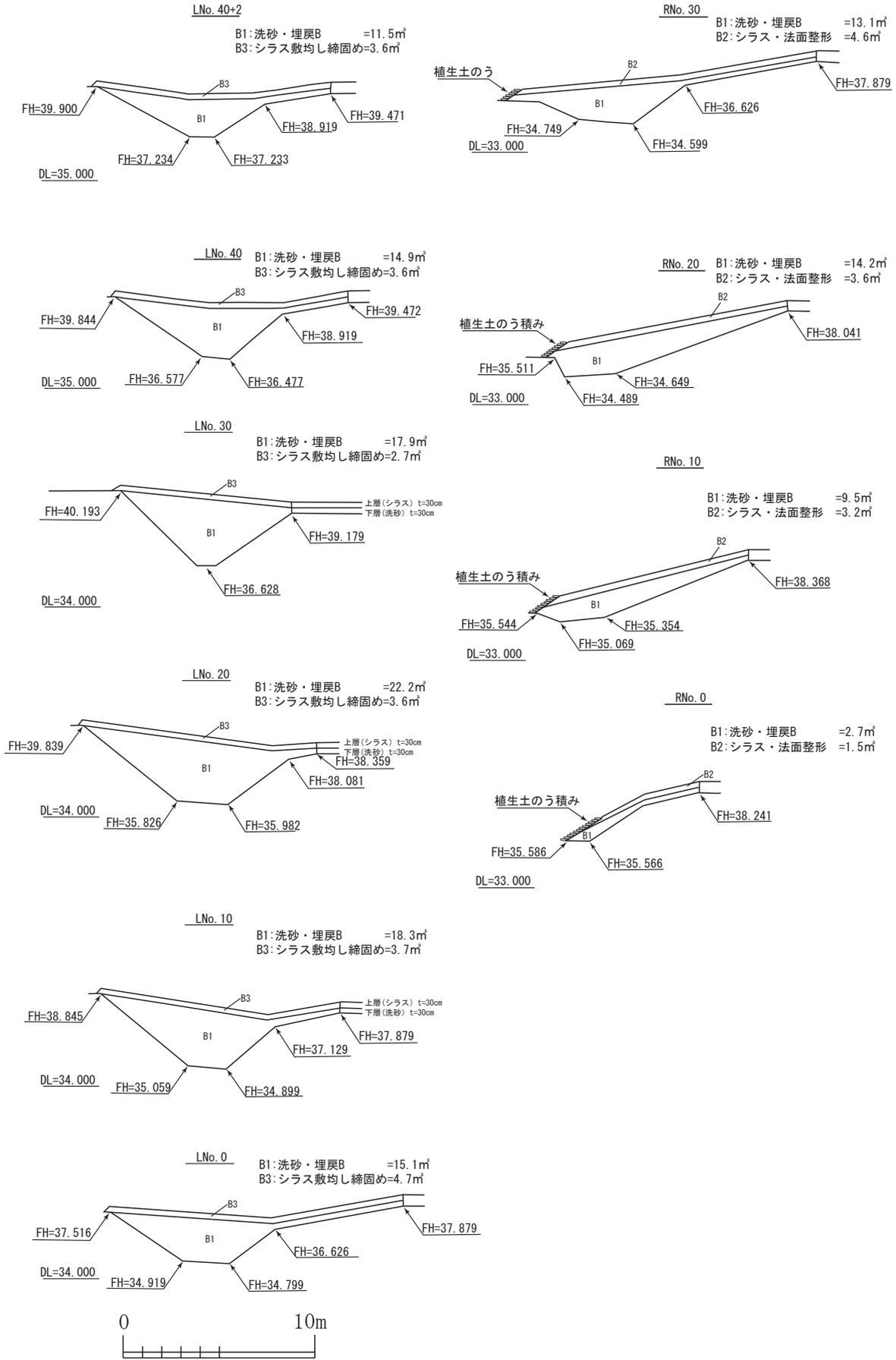
法面整形 当初 280 m²→ 320 m²



第6図 平成19年度工事対象範囲図



第7図 平成19年度工事設計図①



第8図 平成19年度工事設計図②



壕盛土・法面工着工前 (E→)



壕盛土・法面工完成 (E→)



壕盛土・法面工砂敷均し状況 (S→)



壕盛土・法面工植生土のう積上げ状況 (SE→)



南西側壕盛土着工前 (NE→)



南西側壕盛土完成 (NE→)



南西側壕盛土敷均し状況 (E→)



南西側壕盛土転圧状況 (E→)



内郭盛土着工前 (S→)



内郭盛土完成 (S→)



内郭盛土砂敷均し状況 (N→)



内郭盛土幅測定状況 (E→)



内郭盛土砂厚さ測定状況 (S→)



内郭盛土シラス転圧状況 (S→)



内郭盛土法面補正状況 (W→)

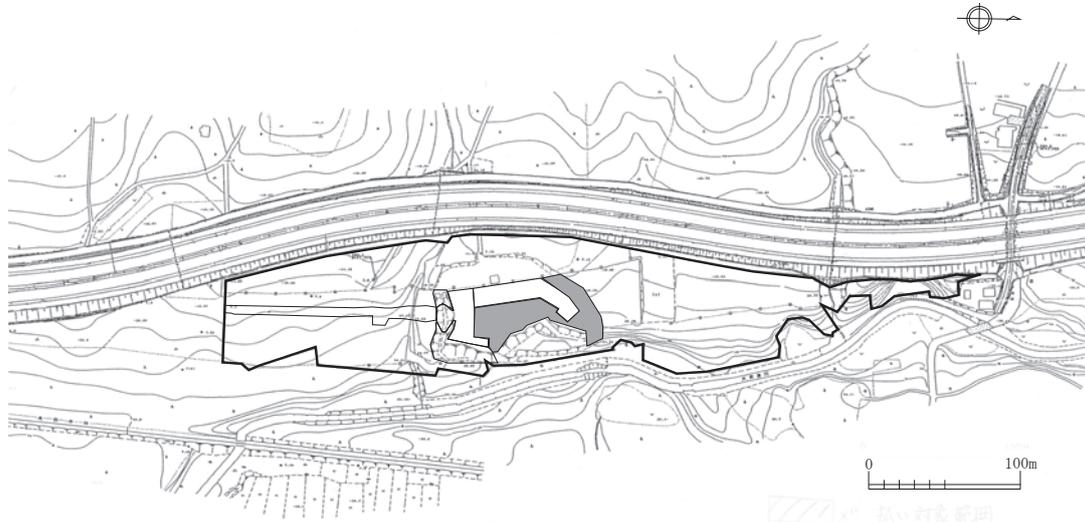


内郭盛土シラス厚さ測定状況 (S→)

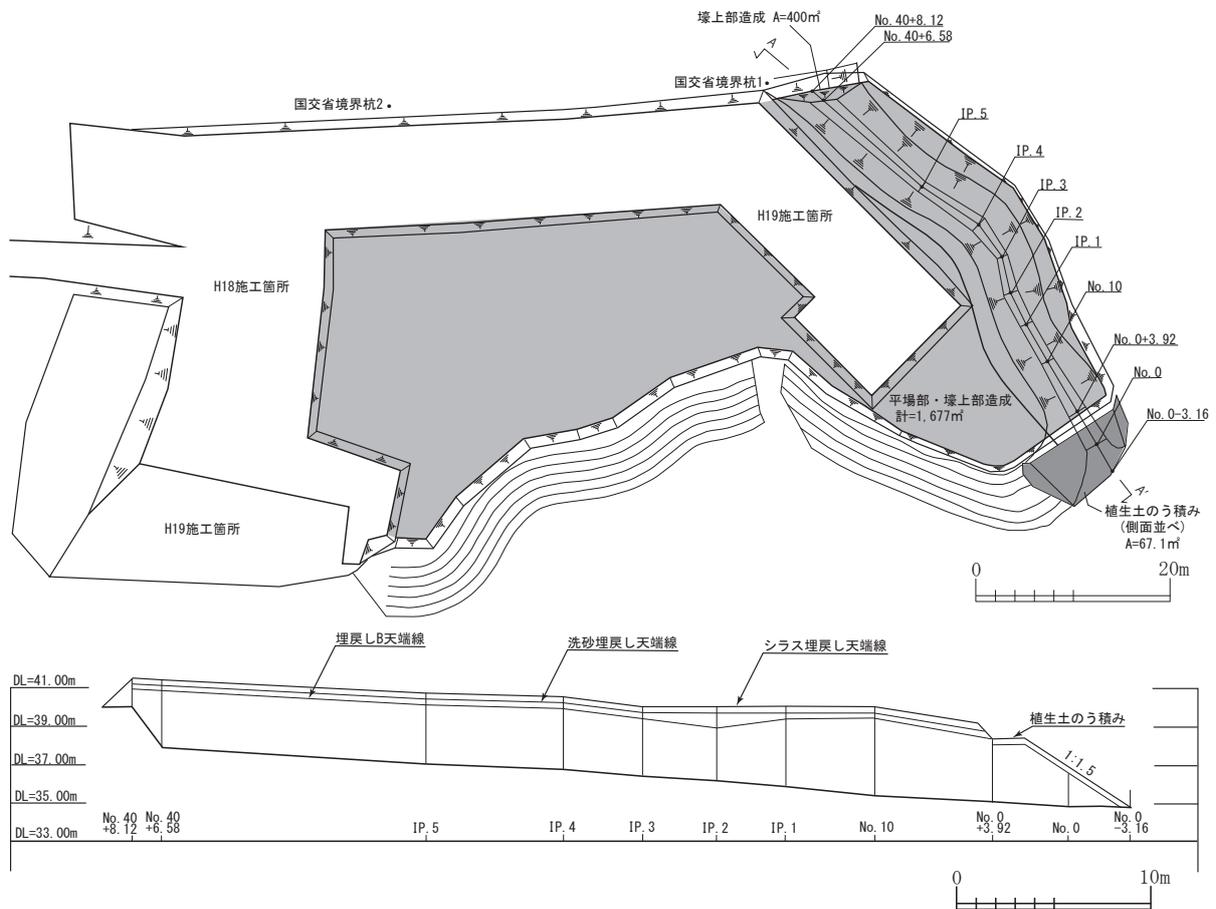
3. 平成20年度

平成19年度までに実施した内郭の保護盛土箇所から、青森県埋蔵文化財調査センターが発掘調査を行った北壕の埋戻しと法面工、内郭の748㎡を対象とした保護盛土を計画した。

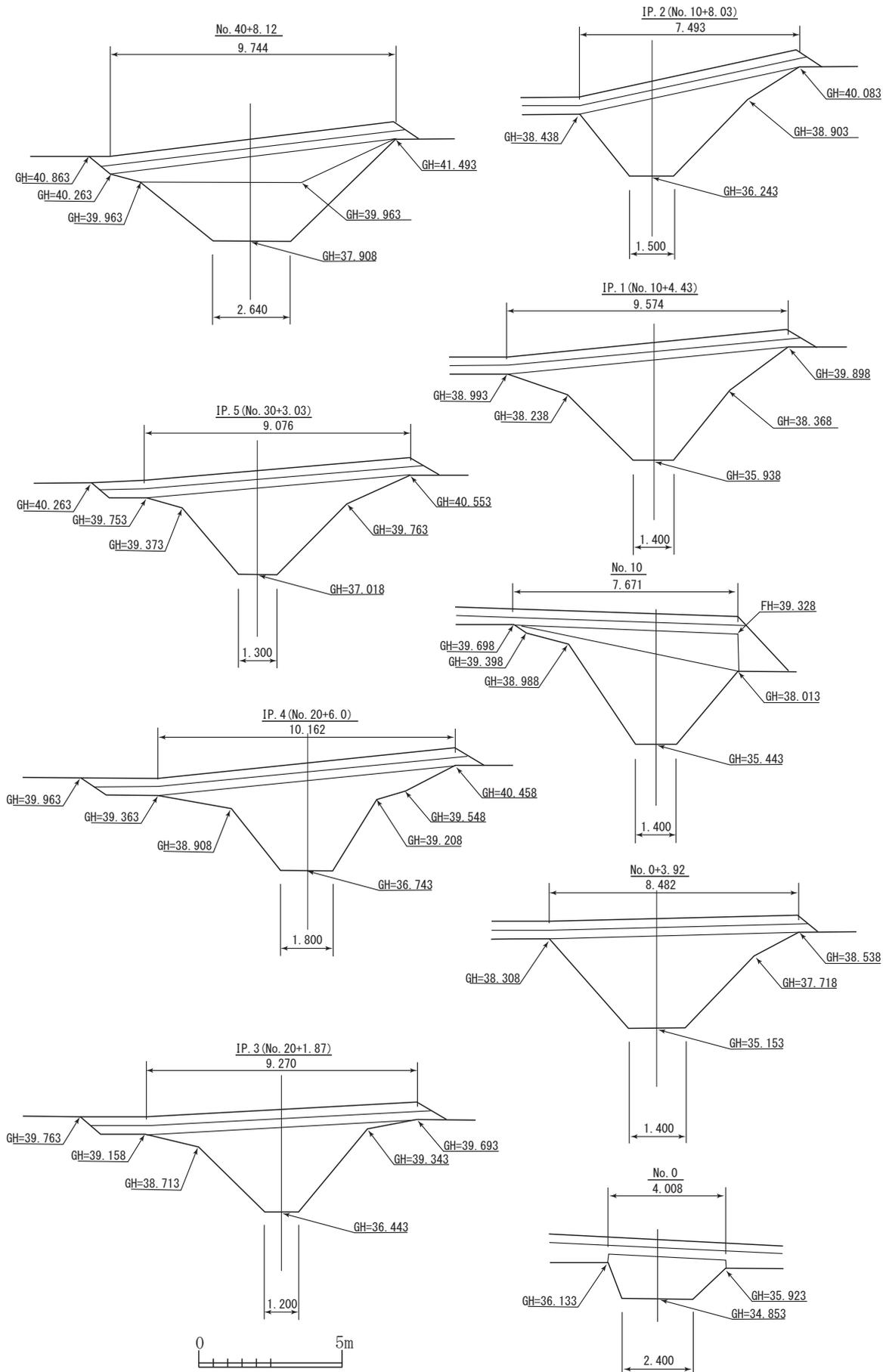
工事に際し、内郭の平場の保護盛土について増工し、平場と壕上部の土工について1,677㎡を対象に工事を実施した。



第9図 平成20年度工事対象範囲図



第10図 平成20年度工事設計図①



第11図 平成20年度工事設計図②



内郭盛土着工前 (S→)



内郭盛土完成 (S→)



内郭盛土シラス敷均し状況 (S→)



内郭盛土幅測定状況 (S→)



法面工着工前 (W→)



法面工完成 (W→)



壕盛土敷均し状況 (N→)

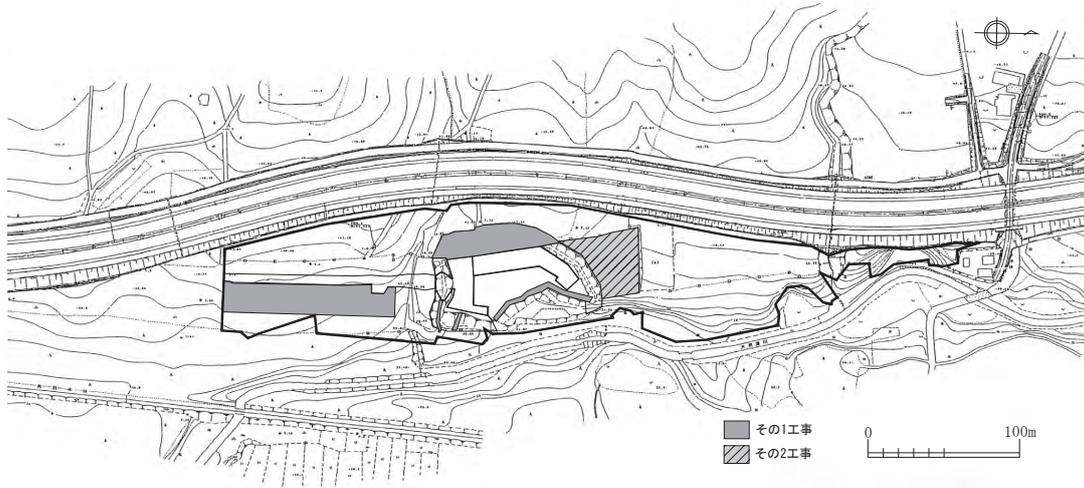


壕盛土転圧状況 (S→)

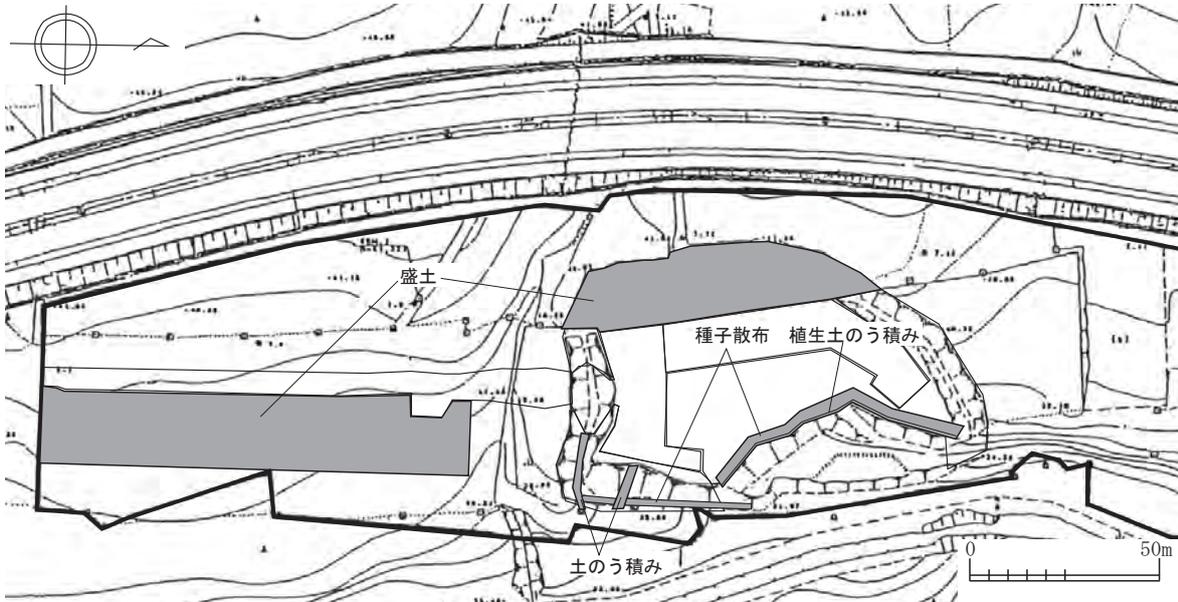
4. 平成21年度

内郭の西側の地区 (1,090㎡) と史跡南側の作業道路の東側 (1,500㎡) を対象とした保護盛土と内郭東側斜面の植生土のう積み (74.0㎡)、種子散布 (340.0㎡)

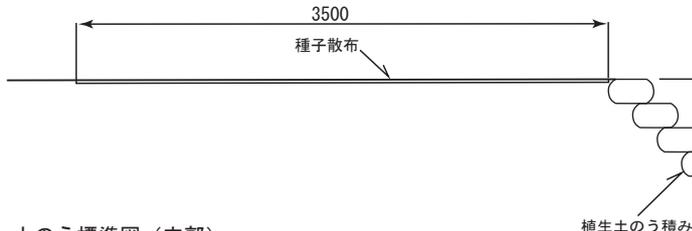
等の工事 (その1工事) と、主要部の北側 (999㎡) を対象とした保護盛土工事 (その2工事) の二つの工事を実施した。



第12図 平成21年度工事対象範囲図



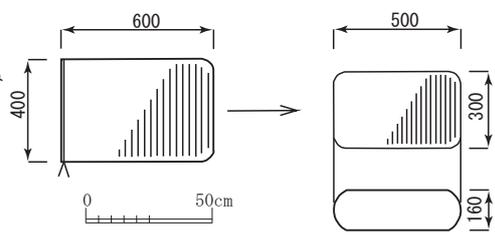
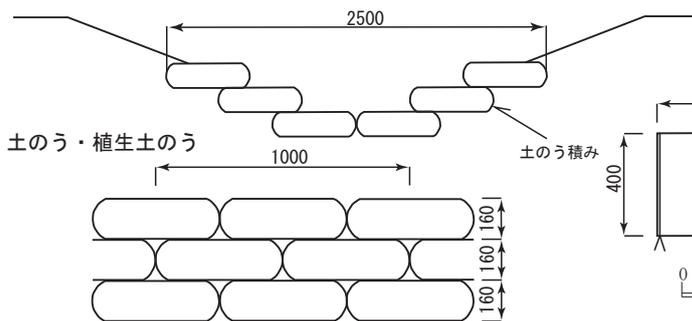
植生土のう・種子散布標準図 (内郭)



盛土標準図 (内郭・外郭平場)



土のう標準図 (内郭)



第13図 平成21年度工事 (その1) 設計図



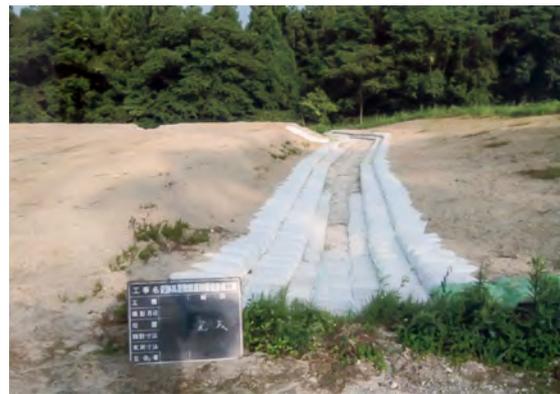
内郭盛土着工前 (N→)



内郭盛土完成 (N→)



内郭土のう工着工前 (W→)



内郭土のう工完成 (W→)



内郭土のう工着工前 (W→)



内郭土のう工完成 (W→)



内郭植生土のう工・種子吹付着工前 (N→)



内郭植生土のう工・種子吹付完成 (N→)



内郭植生土のう積み状況 (S→)



内郭盛土敷均し状況 (N→)



内郭盛土転圧状況 (E→)



内郭土のう積み状況 (ES→)



外郭盛土着工前 (S→)



外郭盛土完成 (S→)



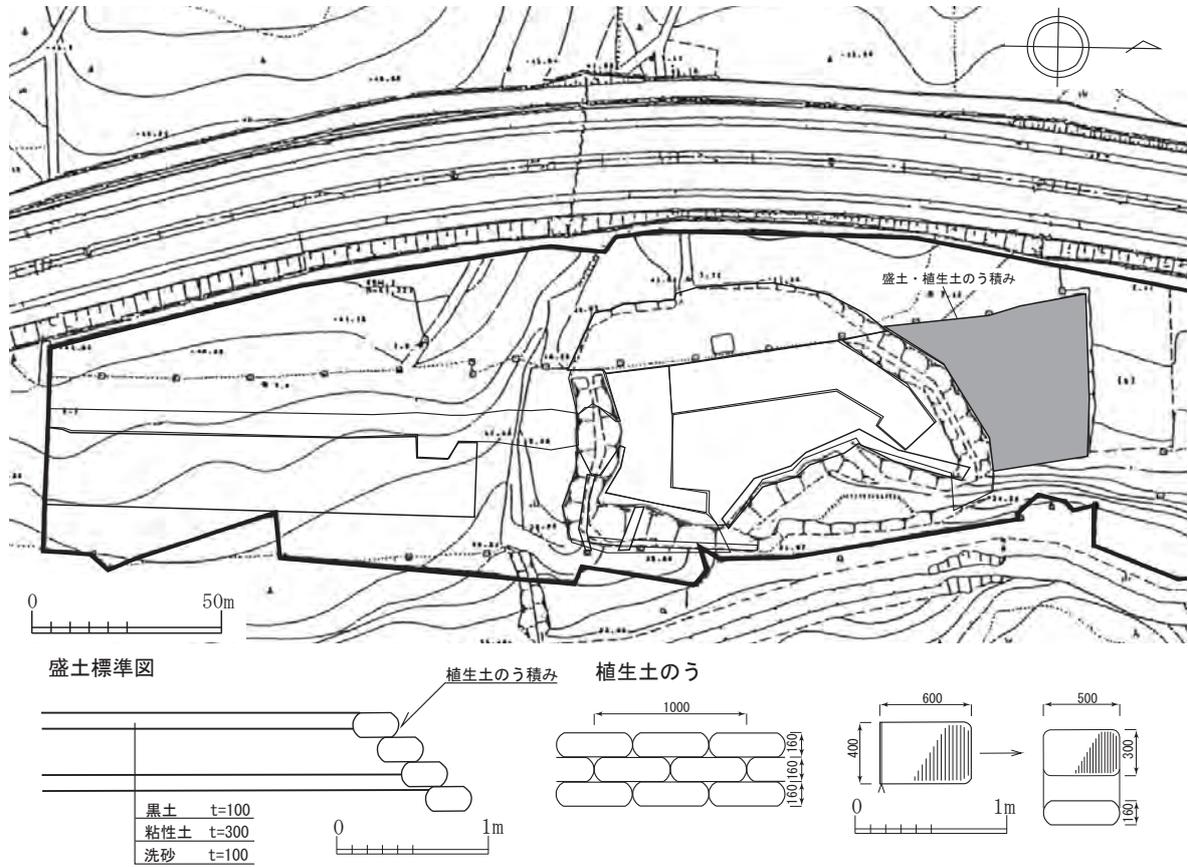
外郭盛土敷均し状況 (W→)



外郭盛土シラス厚さ測定状況 (S→)

その2工事は最下層に洗砂 (t=10cm)、中層に粘性土 (t=30cm)、表層に黒色土 (t=10cm) で盛土を行い、東側の斜面には植生土のう積みを実施した。

なお、事業促進のため、保護盛土 (L=27m → 35m) と植生土のう積み面積 (24 m² → 29 m²) を増工している。



第14図 平成21年度工事 (その2) 設計図



盛土着工前 (SE→)



盛土完成 (SE→)



盛土砂敷均し状況 (SE→)



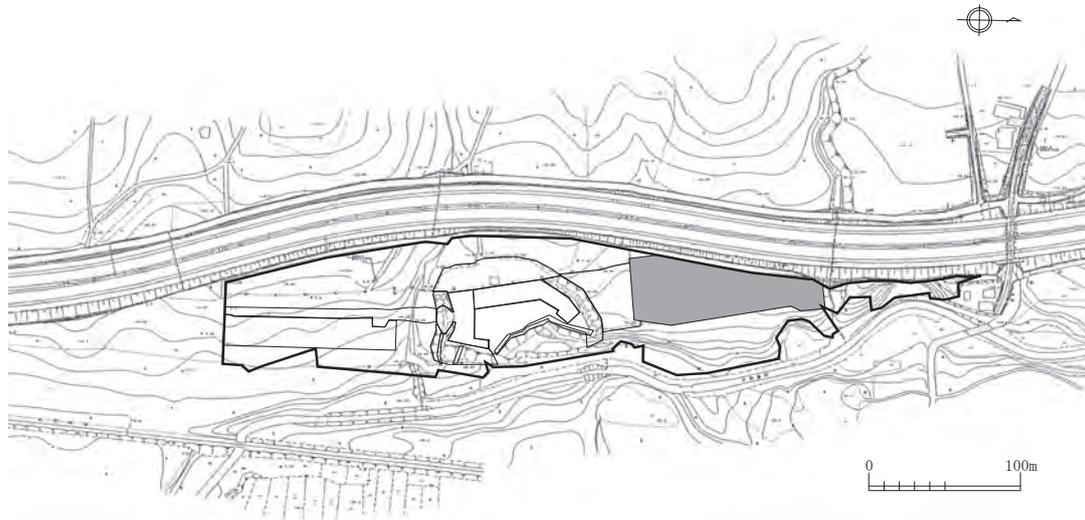
盛土黒土敷均し状況 (SE→)

写真8 平成21年度工事 (その2) 写真

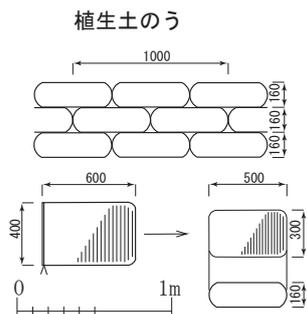
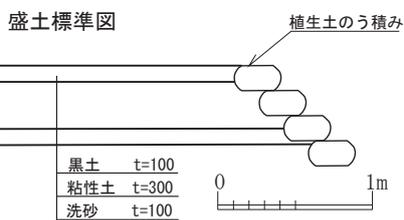
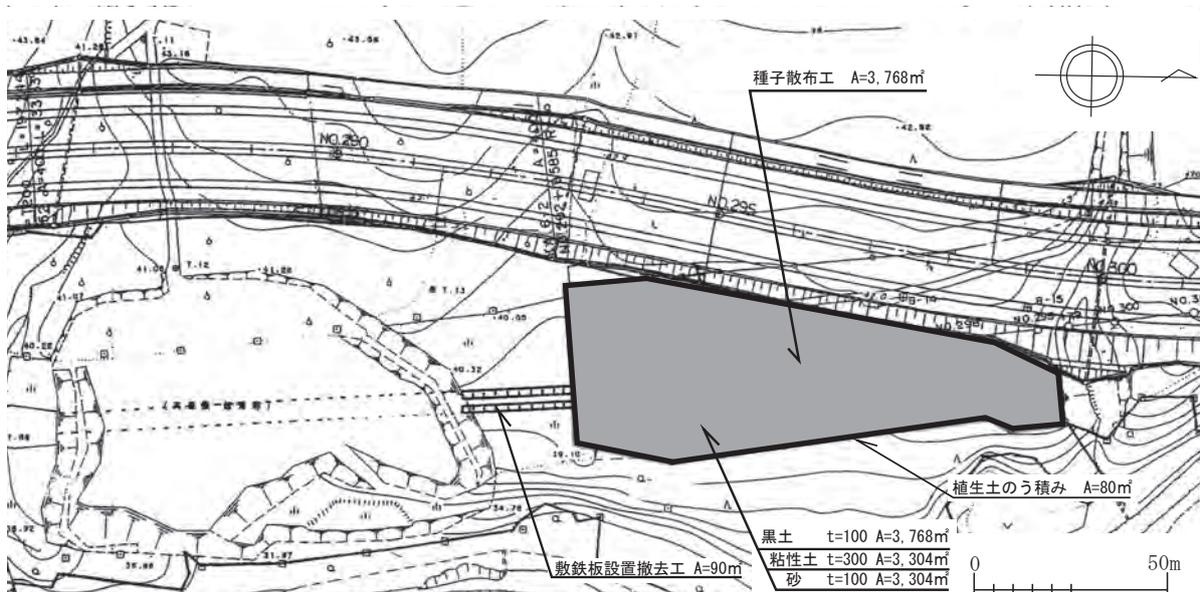
5. 平成22年度

平成21年度対象地の北側 2,992 m²を対象に、前年度と同様の盛土、法面には植生土のう積みを行い、

加えて種子散布を実施した。なお、事業促進のため、対象面積を 3,768 m²に増工している。



第15図 平成22年度工事対象範囲図



盛土着工前 (S→)



盛土完成 (S→)



植生土のう積み上げ状況 (SE→)



盛土黒土厚さ計測状況 (W→)

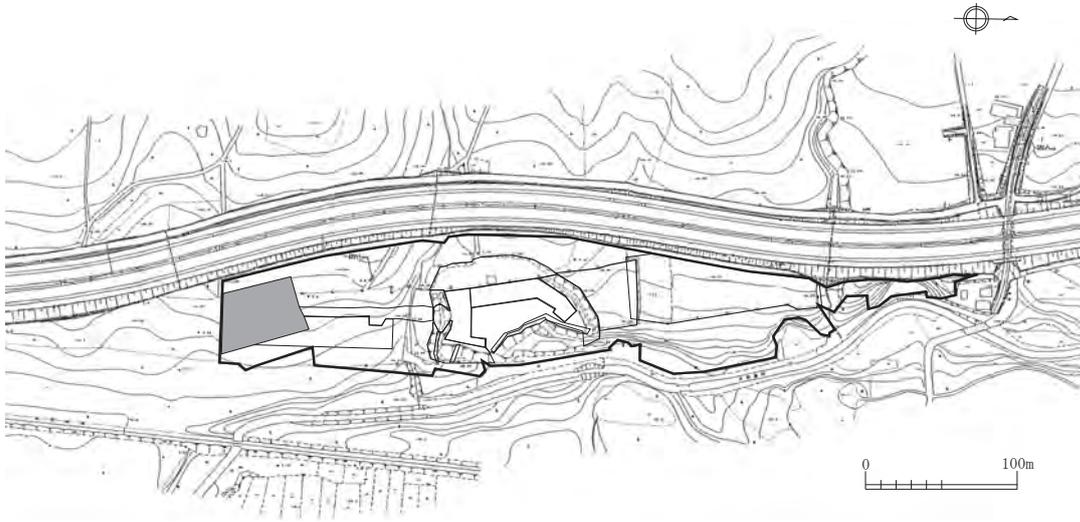
第16図 平成22年度工事設計図

写真9 平成22年度工事写真

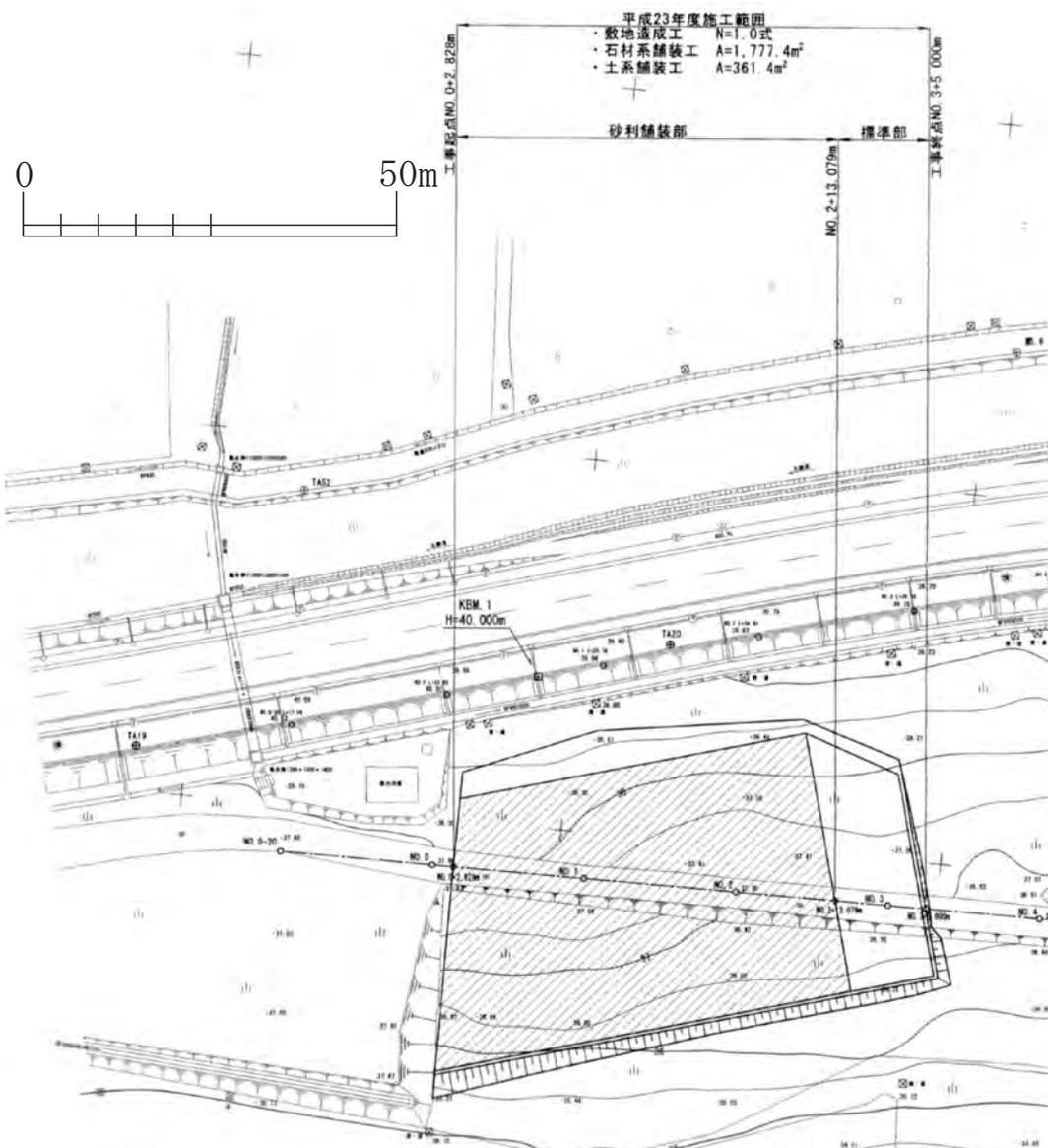
6. 平成23年度

史跡範囲南端の1,777㎡を対象に、敷砂利を行う計画で工事实施した。なお、工事途中で盛土の土量が

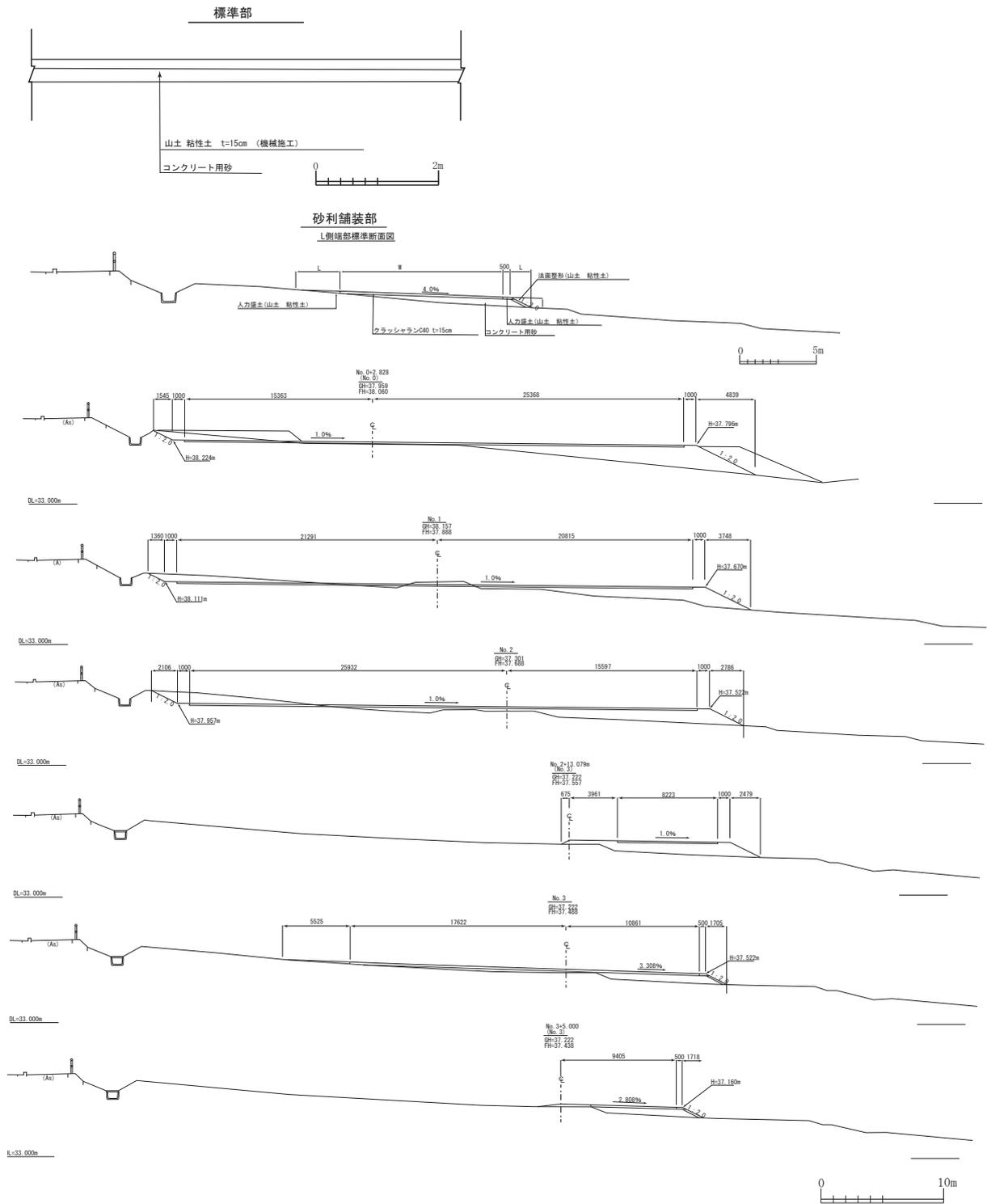
想定より増加したため、敷砂利面積を250㎡に変更し、法面部分の植生土のう積みを追加している。



第17図 平成23年度工事対象範囲図



第18図 平成23年度工事設計図①



第19図 平成23年度工事設計図②



盛土着工前 (S→)



盛土完成 (S→)



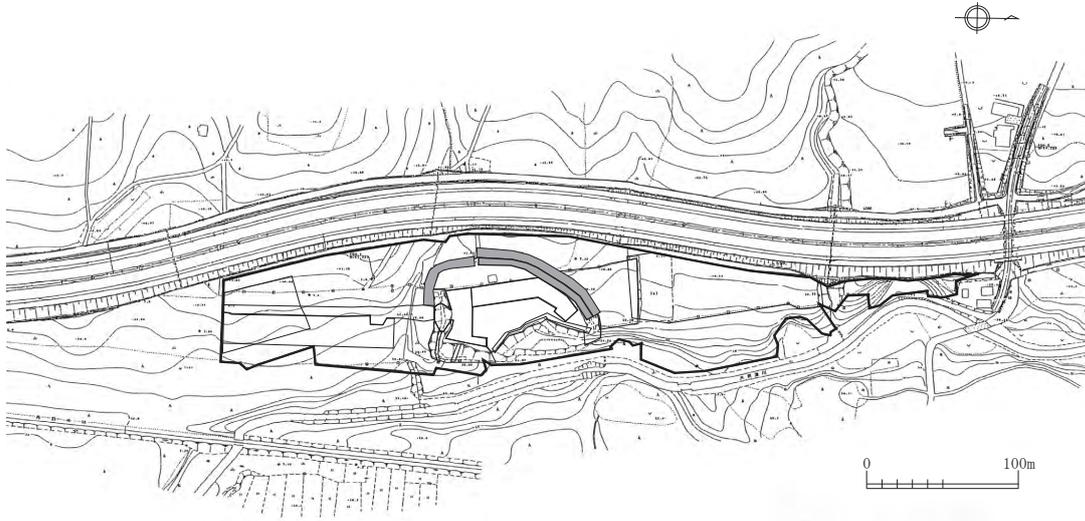
盛土転圧状況 (E→)

写真10 平成23年度工事写真

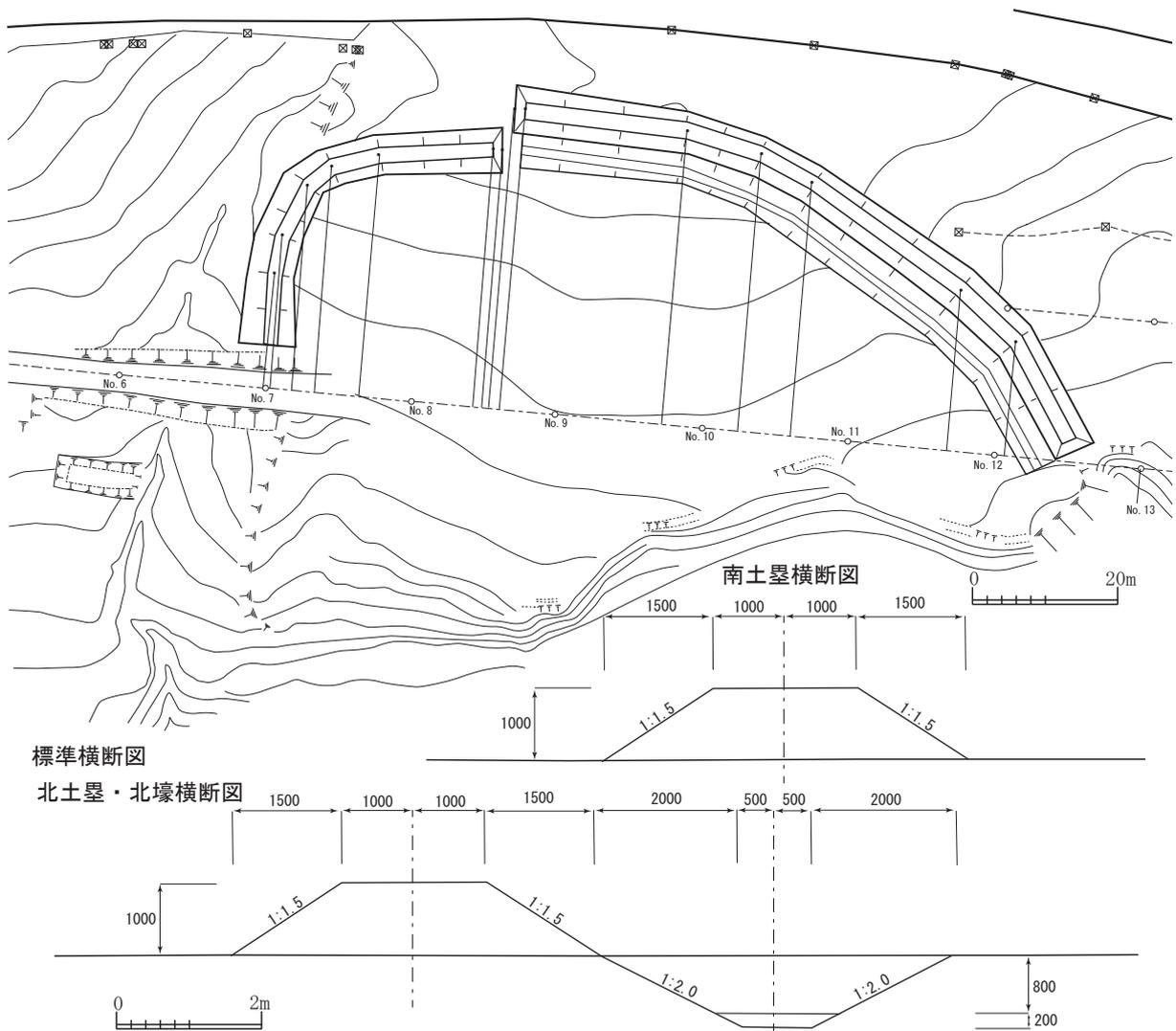
7. 平成24年度

内郭の西側の土塁（北土塁 L=95.12 m、南土塁 50.62 m）と北壕（L = 95.12 m）を対象に工事実施

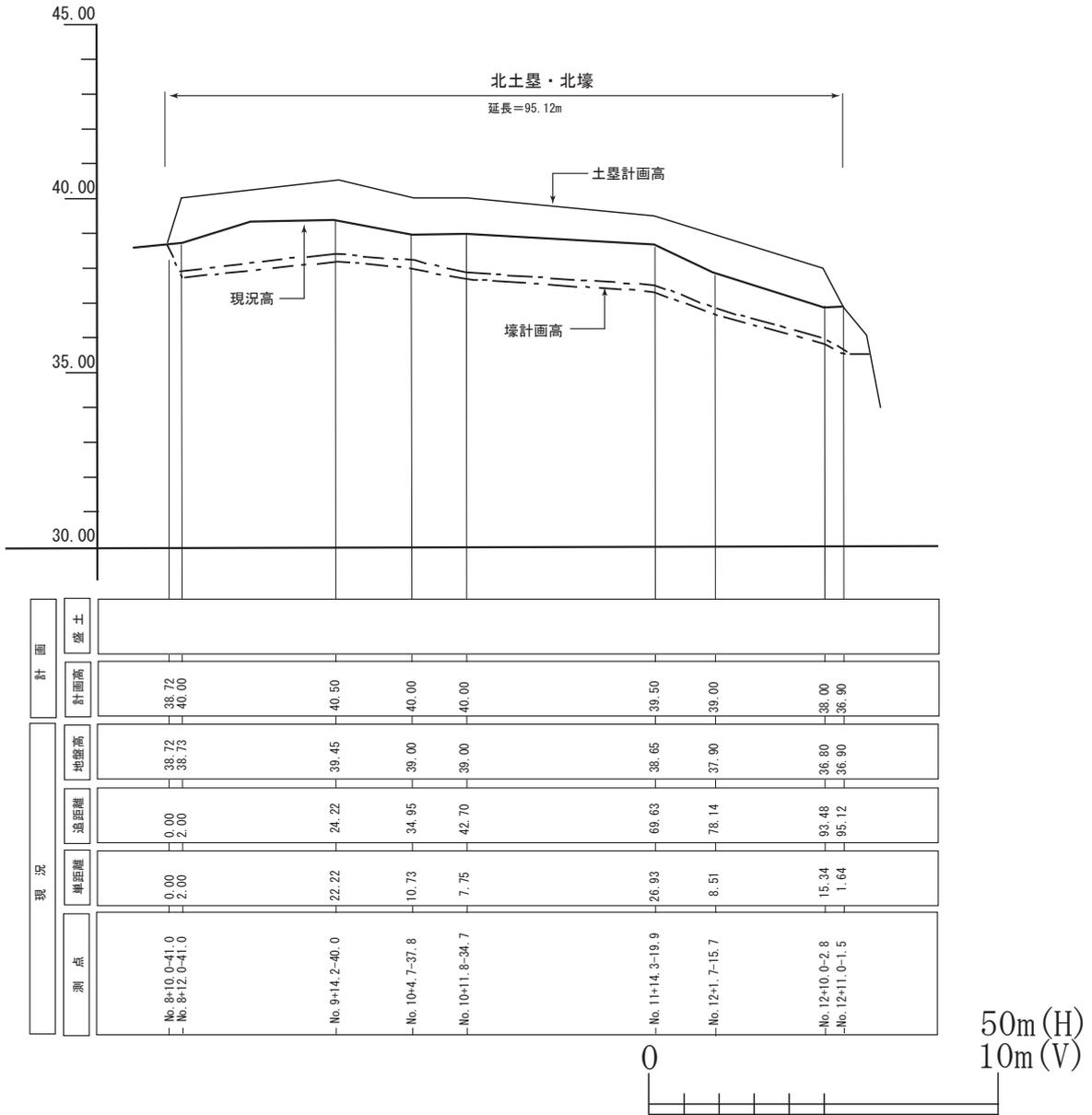
した。また、法面について、土塁は 1:1.5、壕は 1:2.0 を基本として造成した。



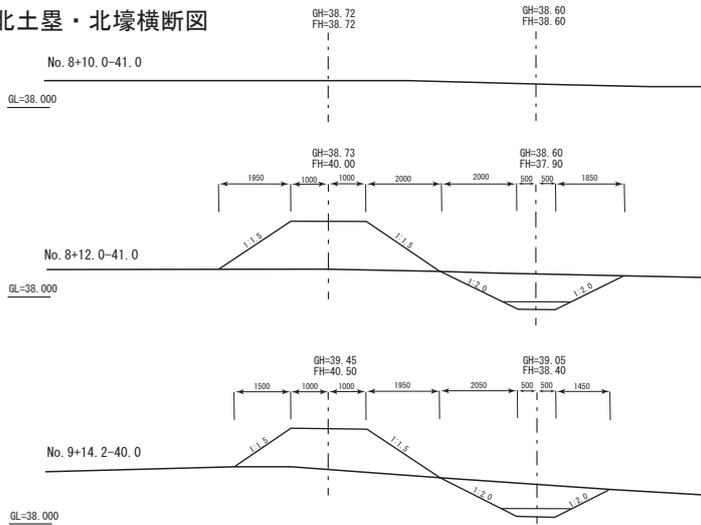
第20図 平成24年度工事対象範囲図

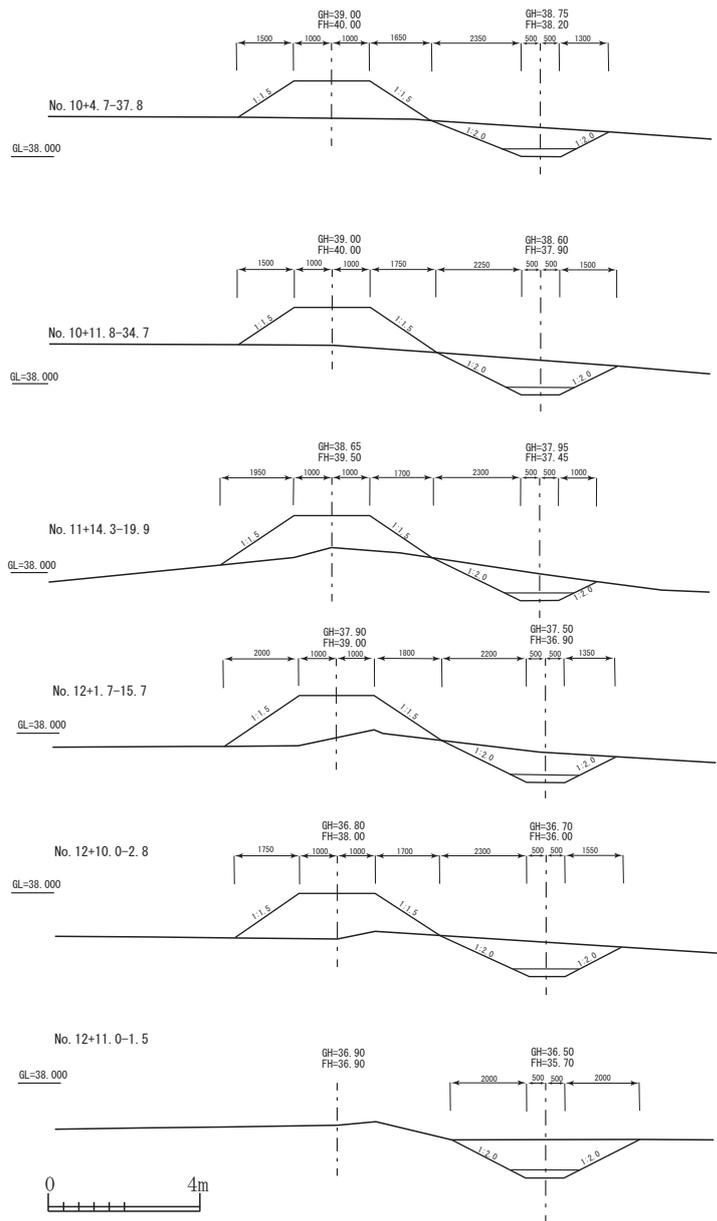


第21図 平成24年度工事設計図①



北土塁・北壕横断面





第23図 平成24年度工事設計図③



北土塁着工前 (S→)



北土塁完成 (S→)



南土塁着工前 (E→)



南土塁完成 (E→)



北土塁盛土状況 (N→)



北土塁盛土転圧状況 (S→)



北壕掘削状況 (S→)



北壕整形状況 (N→)

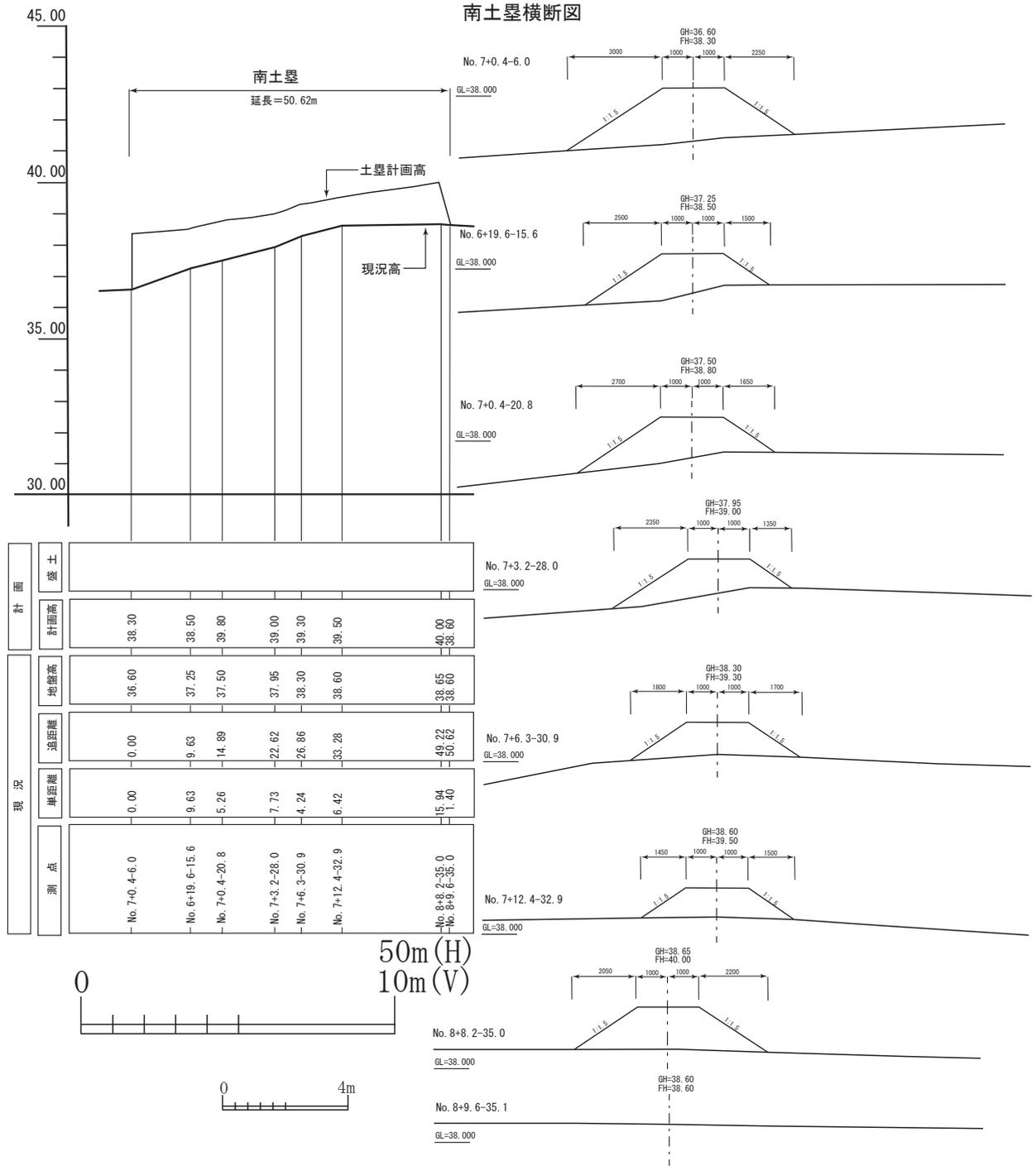


北壕底赤土敷均し状況 (S→)



南土塁盛土転圧状況 (E→)

写真11 平成24年度工事写真

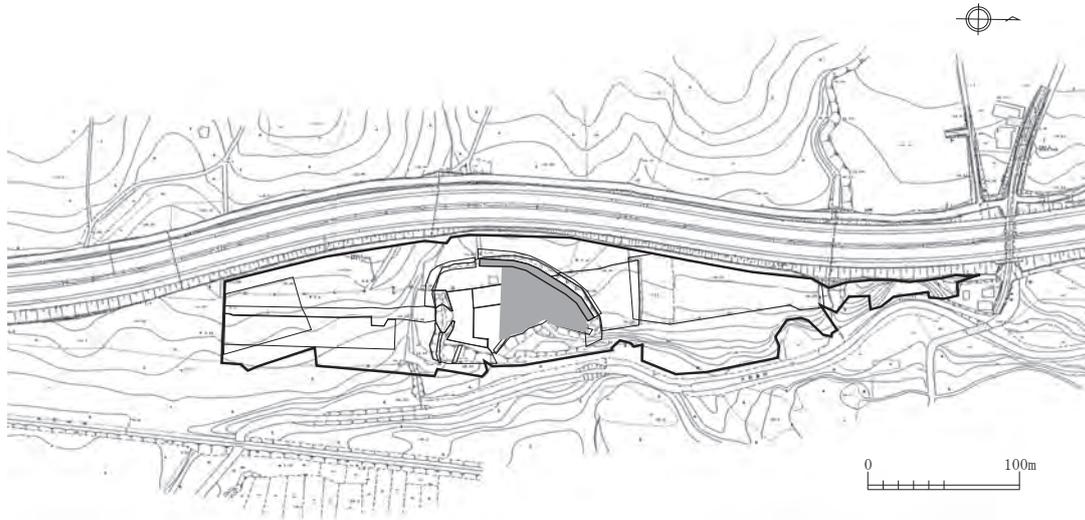


第24図 平成24年度工事設計図④

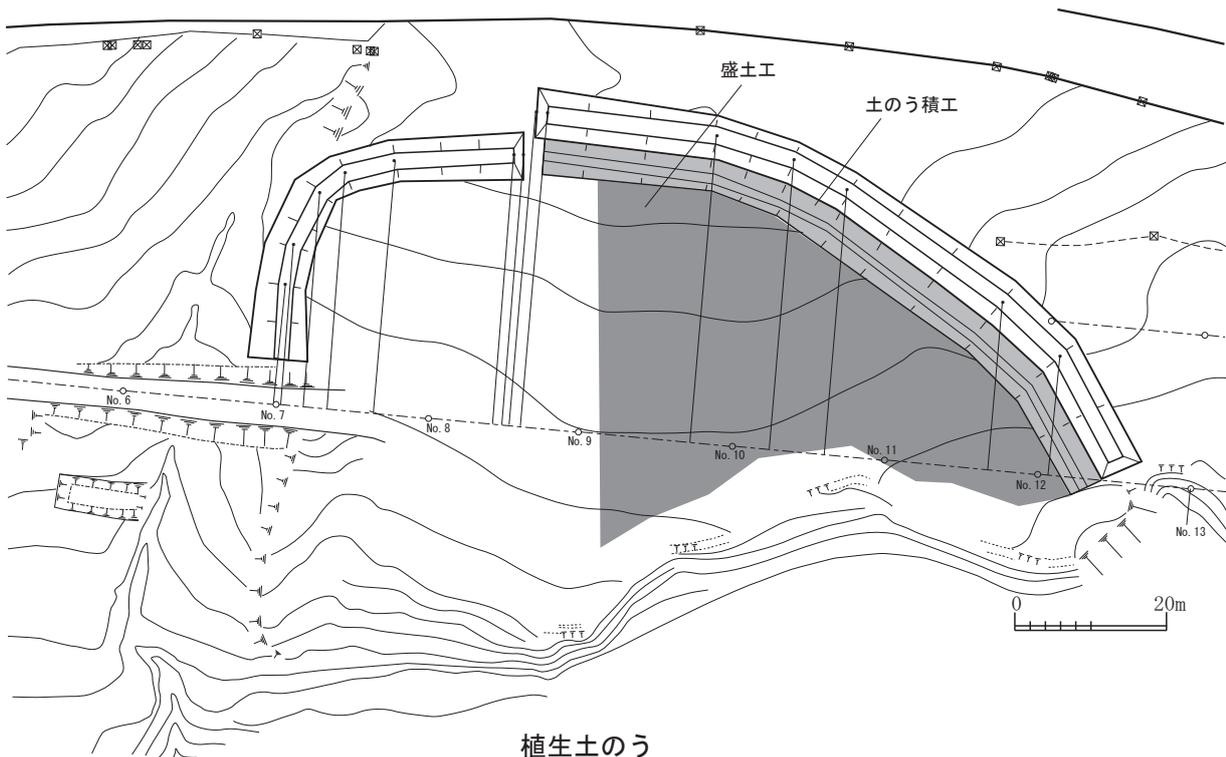
8. 平成25年度

平成24年度に掘削した内郭の北壕 (L = 95.12 m、253 m²) を対象に植生土のう積みを行い、また、内郭

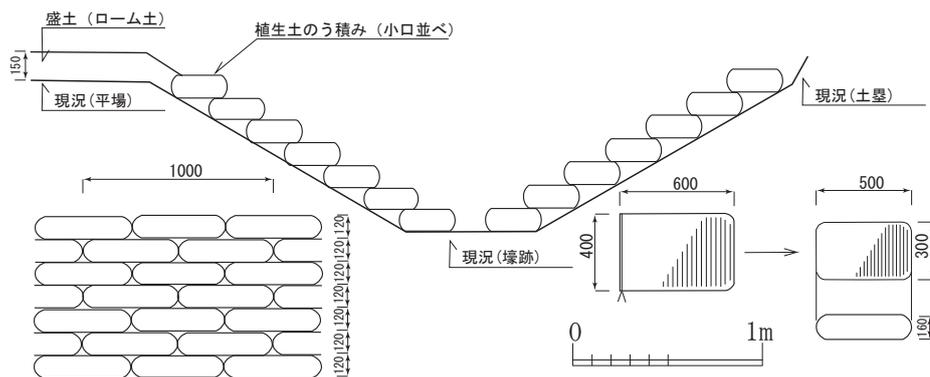
の平場 1,628 m² を対象に厚さ 15cm の粘性土の保護盛土工事を実施した。



第25図 平成25年度工事対象範囲図



植生土のう



第26図 平成25年度工事設計図



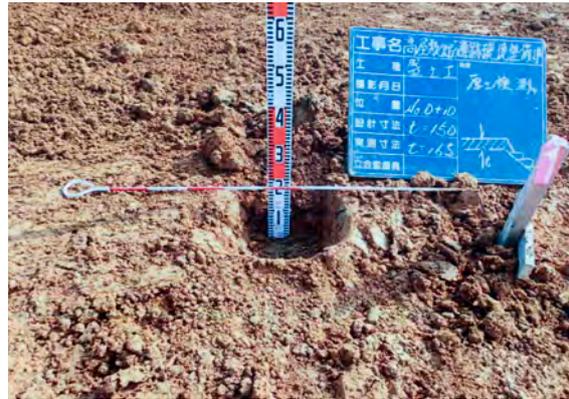
内郭盛土着工前 (S→)



内郭盛土完成 (S→)



内郭盛土作業状況 (S→)



内郭盛土厚さ測定 (S→)



北壕植生土のう積工着工前 (N→)



北壕植生土のう積工完成 (N→)



植生土のう作成状況

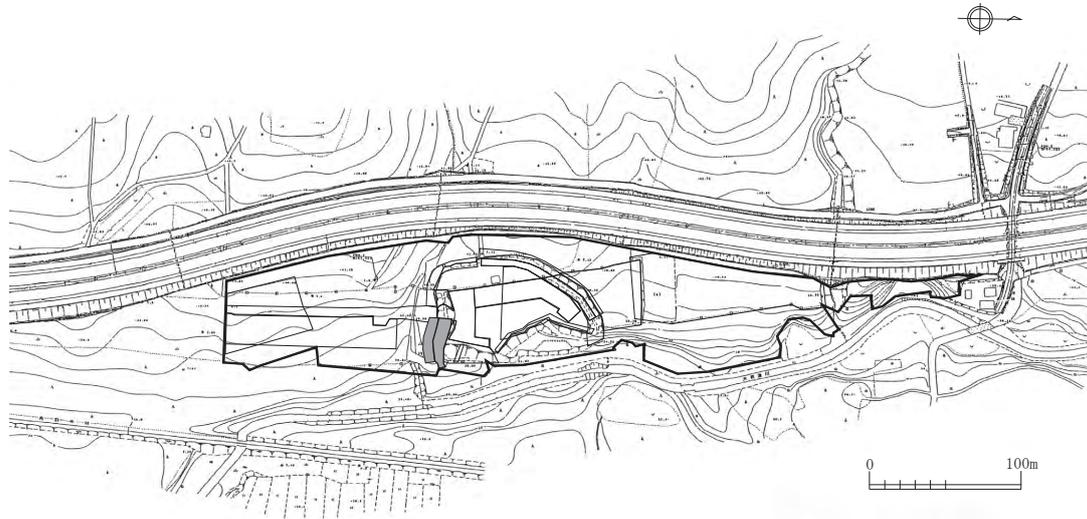


北壕植生土のう積み上げ状況 (S→)

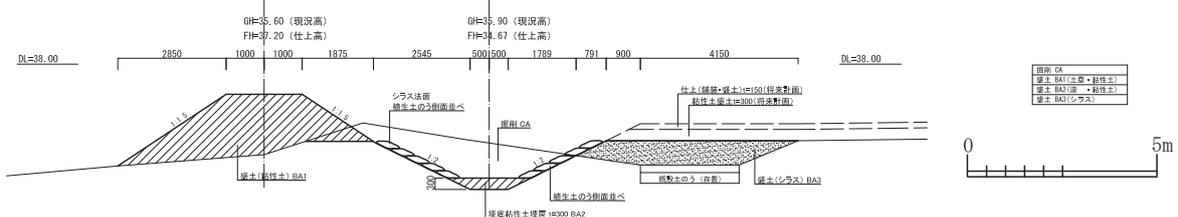
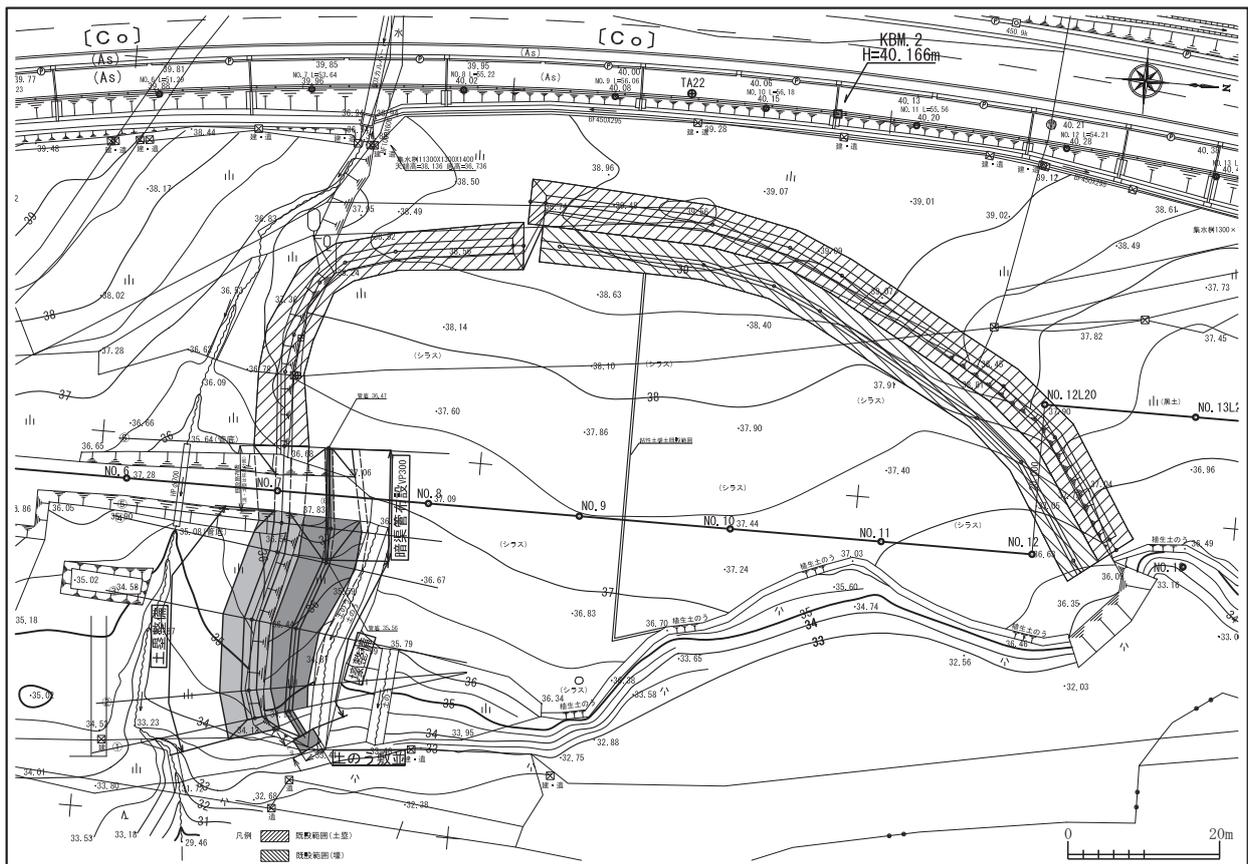
9. 平成26年度

南壕の工事用作業用道路より東側の地区を対象に、土塁 (L=30.15 m、162.2 m²) と壕 (L=24.81 m) の

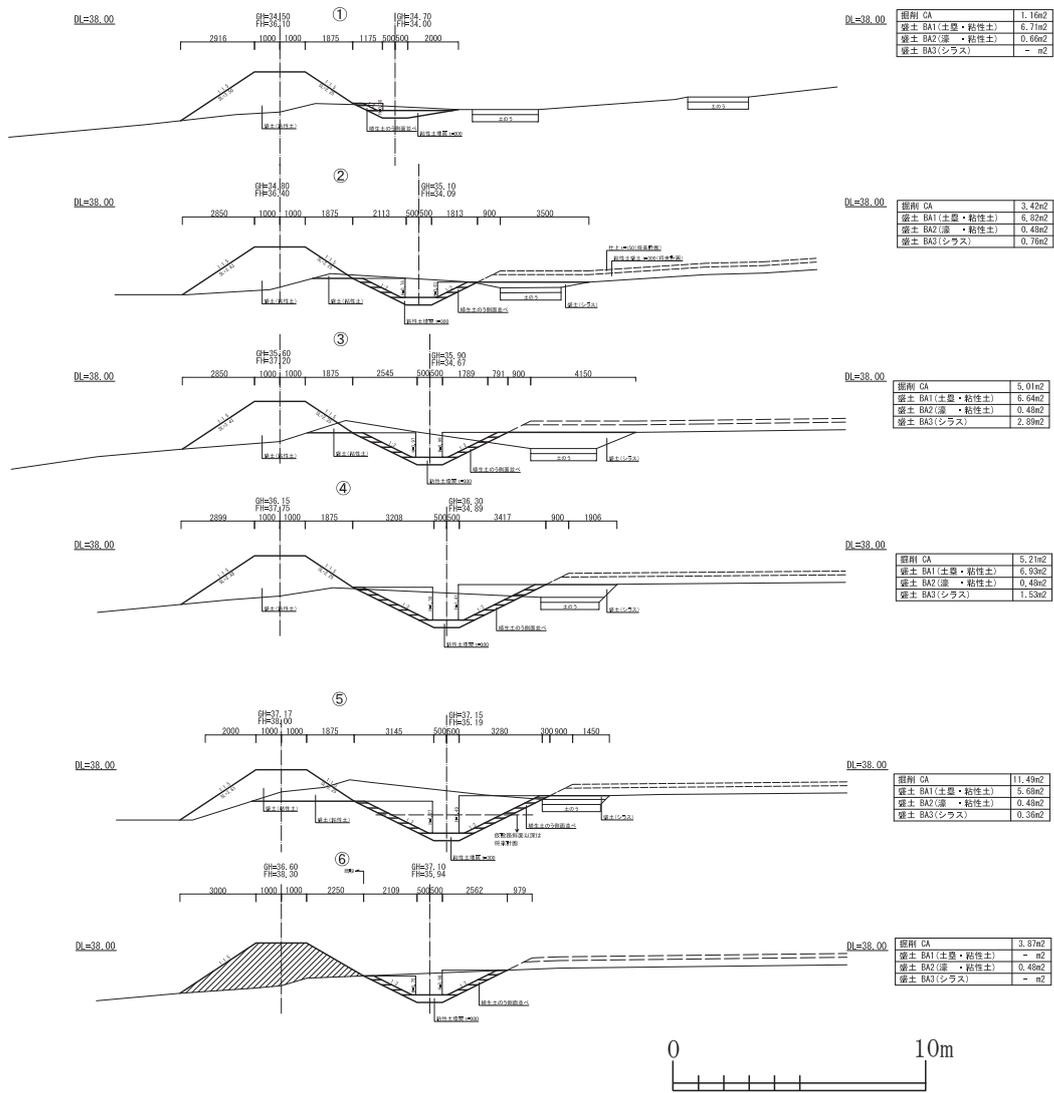
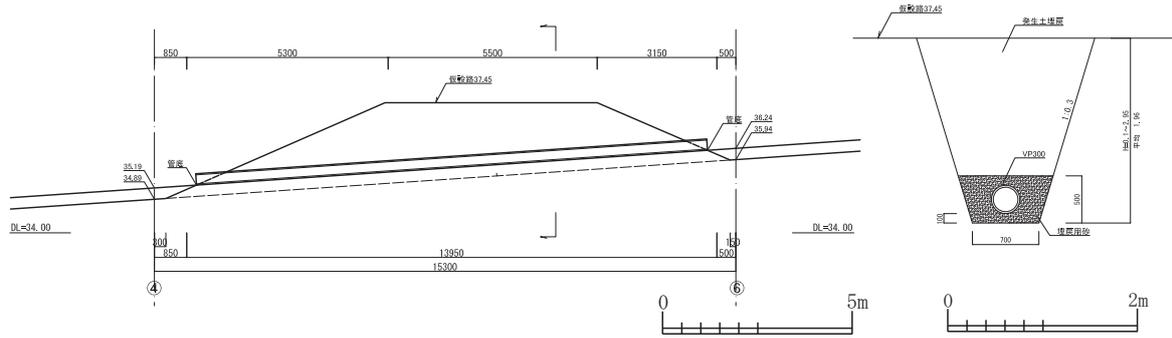
造成工事を実施した。また、VP300 の暗渠管 (14 m) を設置した。



第27図 平成26年度工事対象範囲図



第28図 平成26年度工事設計図①



第29図 平成26年度工事設計図②



土塁盛土着工前 (E→)



土塁盛土完成 (E→)



土塁盛土作業状況 (E→)



土塁盛土作業状況 (E→)



土塁盛土天端計測状況 (E→)



土塁盛土法面計測状況 (E→)



壕完成 (E→)



壕掘削状況 (SE→)



壕底部粘性土敷均し状況 (E→)



壕底部粘性土厚さ確認状況 (E→)



植生土のう積上げ状況 (W→)



植生土のう積上げ高さ確認状況 (E→)



暗渠管設置状況 (E→)



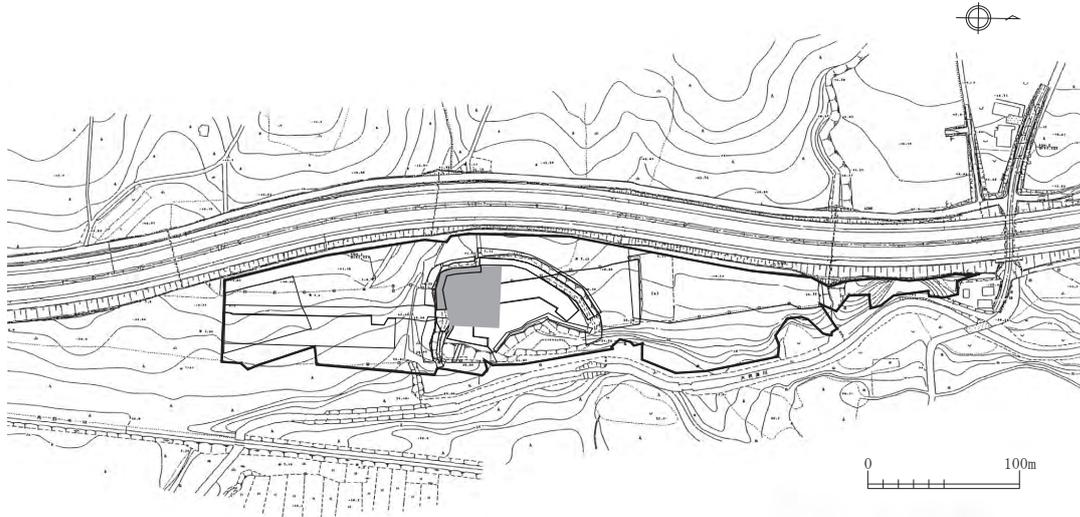
暗渠管設置完成 (NW→)

写真14 平成26年度工事写真②

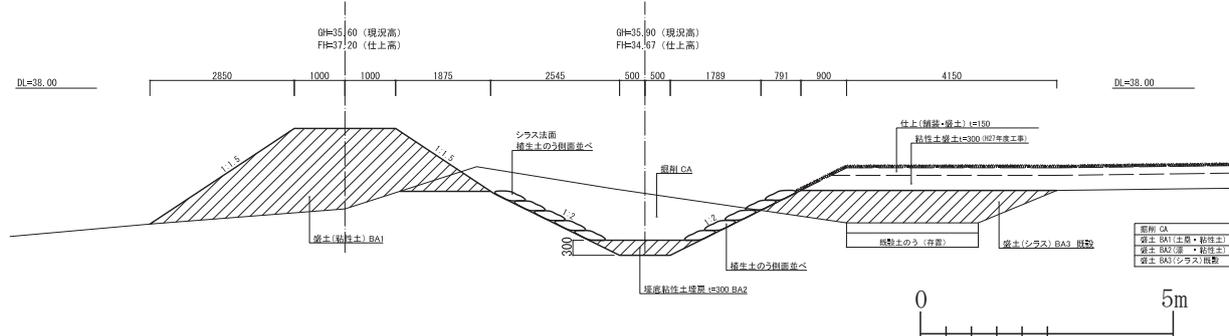
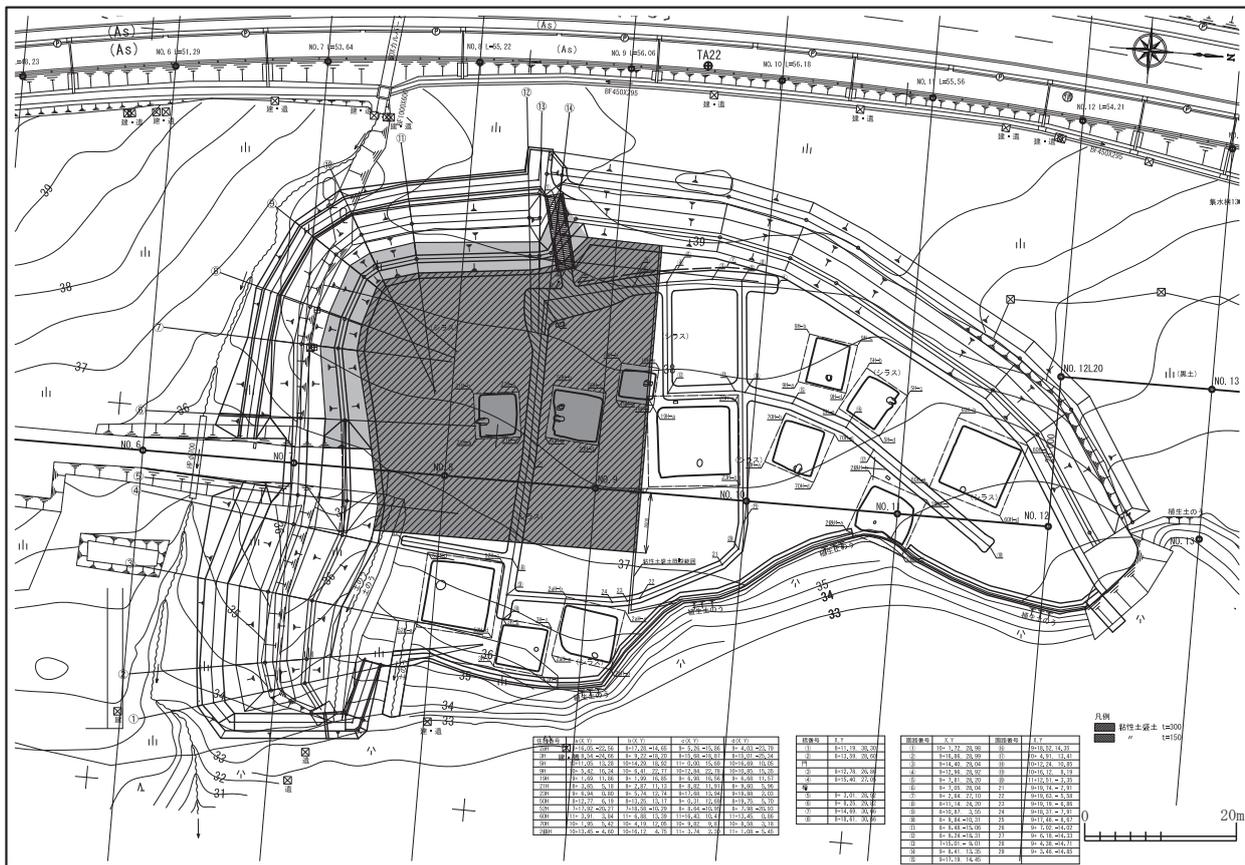
10. 平成27年度

南壕の工事用作業用道路より西の壕 (L=43.86 m)
の掘削及び植生土のう積み、内郭平場 1,300 m²の保護

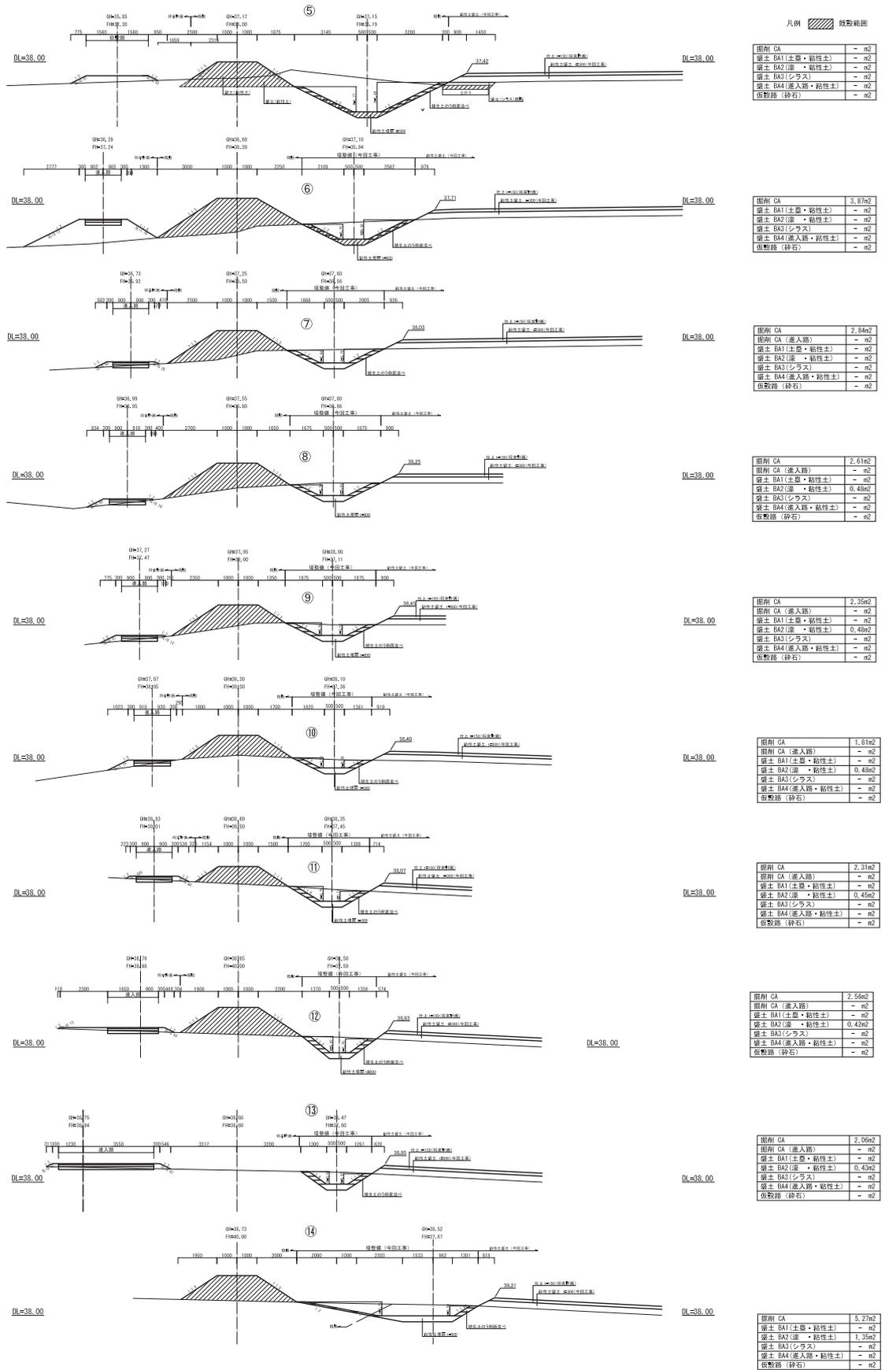
盛土工事 (厚さ t=30cm) を実施した。



第30図 平成27年度工事対象範囲図



第31図 平成27年度工事設計図①



第32図 平成27年度工事設計図②



内郭盛土着工前 (S→)



内郭盛土完成 (S→)



内郭盛土着工前 (N→)



内郭盛土完成 (N→)



内郭盛土敷均し状況 (W→)



内郭盛土厚さ計測状況 (S→)



壕着工前 (N→)



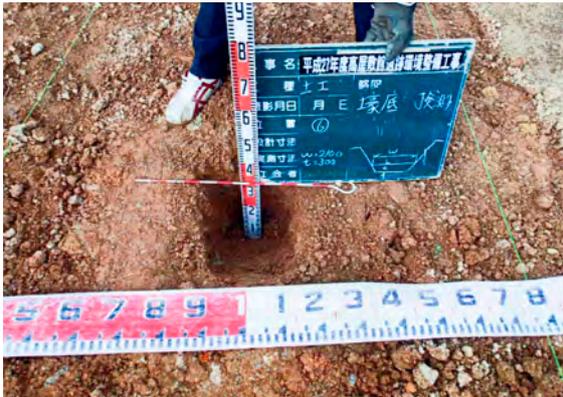
壕完成 (N→)



壕掘削状況 (S→)



壕底部粘性土敷均し状況 (N→)



壕底部粘性土厚さ確認 (S→)



植生土のう積上げ状況 (E→)



植生土のう高さ確認状況 (S→)

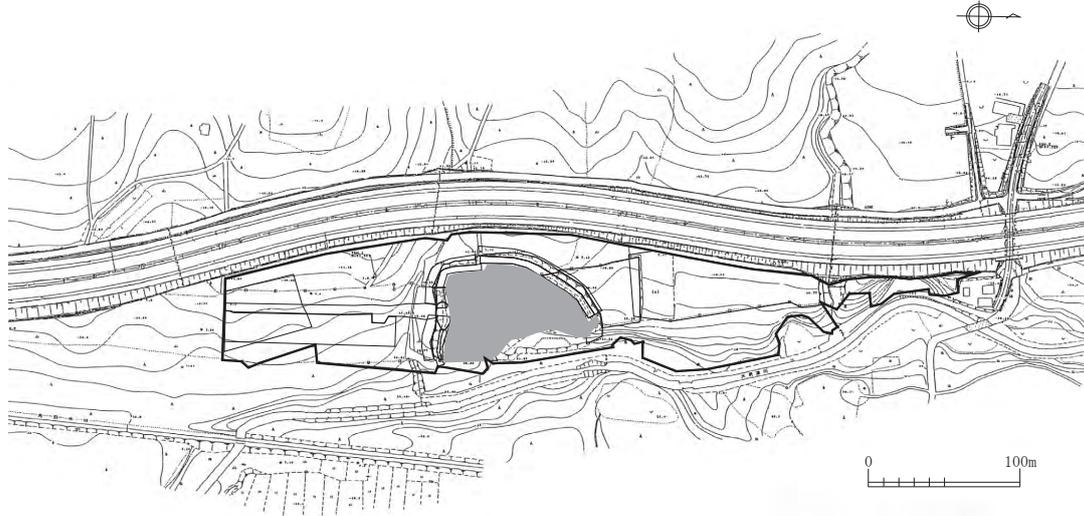


植生土のう積上げ完成 (E→)

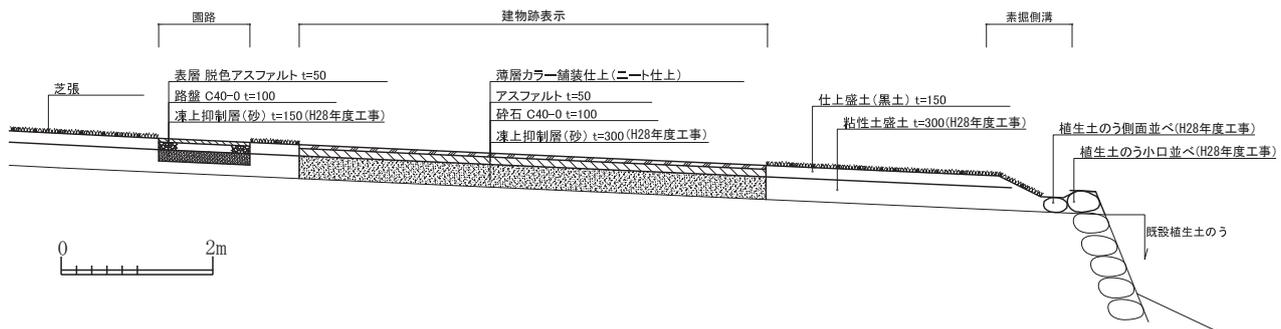
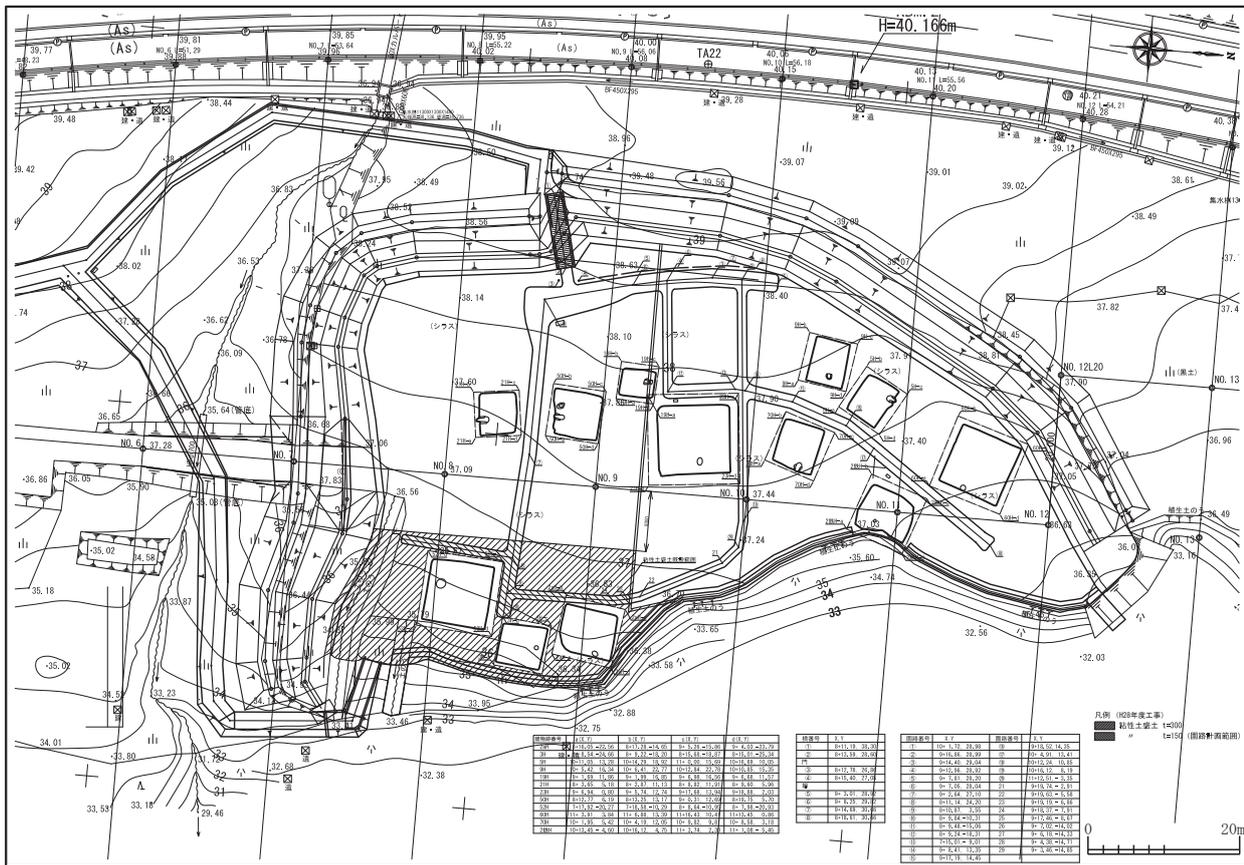
写真16 平成27年度工事写真②

11. 平成28年度

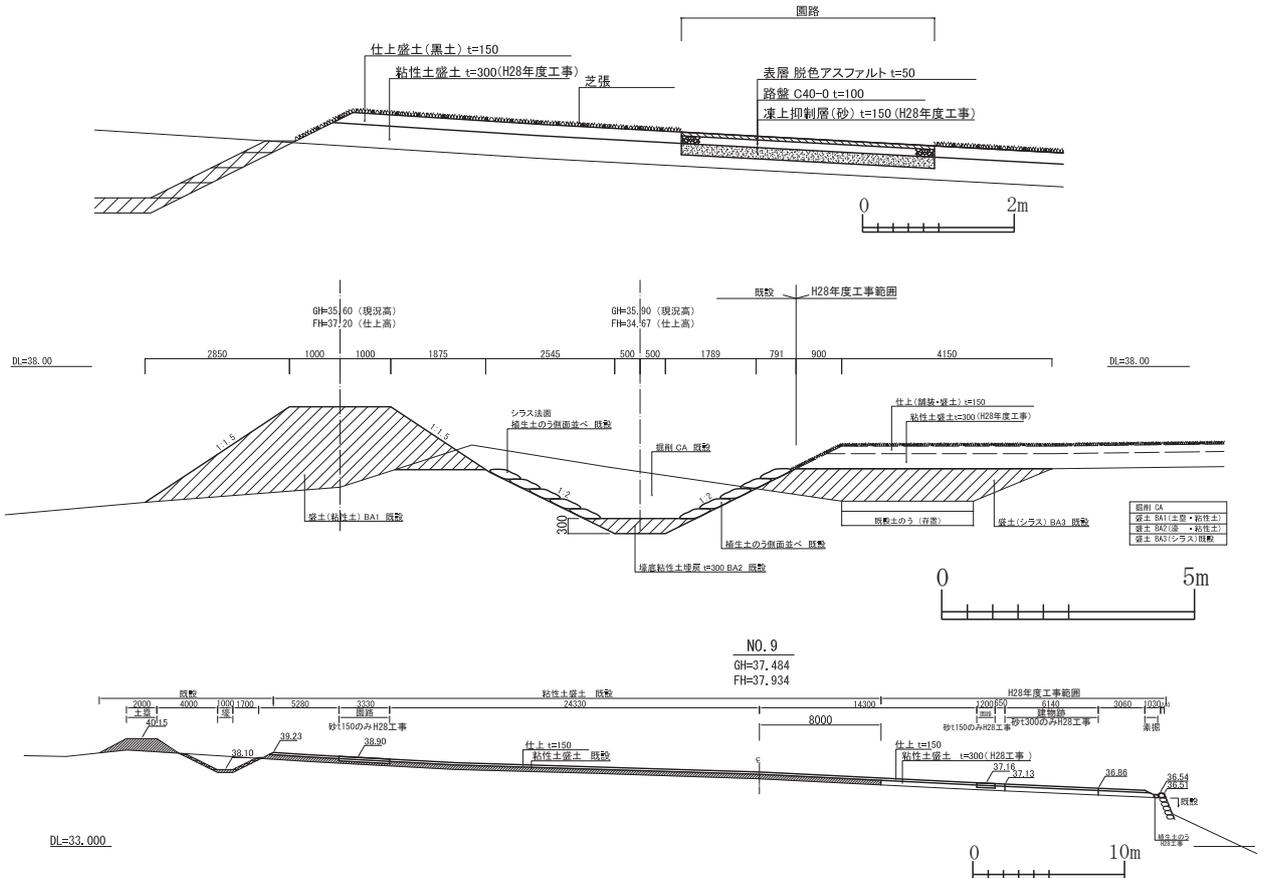
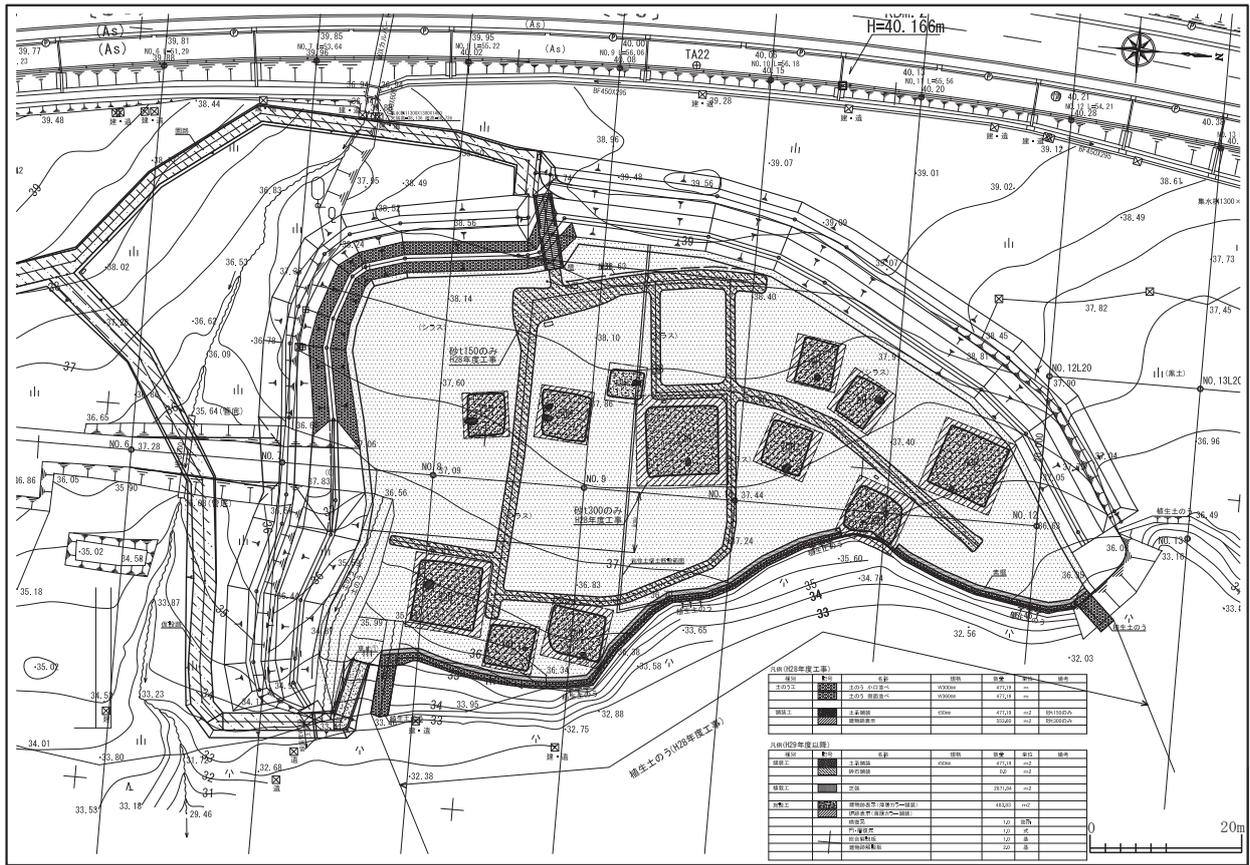
内郭の南東側の保護盛土(厚さ t=30cm)と竪穴建物跡(19H 除く)、園路の凍上抑制層を形成する工事を実施した。



第33図 平成28年度工事対象範囲図

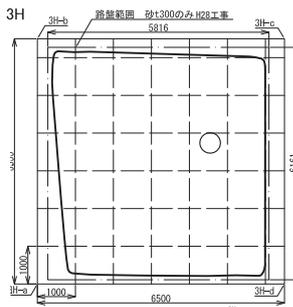
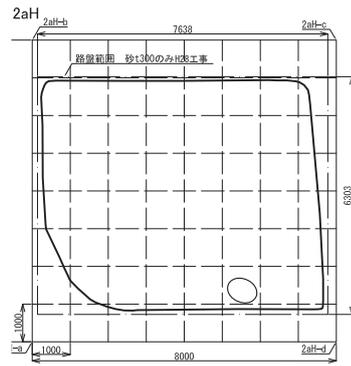
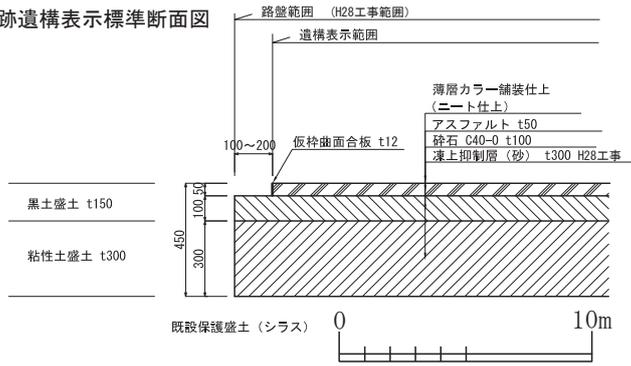


第34図 平成28年度工事設計図①

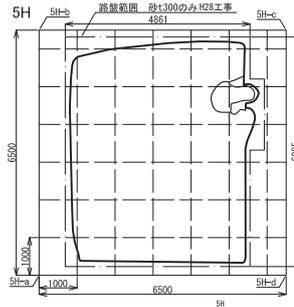


第35図 平成28年度工事設計②

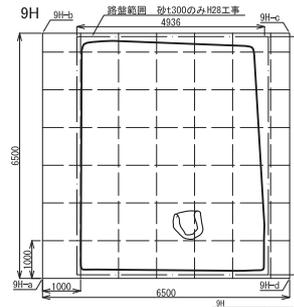
建物跡遺構表示標準断面図



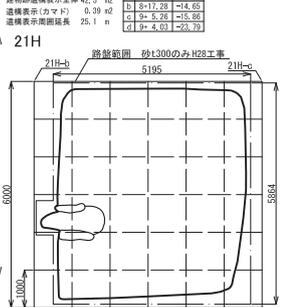
3H		X	Y
a	3	8.54	-24.65
b	3	-9.22	-18.20
c	3	-15.88	-18.87
d	3	-15.01	-25.34



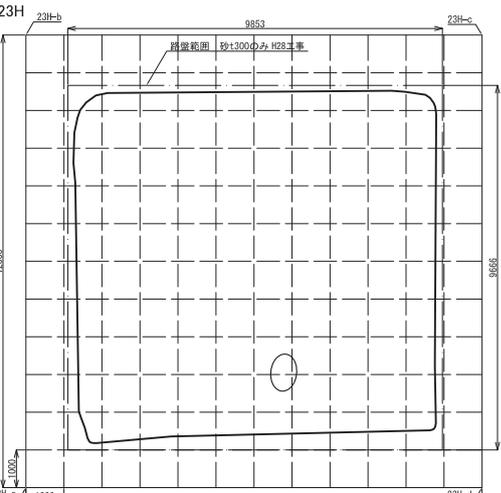
5H		X	Y
a	10	-11.08	13.28
b	10	-14.23	15.82
c	11	-0.01	15.69
d	10	-10.68	18.95



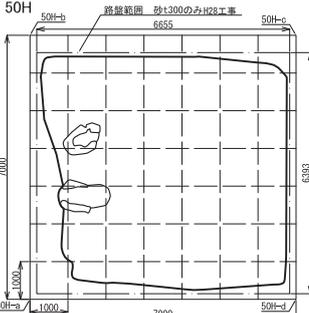
9H		X	Y
a	10	-5.42	16.34
b	10	-6.41	22.77
c	10	-7.84	22.78
d	10	-10.85	15.35



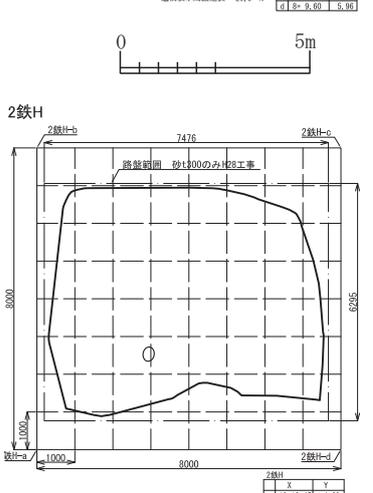
21H		X	Y
a	8	-3.65	5.18
b	8	-2.87	11.12
c	8	-3.32	11.91
d	8	-9.60	5.96



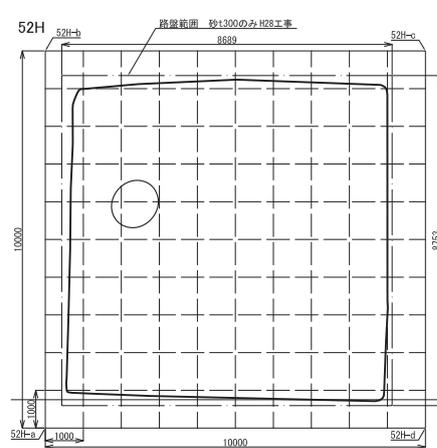
23H		X	Y
a	9	-6.94	0.80
b	9	-5.74	12.71
c	9	-7.50	13.30
d	9	-18.30	2.20



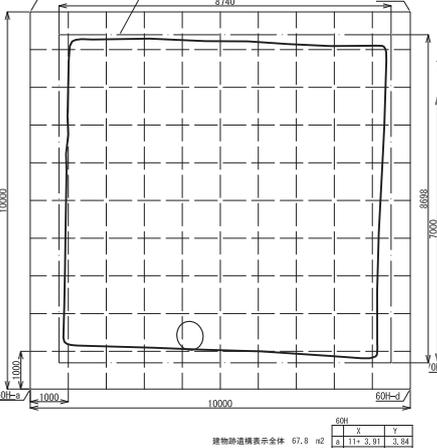
50H		X	Y
a	8	-12.77	6.10
b	8	-13.29	13.17
c	9	-0.31	12.69
d	8	-19.75	5.70



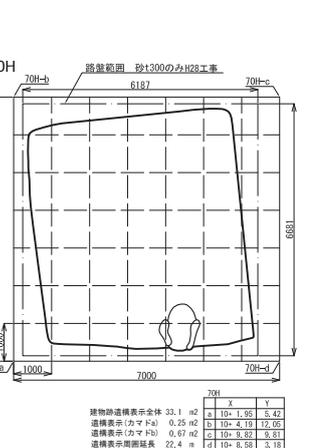
2鉄H		X	Y
a	10	-13.40	-4.90
b	10	-16.12	4.75
c	11	-3.74	2.30
d	11	-1.08	-5.45



52H		X	Y
a	7	-17.02	-20.27
b	7	-18.53	-10.29
c	8	-8.04	-10.95
d	8	-7.88	-20.93



60H		X	Y
a	11	-3.91	3.84
b	11	-6.88	13.39
c	11	-10.43	10.41
d	11	-13.45	6.93



70H		X	Y
a	10	-1.85	5.41
b	10	-4.10	12.05
c	10	-0.82	8.81
d	10	-6.58	3.38

第36図 平成28年度工事設計③



内郭着工前 (S→)

内郭東斜面着工前 (S→)

内郭盛土敷均し状況 (N→)



内郭完成 (S→)

内郭東斜面完成 (S→)

内郭盛土転圧状況 (S→)



内郭盛土厚さ確認状況 (S→)

植生土のう積上げ状況 (S→)

園路掘削状況 (S→)



園路凍上抑制層完成 (S→)

園路凍上抑制層出来形測定 (S→)

園路凍上抑制層厚さ測定 (S→)



5H凍上抑制層転圧状況 (S→)

5H凍上抑制層完成 (S→)

5H凍上抑制層厚さ確認 (S→)



2鉄H凍上抑制層転圧状況 (S→)

2鉄H凍上抑制層完成 (S→)

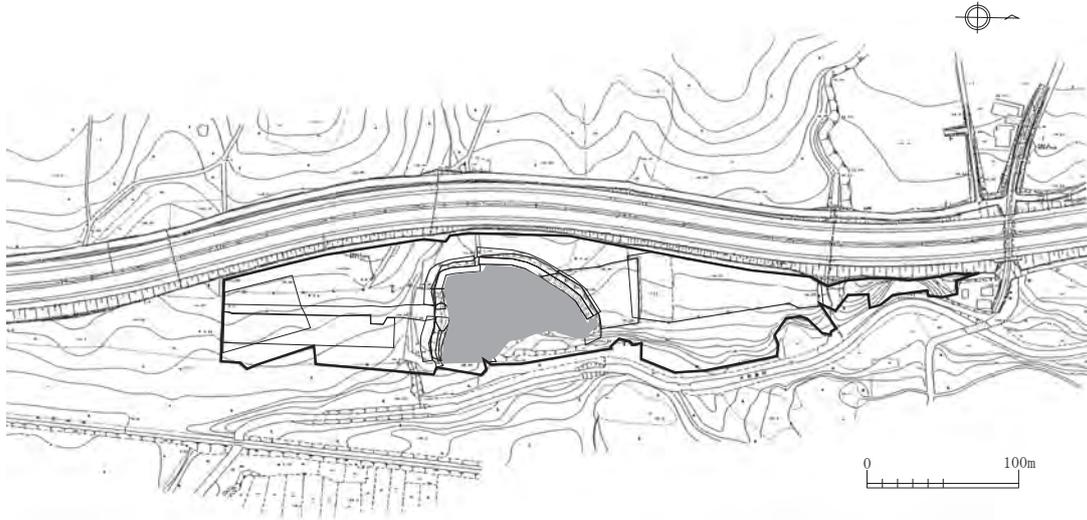
2鉄H凍上抑制層厚さ確認 (S→)

写真17 平成28年度工事写真

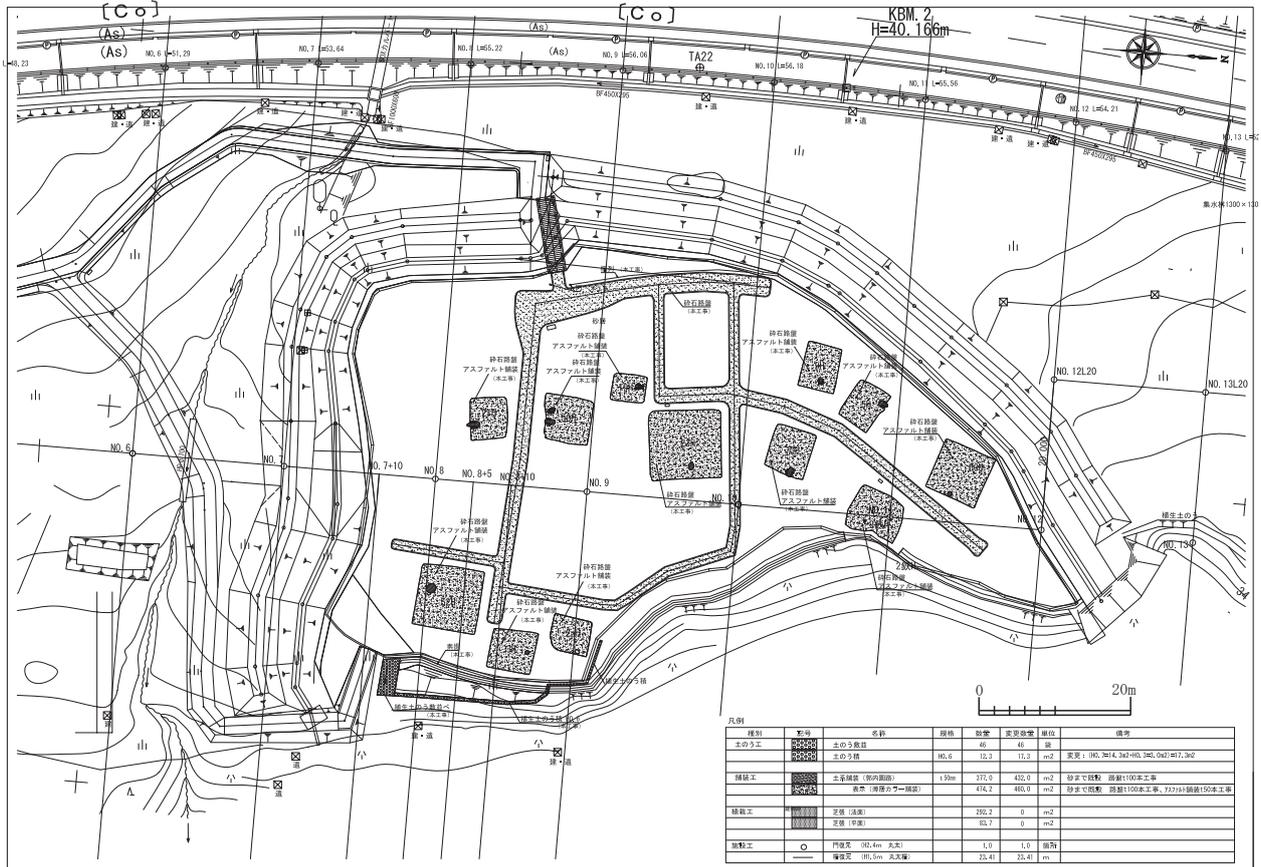
12. 平成29年度

平成28年度に未施工の竪穴建物跡(19H)の凍上抑制層の形成と竪穴建物跡全棟のアスファルト舗装及

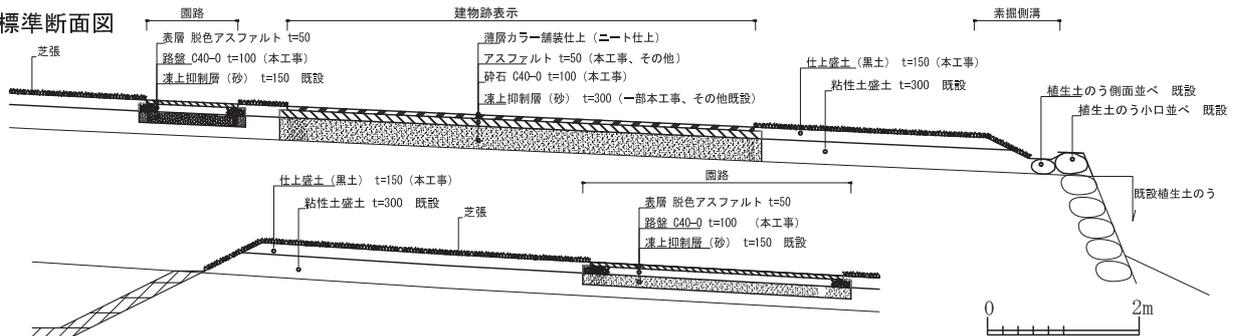
び園路の路盤工事を実施した。また、立体表示として柵列と門の復元工についても実施した。



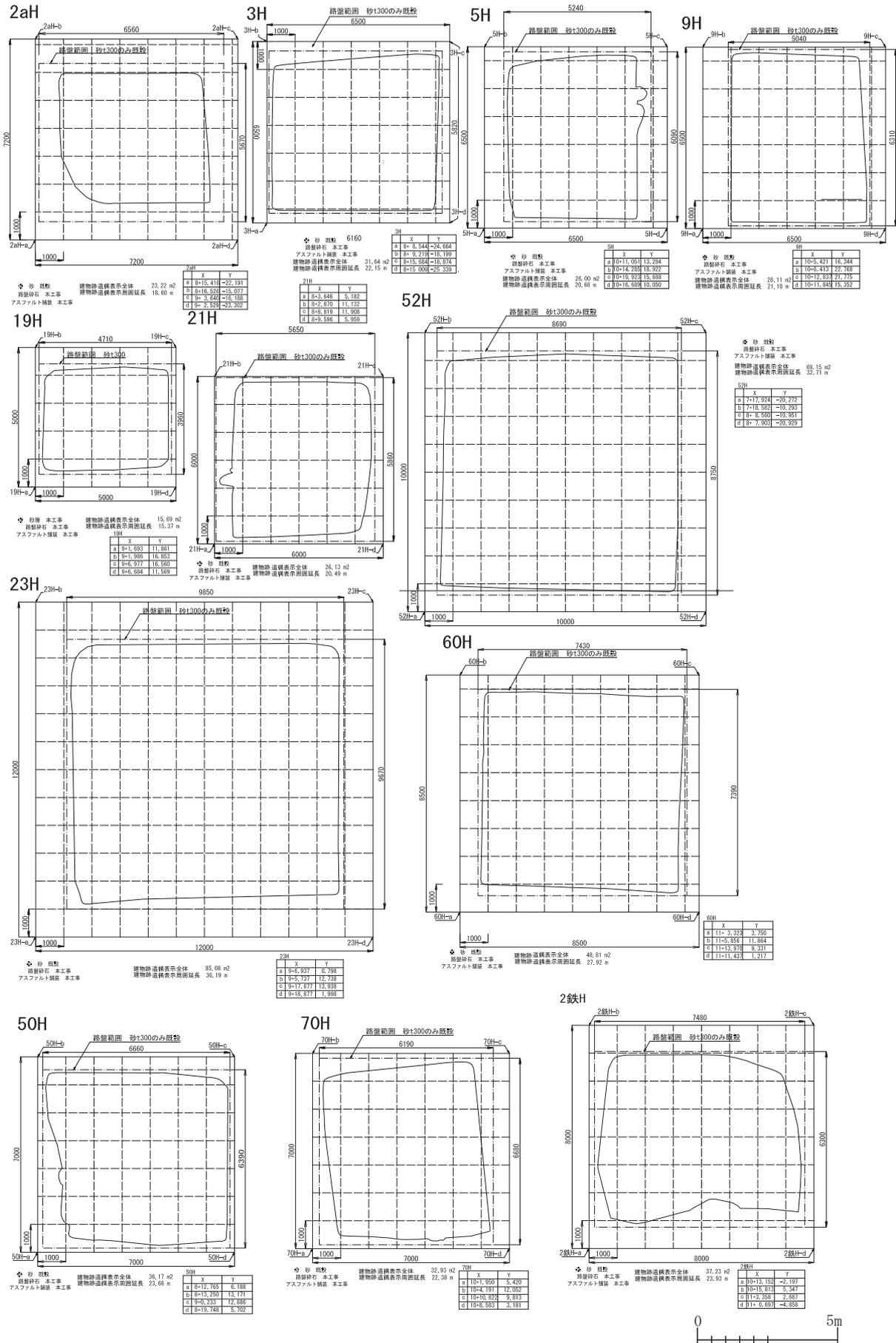
第37図 平成29年度工事対象範囲図



標準断面図



第38図 平成29年度工事設計図①



第40図 平成29年度工事設計図③



着工前 (S→)



完成 (S→)



着工前 (SW→)



完成 (SW→)



着工前 (SW→)



完成 (SW→)



法面整形状況 (S→)



黒土敷均し状況 (SW→)



植生土のう積み状況 (S→)



植生土のう積み高さ測定状況 (S→)



植生土のう敷並べ作業状況 (S→)



植生土のう敷並べ完成 (E→)



門・柵列復元工掘削状況 (N→)



門・柵列復元工コンクリート打設状況 (N→)



門復元工型枠組立状況 (S→)



門・柵列復元工コンクリート仕上げ状況 (S→)



キシラデコール塗布状況〔1回目〕(N→)



基部アスファルト塗布状況(W→)



門復元工建込状況(E→)



門・柵列復元工モルタル仕上げ状況(N→)



キシラデコール塗布状況〔2回目〕(S→)



天端部ニス塗布状況(E→)



園路舗装路盤工碎石敷均し状況(S→)



園路舗装路盤工出来高測定状況(W→)



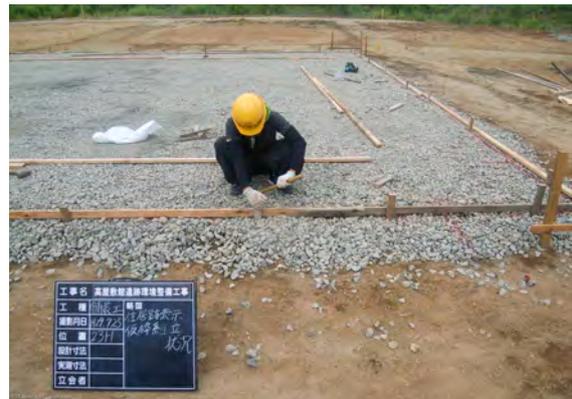
建物跡表示人力掘削状況〔19H〕（E→）



建物跡表示凍上抑制層転圧状況〔19H〕（E→）



建物跡表示砕石敷均し状況〔23H〕（SW→）



建物跡表示型枠組立状況〔23H〕（E→）



建物跡表示舗装状況〔23H〕（E→）



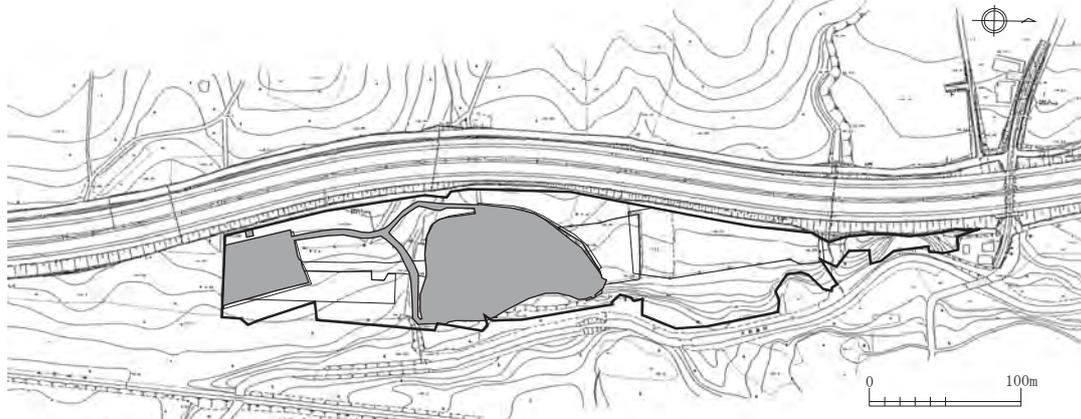
建物跡表示仮枠コンクリート撤去状況〔23H〕（SW→）

写真21 平成29年度工事写真④

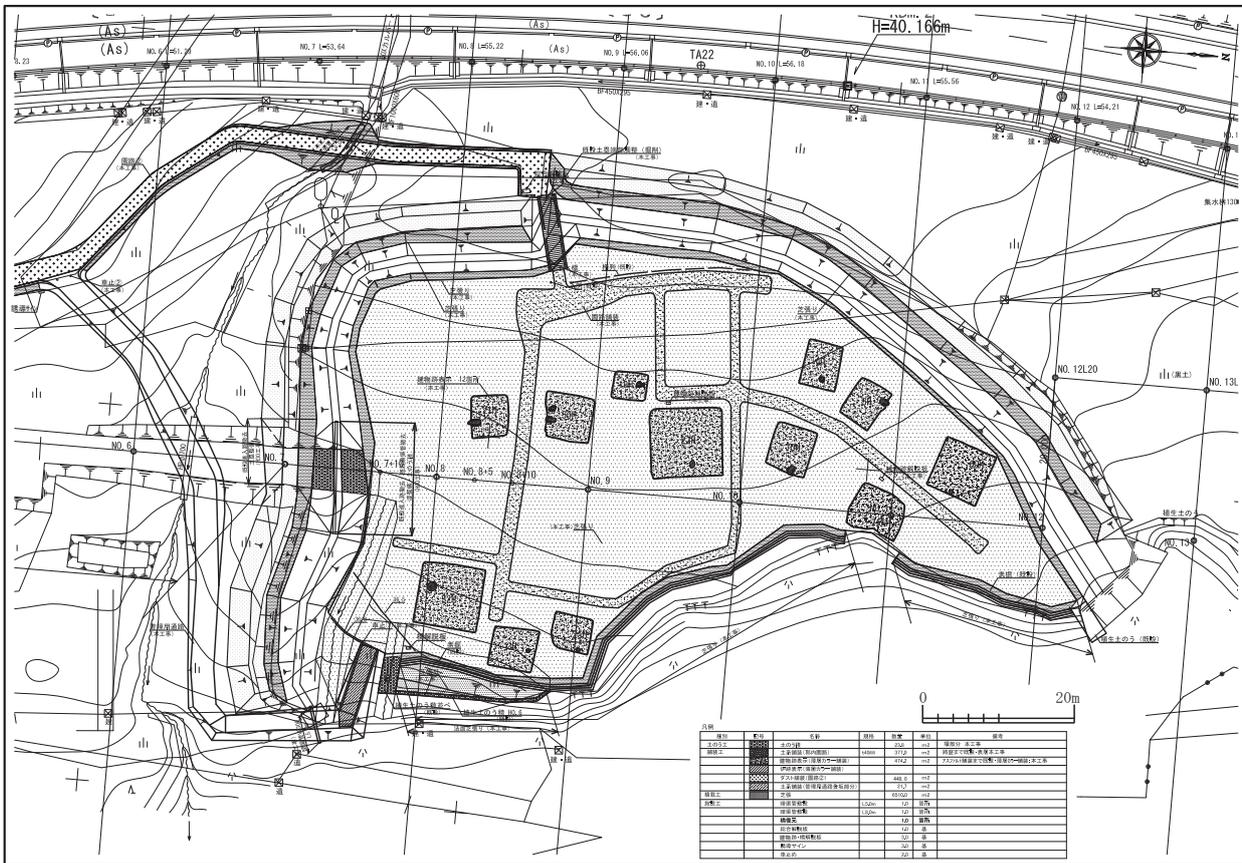
13. 平成30年度

平成29年度に実施した竪穴建物跡のアスファルト舗装上に薄層カラー舗装を施し、カマド位置の表示を

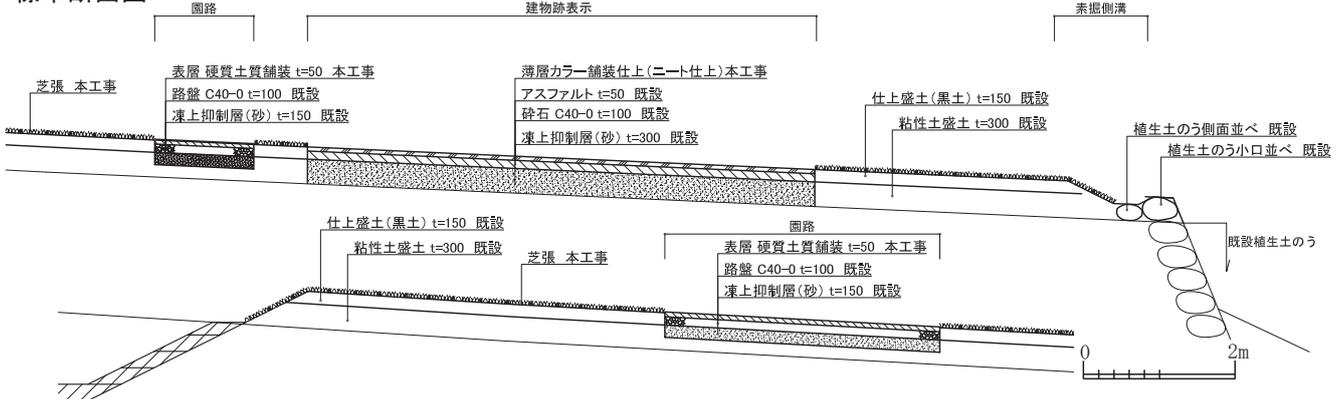
実施した。また、園路については、土系の硬質土質舗装(カラーサンド)及びダスト舗装を表層に実施し



第41図 平成30年度工事対象範囲図

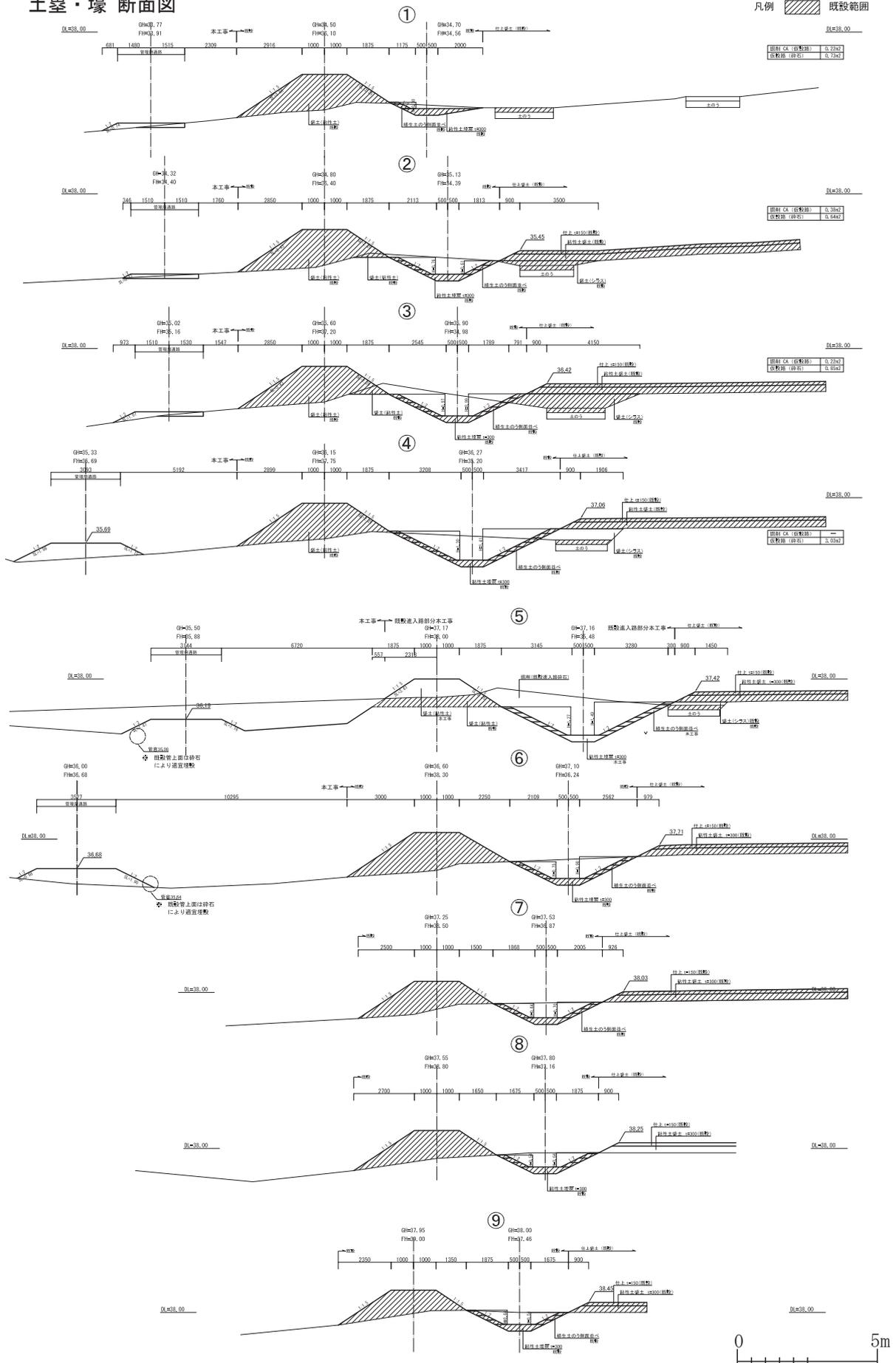


標準断面図

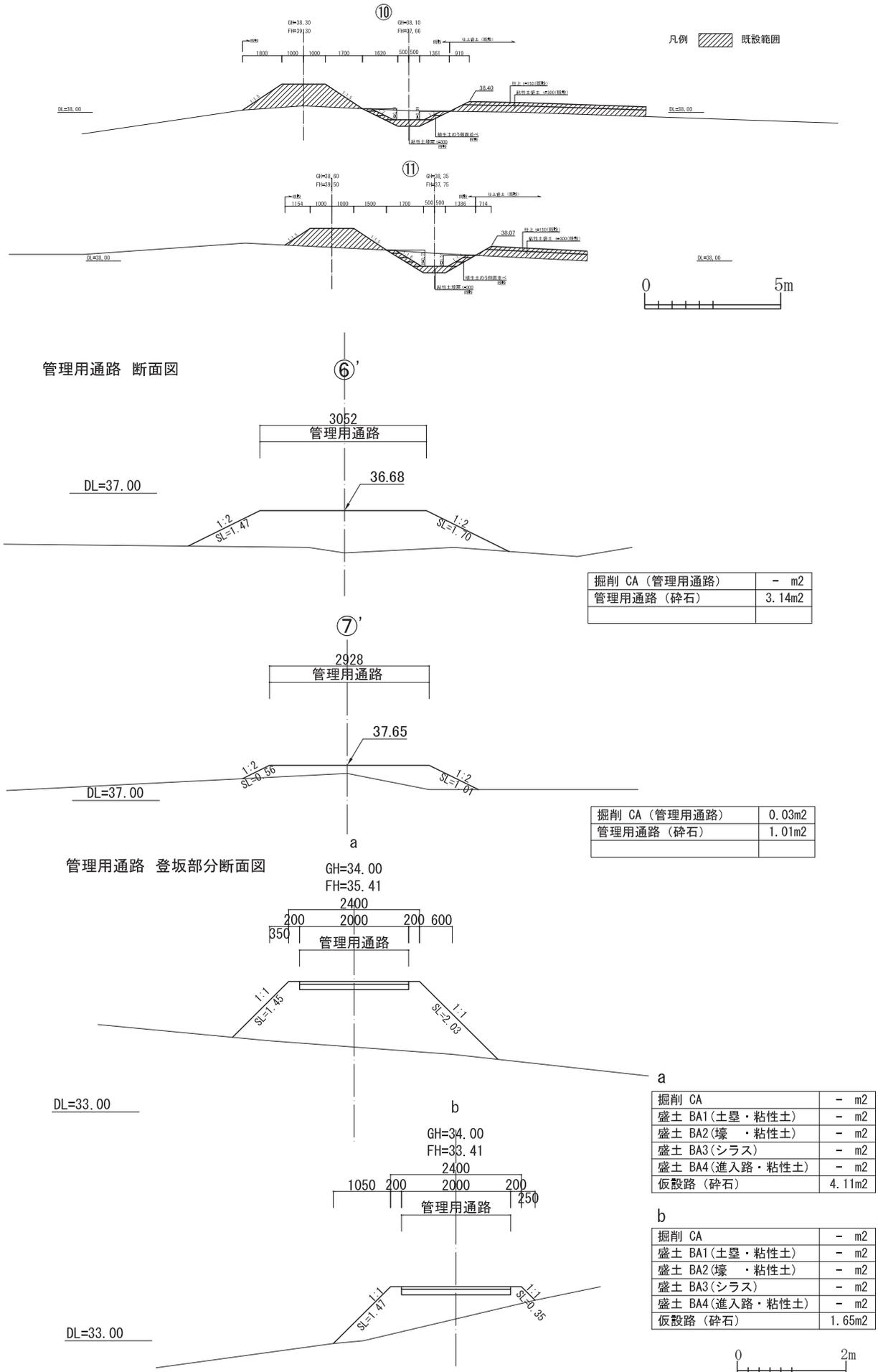


第42図 平成30年度工事設計図①

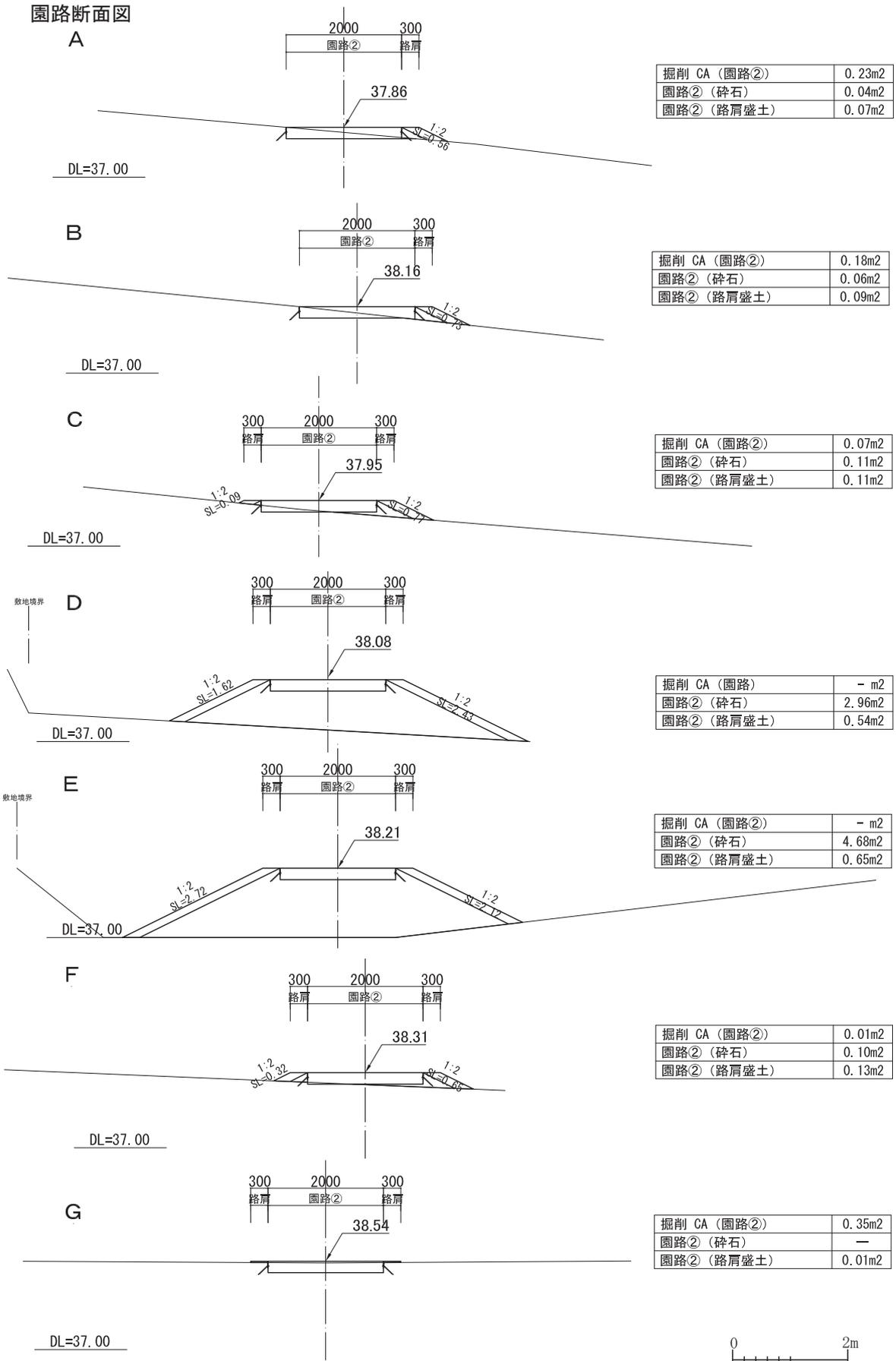
土塁・壕断面図



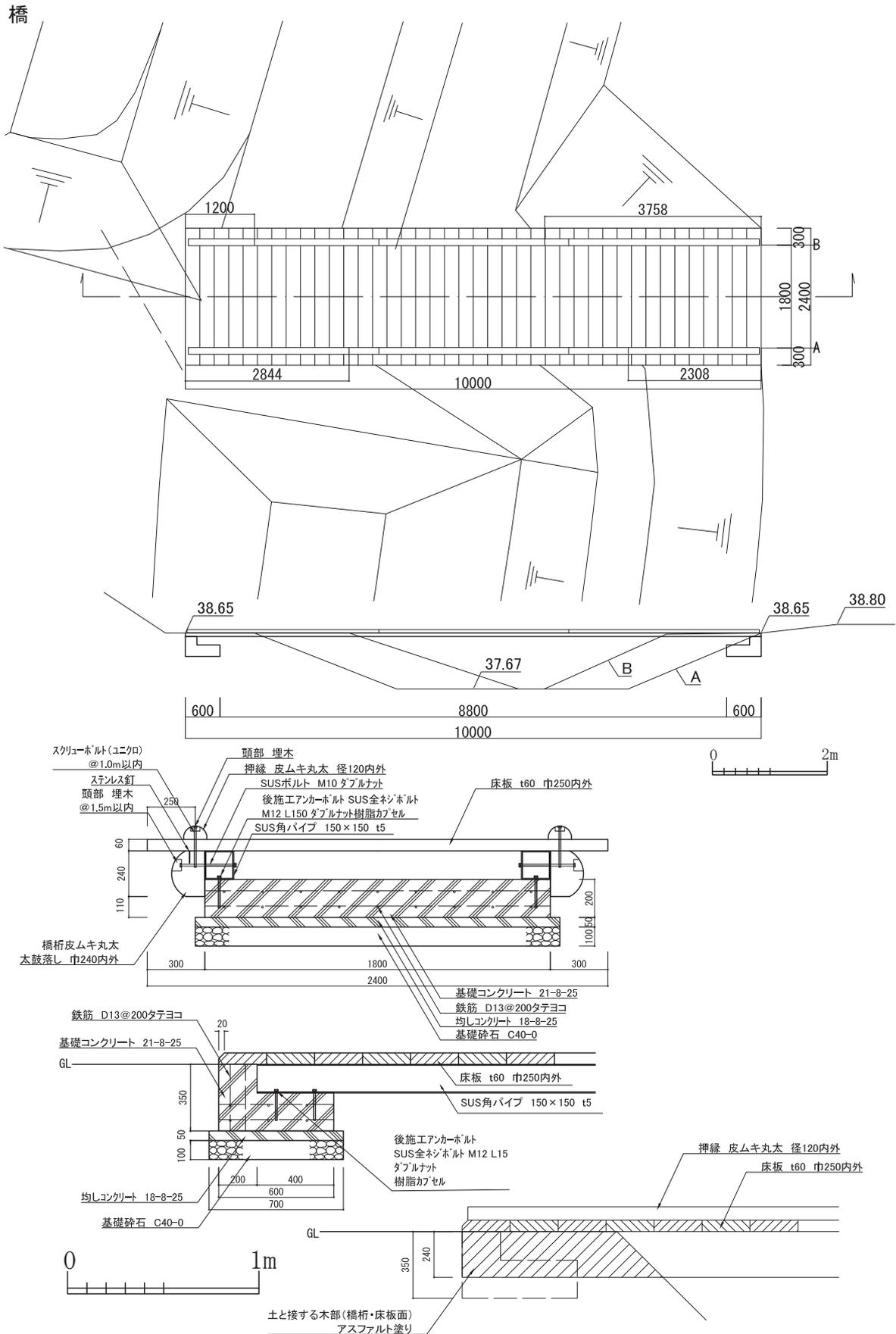
第45図 平成30年度工事設計図④



第46図 平成30年度工事設計図⑤

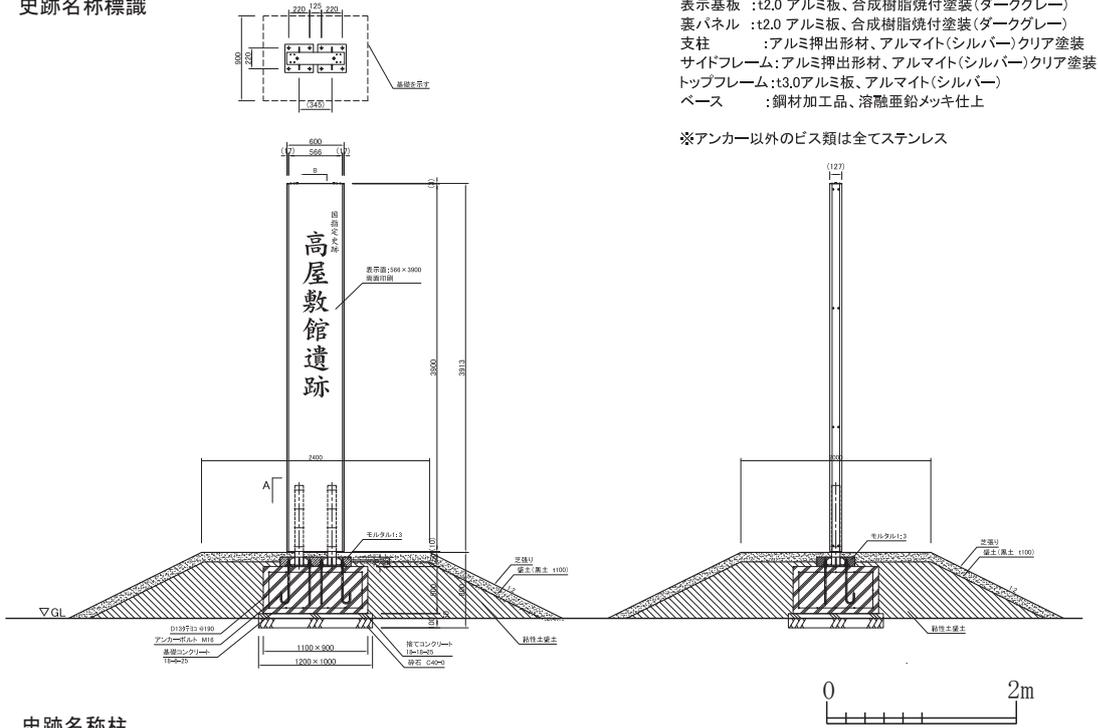


第47図 平成30年度工事設計図⑥

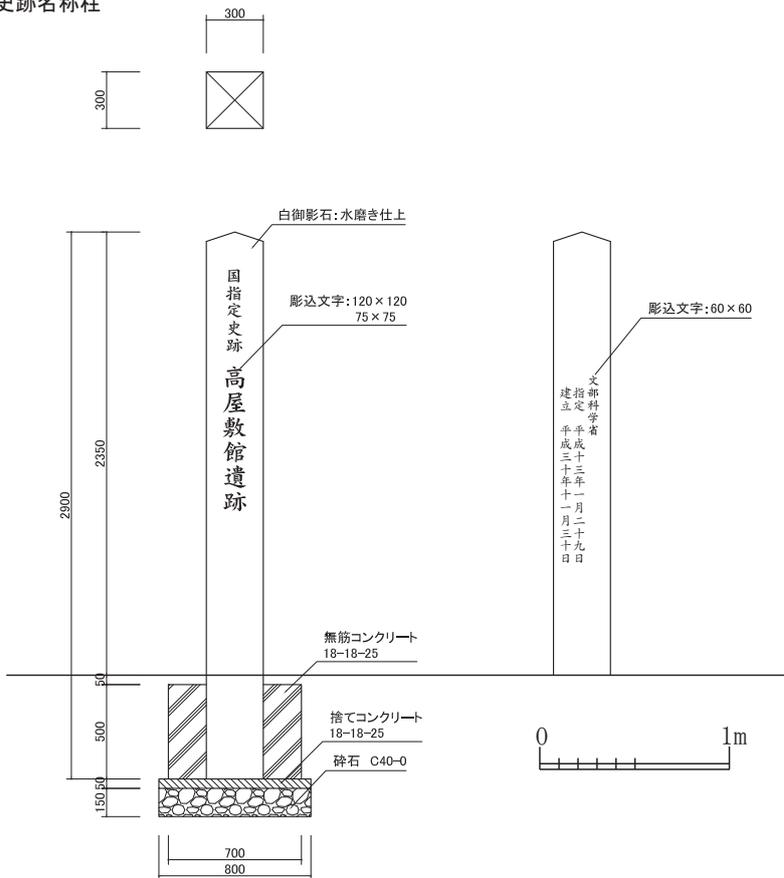


第48図 平成30年度工事設計図⑦

史跡名称標識

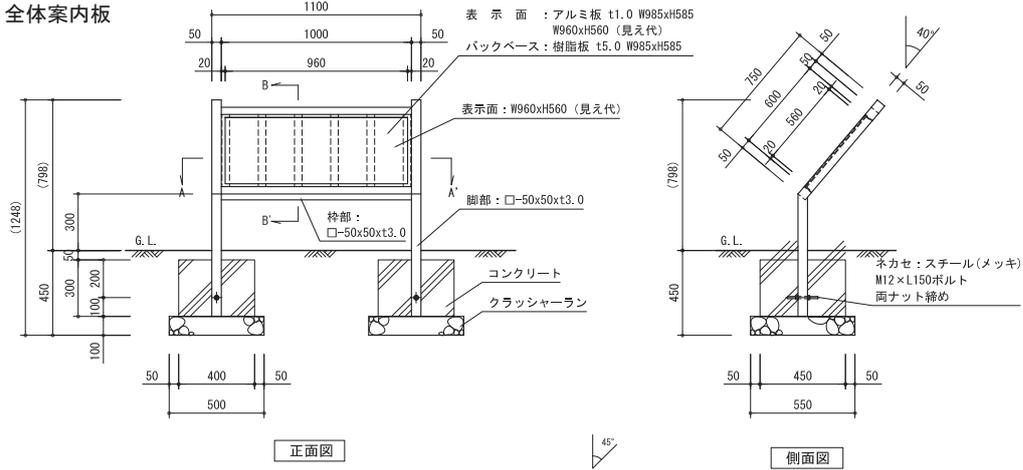


史跡名称柱

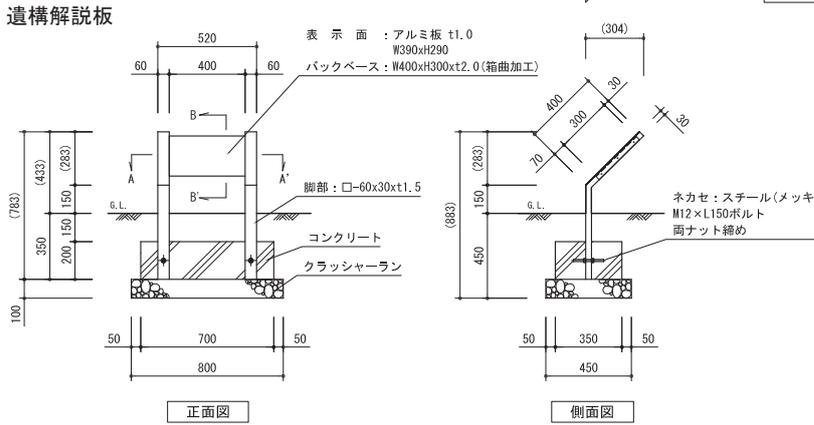


第49図 平成30年度工事設計図⑧

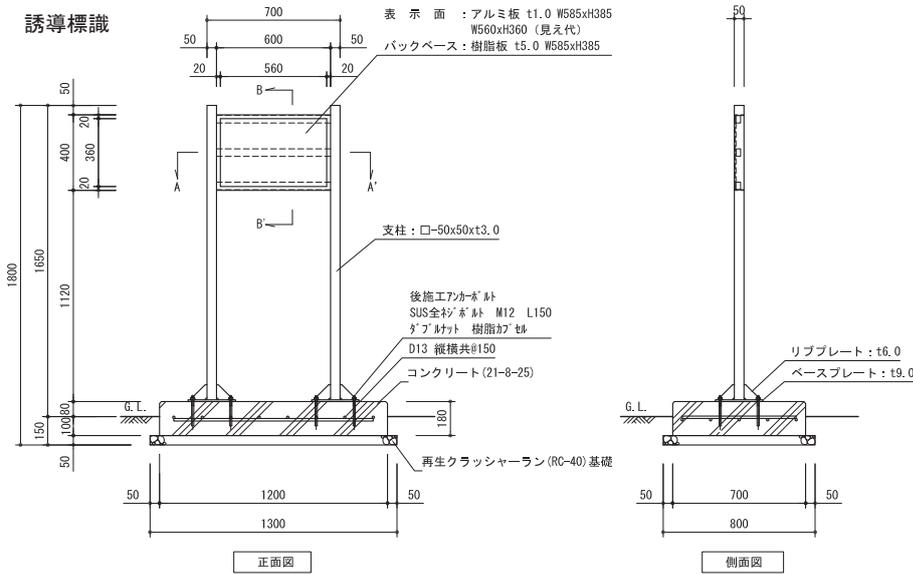
全体案内板



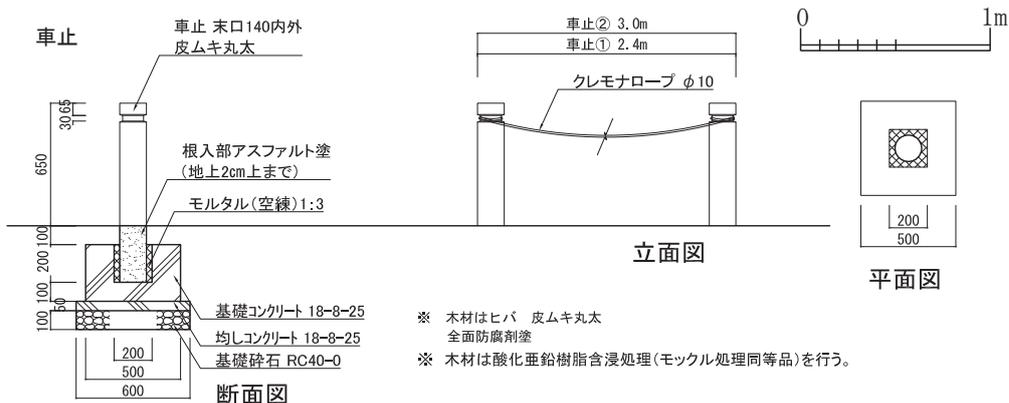
遺構解説板



誘導標識



車止



※ 木材はヒバ 皮ムキ丸太
 全面防腐剤塗
 ※ 木材は酸化亜鉛樹脂含浸処理(モックル処理同等品)を行う。

第50図 平成30年度工事設計図⑨



着工前 (S→)



完成 (S→)



着工前 (E→)



完成 (S→)



着工前 (S→)



完成 (S→)



着工前 (S→)



完成 (S→)



園路基面整正作業 (E→)



園路型枠設置寸法測定 (N→)



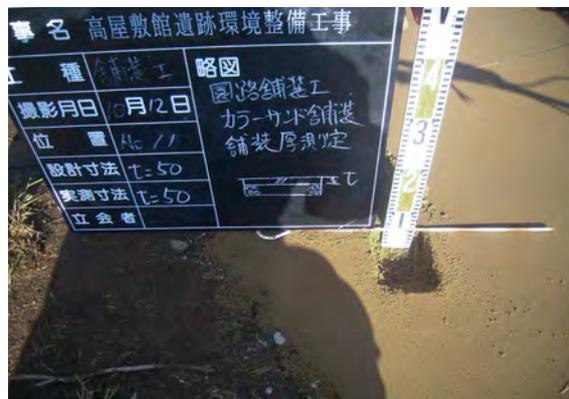
園路舗装作業状況 (S→)



園路舗装仕上状況 (S→)



園路舗装出来高測定状況 (E→)



園路舗装厚さ確認状況 (S→)



管理用通路碎石盛土敷均し・転圧状況 (N→)



管理用通路完成 (N→)



法面（土塁）下草除去状況（W→）



法面（土塁）芝張状況（W→）



平場耕運作業状況（S→）



平場芝張作業状況（E→）



旧作業用仮設道路（壕）既設排水管撤去状況（N→）



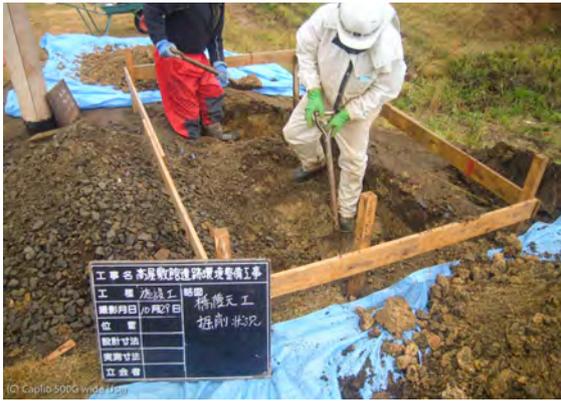
旧作業用仮設道路（壕）植生土のう設置状況（W→）



建物跡平面表示薄層カラー舗装作業状況（SE→）



建物跡平面表示薄層カラー舗装作業状況（E→）



橋基礎掘削状況 (N→)



橋基礎コンクリート打設状況 (N→)



橋基礎コンクリート出来形測定状況 (N→)



橋完成 (W→)



遺構説明板基礎コンクリート出来形測定状況 (W→)



全体案内板完成 (W→)



史跡名称標識完成 (N→)



史跡名称柱完成 (S→)

第Ⅲ章 資料編

高屋敷館遺跡は、平成6・7年度に国道7号浪岡バイパス建設事業に先立つ発掘調査が青森県埋蔵文化財調査センターにより実施され、報告書は平成10年3月に刊行されている（青森県教育委員会1998）。その後、遺跡の重要性から保存が決定され、平成13年1月に国史跡指定された。また、バイパスは、西側を迂回するルートが設定された（浪岡町教育委員会2001）。迂回ルートは、野尻(3)遺跡及び山元(1)遺跡を通る形であったが、平成17年度に刊行された報告書では、『高屋敷館遺跡Ⅲ』として調査・報告されている（青森県教育委員会2005）。また、さらに北側の迂回ルートの接続部分について、『野尻(3)遺跡Ⅱ』として調査・報告されている（青森県教育委員会2006）。

高屋敷館遺跡の調査結果を契機に、三浦圭介氏を中心として、いわゆる「防御性集落論」が高まり、平成17年には蝦夷研究会の青森大会において論の成果が集約され、翌年刊行された『北の防御性集落と激動の時代』にまとめられている（三浦・小口・斉藤2006）。

「防御性集落論」については異論があり、結界と評する論（工藤1997）や、「囲郭集落」と呼称する論（八木2011）も存在する。八戸市林ノ前遺跡の成果（青森県教育委員会2006ほか）や、新田(1)遺跡をはじめとする石江遺跡群の成果（青森市教育委員会2014ほか）などでも慎重な取扱いがなされていたが、近年、青森県外ヶ浜町山本遺跡の測量成果を基

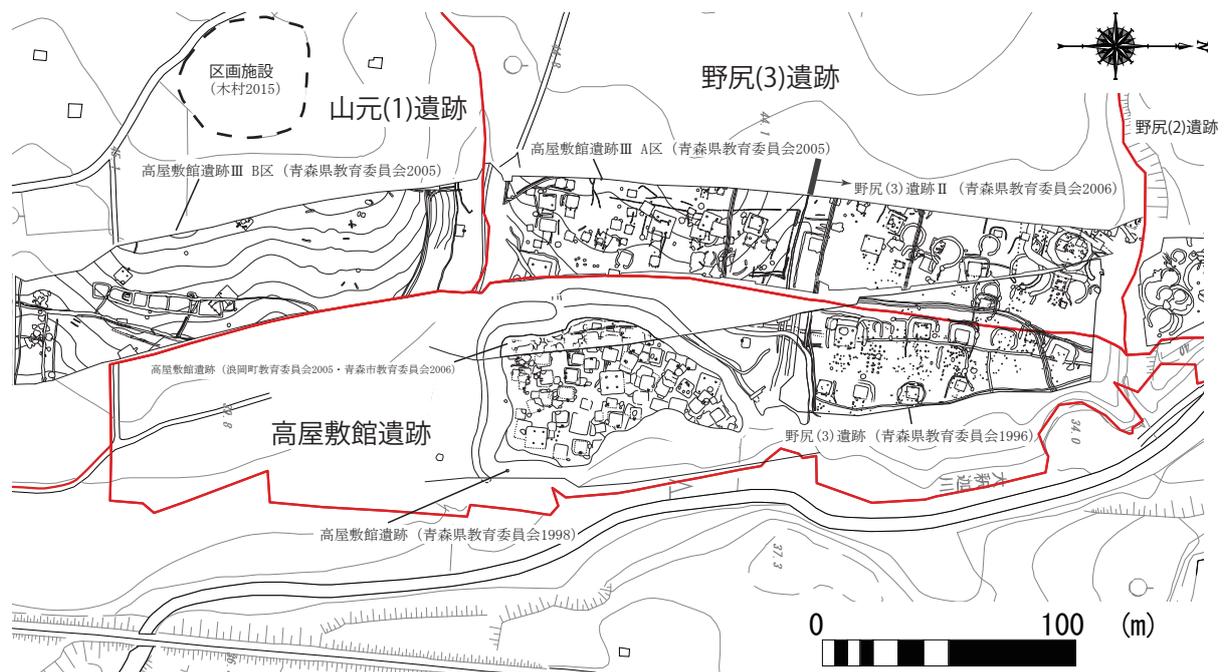
に、三重の壕と土塁が伴う集落が想定され¹⁾（関根2017）、防御性に関する認識が再び強まり、平成30年に刊行された『青森県史通史編1』でも防御性集落としての項が設けられ、高屋敷館遺跡は防御性集落の代表遺跡として取り扱われている²⁾（青森県2018）。

その他、筆者が確認・報告した山元(1)遺跡内にある、土塁と壕を持つと想定される方形区画施設（木村2015）は、発掘調査が未実施ではあるが、巻首図版2下段の写真のとおり、高屋敷館遺跡の土塁や柵列より高い位置から視認可能な場所にあり、地元民が「高屋敷」と呼ぶ本来の場所として蓋然性が高いものと思われる³⁾。

平成6・7年度の発掘調査における調査資料は、発掘調査担当機関であった青森県埋蔵文化財調査センターが長らく保存・管理してきたが、史跡整備が進行し、事業の最終年度が平成30年度と確定した平成28年度に譲与を受けた。

譲与資料のうち、出土遺物について確認したところ、非掲載資料の中に、羽釜や墨書土器・刻書土器・擦文土器等が含まれることが判明し、作図・計量等資料化した。

また、平成10年に報告された橋脚の年輪年代測定の結果についても、酸素同位体を併せた年輪年代測定法によって精度の高い研究が行われていることから、再分析を依頼した。これらの成果について本章で報告し、整備の内容に反映させることとした。



第51図 高屋敷館遺跡及び周辺遺跡の遺構配置図

註

1) その他、法政大学教授小口雅史氏らが行った三次元レーザー測量の成果が一般社団法人日本考古学大会2016年度弘前大会の小口氏の講演中で紹介されている。青森県史通史編1の本文については、これらの成果を基にした記述がみられる。

三次元レーザー測量のようなリモートセンシングや踏査に伴う測量は、考古学的調査における調査戦略(Research strategy)を形成する上で重要な役割を果たすものであると海外の概説書でも紹介されているが、併せてそのデータの信頼性や精度をチェック確認する唯一の方法は、発掘調査であることが述べられている (Renfrew & Bahn 1991)。

確かに山本遺跡では古代の集落跡・土塁・壕跡といういわゆる「防御性集落」の構成要素が存在し、古代を主体とする遺物が出土したことから、防御性集落論を強く推しだす論拠とするのもわからない訳ではない。しかしながら、現時点で発掘調査が北海道新幹線建設に伴う外周の限定的な部分に留まり (青森県教育委員会2008ほか)、壕・土塁内の主体部や三重壕の外側に確認された竪穴建物群との関連を把握する調査はなされていない。

関根氏の論文にも触れられていたが、集落の複雑な構成構造が現状では古代集落の中に明確な類例がないことや、遺構の時期差および中世に改変されている要素がないか検討を要するという記述は、青森県野辺地町向田(35)遺跡で上北型の防御性集落の主体部とされる地点の溝跡(第36号住居跡扱い)から中世陶器が出土した事例(青森市教育委員会2014)や高屋敷館遺跡で遺物がほとんど伴わない後代に土地利用が行われたことにも通ずる話であり、看過できない重要な点である。『青森県史通史編1』において山本遺跡を古代の三重壕の防御性集落とする取扱いについて、十分な発掘調査による検証がなされていない現時点では、あくまでも仮説としての域を脱しないものであり、その位置づけについて、検証するための適切な発掘調査(必要最小限という意味ではなく、情報を整理した上で、検討内容をしっかり解明するような調査実施)を経た後に評価すべきものとする。

なお、古代における三重壕が発見した事例として、油伝(1)遺跡の事例がある(弘前市教育委員会2014)。しかしその内容は、部分的に検出された事例、かつ溝の土層堆積状況に掘り返しの痕跡が見られ、同時性が保証されない要素が含まれる。溝出土試料の¹⁴C年代値は11世紀前~12世紀中葉の結果で、出土遺物は古代中心ではあるものの、「防御性集落」の時期より下った時期となる可能性が高い。

2) 前掲註1) 用語として弥生時代と同様の「濠」が用いられているが、「堀」や「壕」などの用語との取扱いに関する定義は凡例中には取り上げられていない。また、野尻(4)遺跡と山元(1)遺跡の中にある区画施設について高屋敷館遺跡の前段として捉えているが、野尻(4)遺跡(青森県教育委員会1996)の壕跡については①壕跡より新しいとされる33Hの外周溝(196溝)が限定的な検出・記録に留まり、196溝の西側の壕跡上の部分と同規模の溝状の掘り込みがあり、その掘り込みは、壕外に連なる122溝に連結する位置関係にある。②北側にある同規模かつ壕外に延びる161溝(配置図上では112溝)は、第V-6-(1)-2図B-E'ラインの土層記録上は触れられていないが、第2・7・8層が実質相当し、B-B'ラインと近接したレベル(水準情報の記載がないので相対的な比較によるが)にある。112溝と122溝は新旧関係が存在しながらも、近接した時期での使用が想

定される。このことから196溝について、外周溝ではなく後代の溝であった可能性がある。あくまでも記録保存資料の発掘調査報告書という公表資料を基にした判断ではあるが、その場合、野尻(4)遺跡検出の壕は、外周溝の伴う建物群より後代になる可能性が出てくることとなり、高屋敷館遺跡の前段階の資料とは必ずしも言い切れない恐れがある。同様に、山元(1)遺跡検出の方形の二重壕(青森県教育委員会2005)の出土遺物は古代主体であるが、10世紀中葉以降とされる竪穴建物跡を切った溝で、切られた竪穴建物跡からの流れ込み等を含めた評価が必要となり、前段とは言い切れない要素がある。

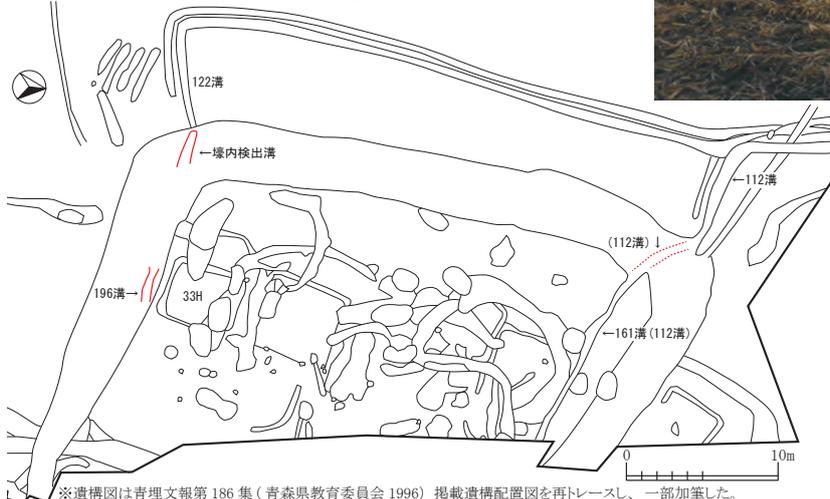
3) 方形区画に関する報告(木村2015)で触れているが、周辺の土地所有者の話によると、方形区画のある場所は、町会の共有地として広場として利用されていたとのことで、周辺の地点より最も標高が高く「高屋敷」という地名の基になったという話であった。

高屋敷館遺跡の遺跡登録に関する報告は、既刊報告書(青埋文報第243集)第1章第4節中で触れられており、その内容は、現在高屋敷館遺跡として取り扱われている遺跡は『青森県の中世城館』(青森県教育委員会1983)で、「野尻館」として登録されていた場所に相当し、高屋敷館遺跡は昭和36年の分布調査の際、別な場所(1km北に位置)の遺跡について登録され、昭和59年に国道7号浪岡バイパス計画時の青森県教育委員会による分布調査の結果、高屋敷館遺跡の場所に誤りがあることと、「野尻館」が本遺跡に該当することが確認され、野尻館が削除されて高屋敷館遺跡として登録されたということである(青森県教育委員会1998)。青森県における埋蔵文化財包蔵地名が大字・小字を基に登録されている背景があるため、高屋敷館遺跡として登録、史跡指定まで至ったのは事実であるが、遺跡そのものの実態は、9世紀代から続く野尻遺跡群南端にある古代最終末施設としての「野尻館」の位置づけの方が妥当である。

なお、山元(1)遺跡内の方形区画からは見下ろす位置に高屋敷館遺跡は所在しているが、高屋敷館遺跡の真南側は沢が一本入り、方形区画から延びる低い緩やかな丘陵が広がっている。土塁より南側の丘陵から内郭側を見た写真を写真26として掲載したが、内郭の地表面と土塁の天場の面の高さがほぼ同一である状態である。保護のため内郭は盛土がされ、当時の地表面より若干高い状況ではあるが、発掘調査で南側のエリアに柵列が内郭や土塁天場に確認されていないことを考えると丸見えの状況であったと想定される。外側から土塁を越え侵入し、そのまま5m近い落差の壕に落ちることがある場合は「防御」と言えるのかもしれないが、周辺から中の状態は視認しやすく、かつ弓矢など外からの攻撃が容易である。



写真26 (参考)高屋敷館遺跡南側から内郭側を望む

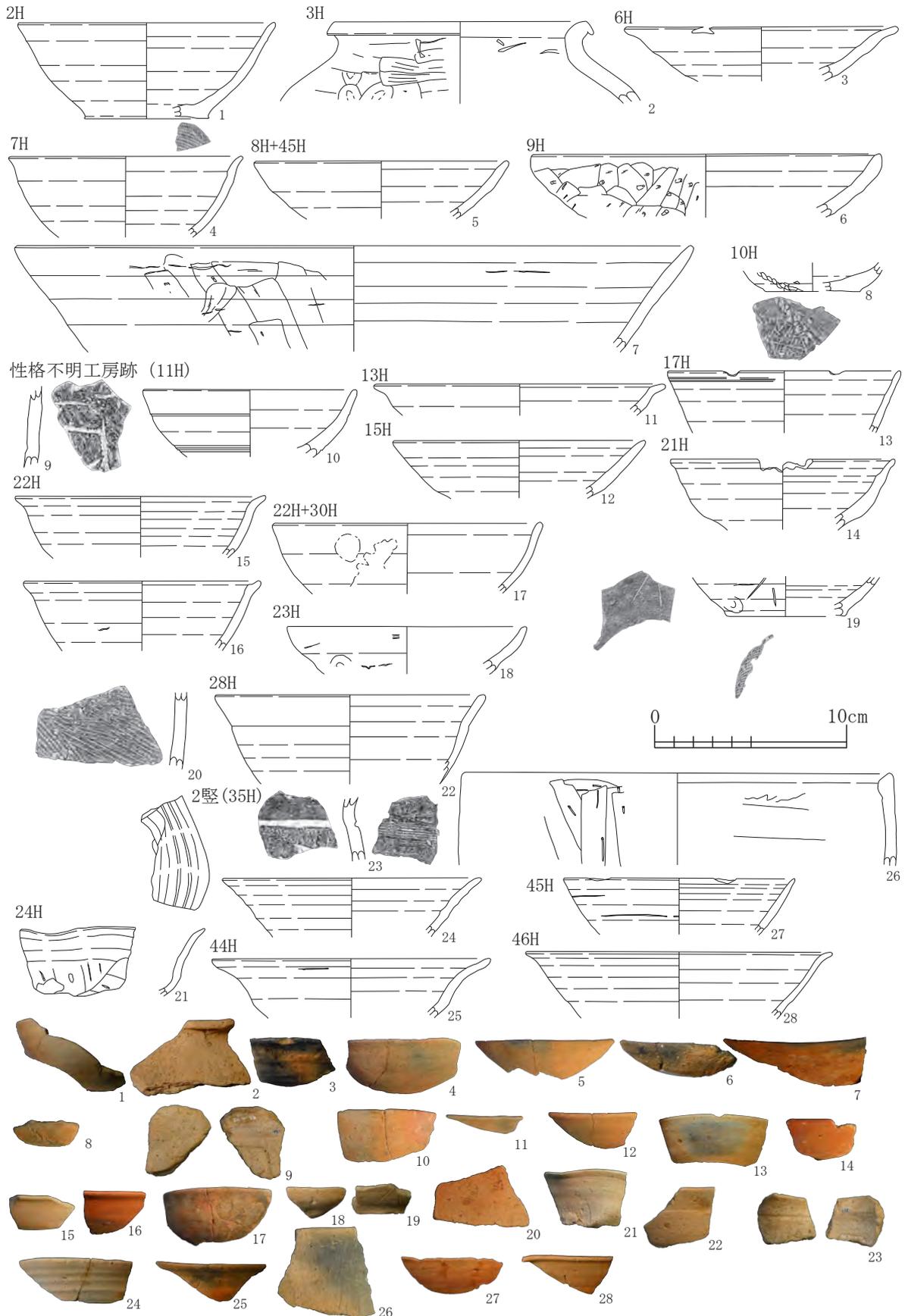


第52図 (参考)野尻(4)遺跡内壕跡と溝跡の位置関係

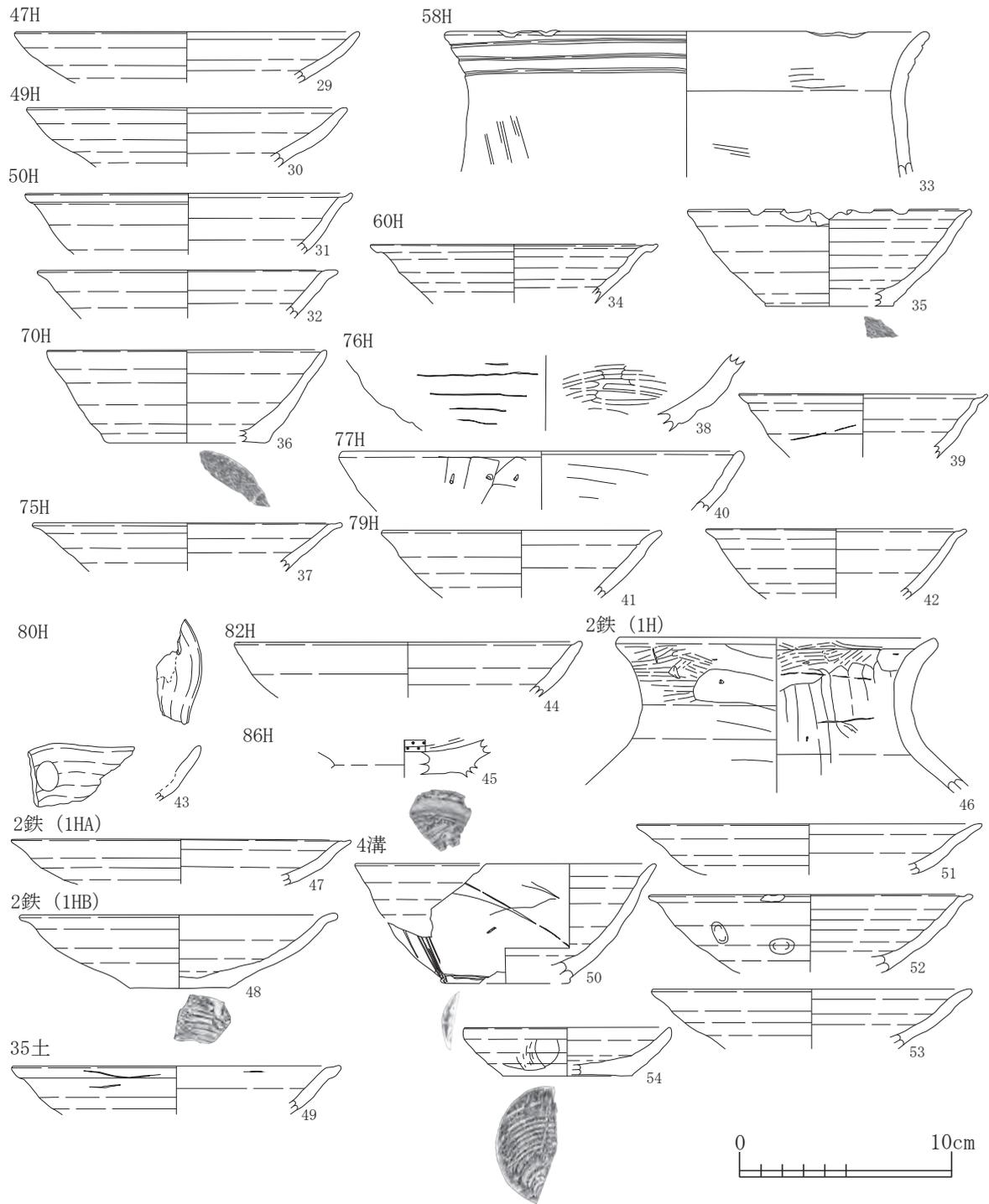
第1節 高屋敷館遺跡出土土器

127点図示した。土師器中心の構成ではあるが、須恵器(89)、擦文土器(20・33・62・70)も含ま

れる。土師器のうち、第2号竪穴遺構(第35号住居跡)下土坑出土の23は、外面の頸部に沈線による区

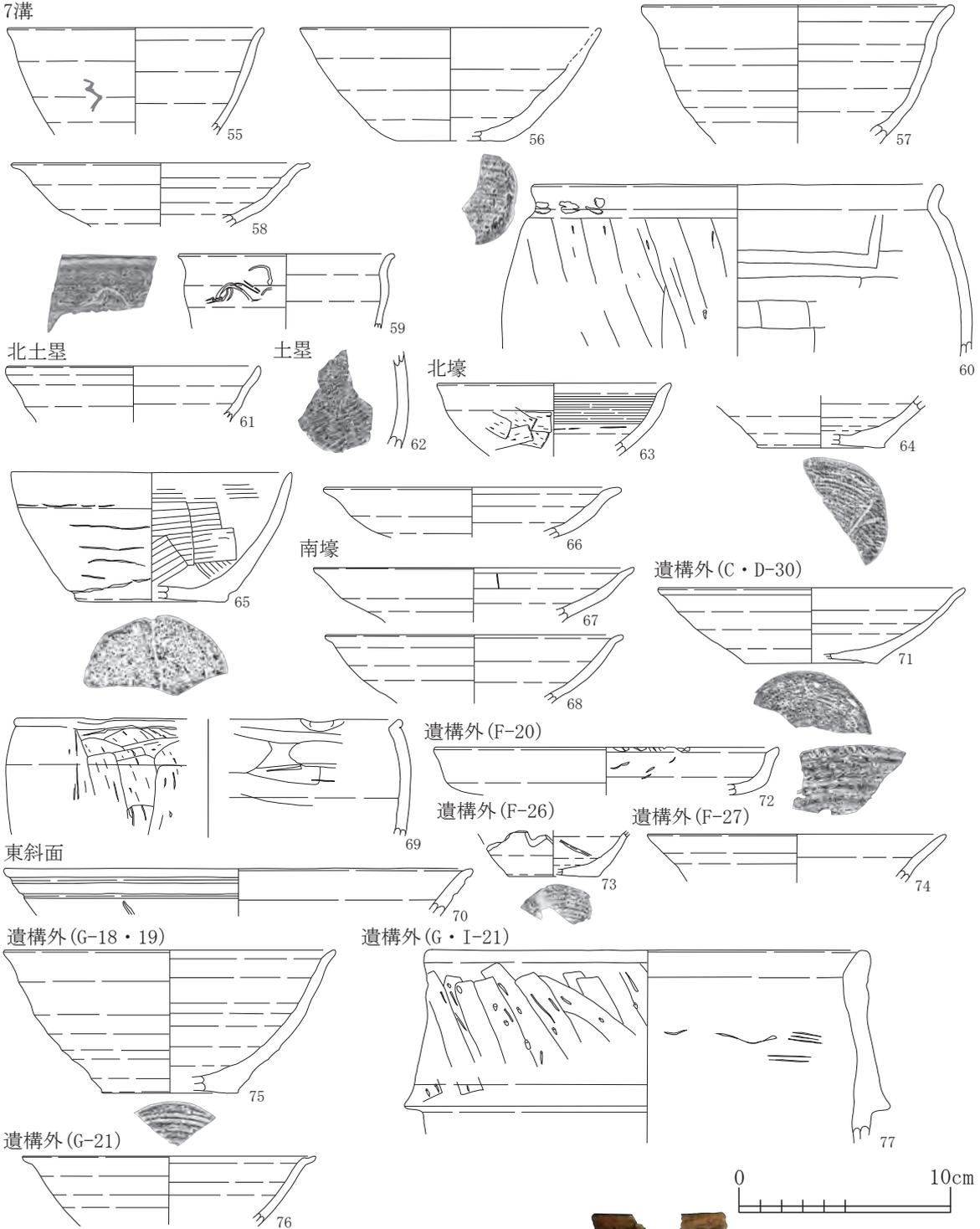


第53図・写真27 追加資料①

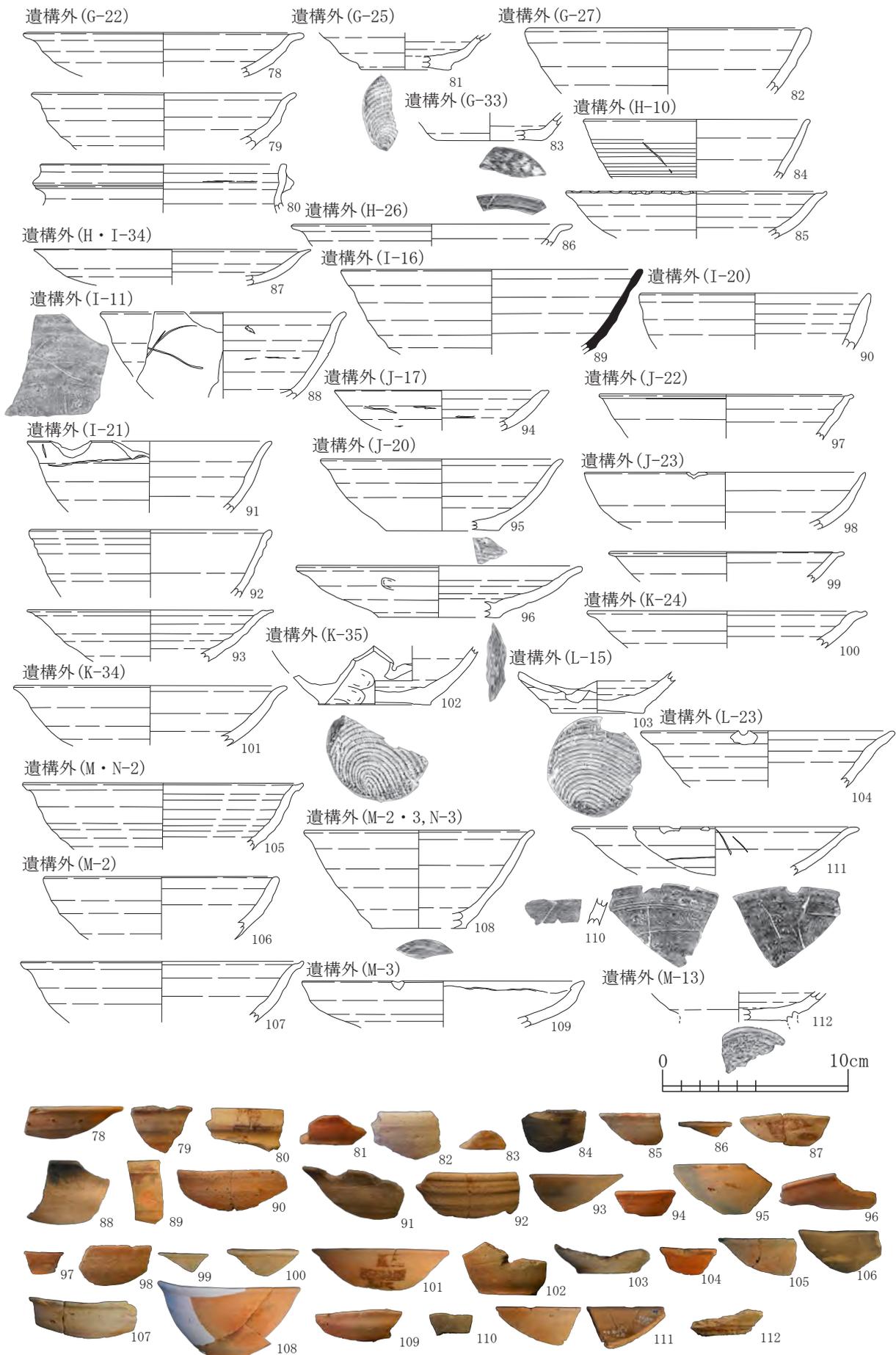


第54図・写真28 追加資料②

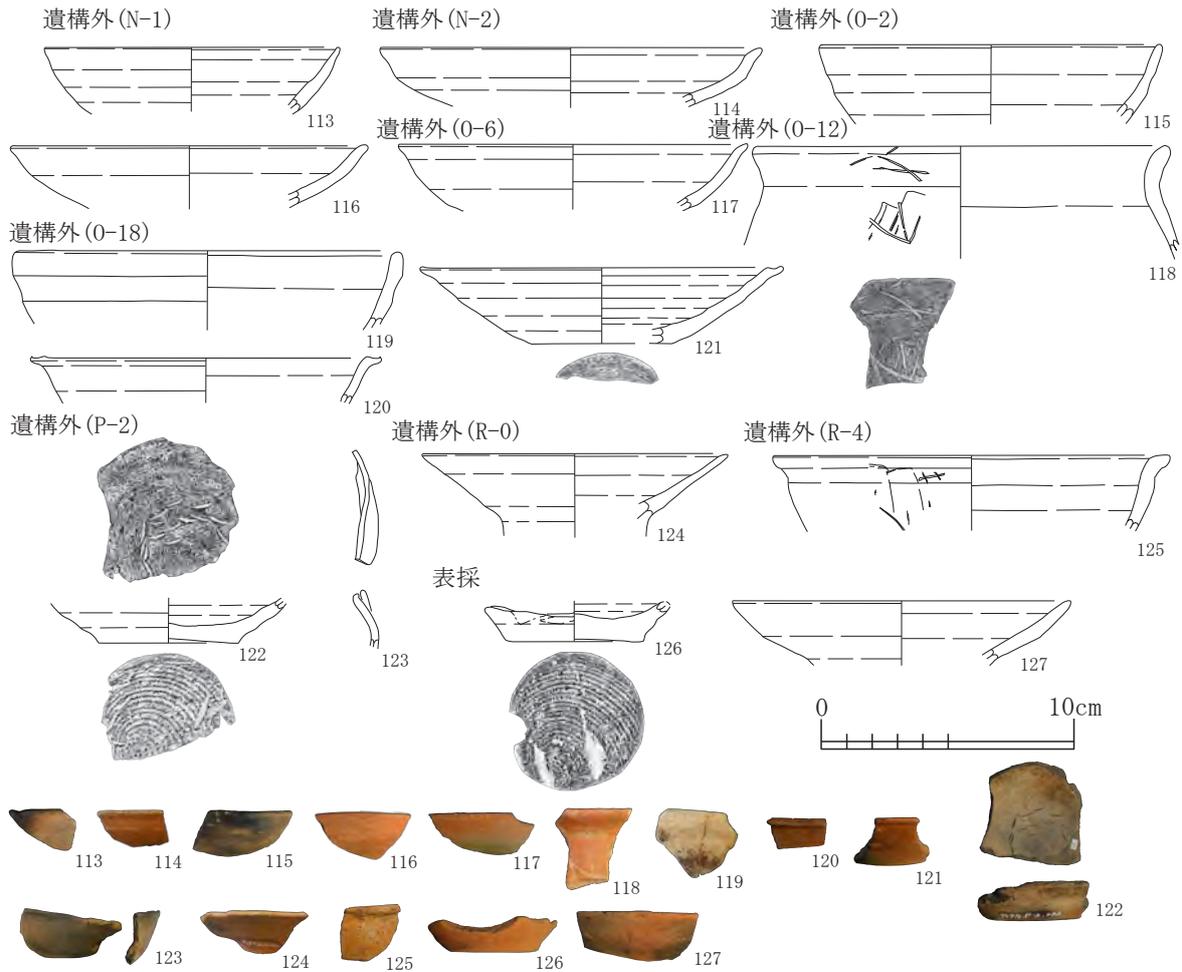
7溝



第55図・写真29 追加資料③



第56図・写真30 追加資料④



第57図・写真31 追加資料⑤

図版	番号	グリップ	出土地点	層位	種別	器種	口径	器高	底径	焼成	硬	砂	骨	赤	遺存率(口)	遺存率(底)	外面調整	内面調整	底部調整	外面色調	内面色調	備考	整理番号
53	1	2H		床下・覆土	土師器	碗	13.2	5.0	6.4	並	少	微	微		0.5/12	1.2/12	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切	10YR7/3	10YR7/4	088	
53	2	3H		覆土	土師器	甕	13.0			並	微	中	微		少	1/12	ナデ・ヘラ	ナデ		7.5YR8/4	10YR8/3	089	
53	3	6H		覆土	土師器	皿	14.0			並	微	中	多		1.5/12		ロクロナデ	ロクロナデ		7.5YR7/4	7.5YR6/6	090	
53	4	7H P-17		覆土	土師器	碗	12.0			並	中	微	少		2.5/12		ロクロナデ	ロクロナデ		5YR7/4	5YR7/3	091	
53	5	8H(セツク3・4)・45H		覆土	土師器	碗	13.0			良	少	少	少		3.5/12		ロクロナデ	ロクロナデ		7.5YR7/6	2.5YR6/6	092	
53	6	M-14	9H P-20・22	覆土	土師器	皿	18.0			並	微	多	微		2.6/12		ヘラ	ナデ		7.5YR6/4	10YR5/3	094	
53	7		9H P18	覆土	土師器	塙	35.0			良	微	中	中		1.3/12		ヘラ	ナデ		5YR6/8	7.5YR7/6	093	
53	8		10H	覆土	土師器	碗				並	微	少	中		微		ナデ	ナデ		10YR6/3	10YR6/4	095	
53	9		性格不明工房(11H)	覆土	土師器	甕				並	少	中	微	極微			ナデ	ナデ・沈線		10YR7/4	10YR7/4	136	
53	10		性格不明工房(11H)	覆土	土師器	碗	11.0			並	微	少	少	中	2.1/12		ロクロナデ	ロクロナデ		7.5YR8/6	7.5YR7/4	096	
53	11		13H	覆土	土師器	皿	14.8			良	微	微	微		1.5/12		ロクロナデ	ロクロナデ		7.5YR7/4	10YR8/3	097	
53	12		15H	床下	土師器	皿	12.8			並	少	少	微		1.9/12		ロクロナデ	ロクロナデ		7.5YR6/6	7.5YR6/6	098	
53	13		17H カマド	覆土	土師器	碗	12.0			並	微	少	少		2.6/12		ロクロナデ	ロクロナデ		10YR8/3	7.5YR6/6	099	
53	14		21H東側重複部分	覆土	土師器	碗	11.6			並	微	微	微		1/12		ロクロナデ	ロクロナデ		5YR6/8	5YR6/6	100	
53	15		22H	覆土	土師器	碗	13.0			並	微	微	微		0.6/12		ロクロナデ	ロクロナデ		7.5YR8/4	7.5YR8/4	101	
53	16		22H	覆土	土師器	碗	12.2			良	微	微	微		1.3/12		ロクロナデ	ロクロナデ		2.5YR6/8	2.5YR6/8	102	
53	17		22H・30H P1129	覆土	土師器	碗	13.8			並	微	中	微		2.3/12		ロクロナデ	ロクロナデ		5YR6/6	5YR6/6	103	
53	18	K-18	23H	覆土	土師器	碗	12.4			並	微	微	微	少	1.3/12		ナデ	ナデ		10YR8/4	10YR8/4	105	
53	19	K-18	23H	床面	土師器	碗			6.2	並	微	微	微		2.4/12		ロクロナデ	ロクロナデ		10YR7/3	10YR7/3	104	
53	20	L-18	23H	床面	織文	甕				並	少	多	極微	極微			ハケメ	ミガキ		7.5YR7/6	10YR6/6	137	
53	21		24H P113	覆土	土師器	耳皿				並	微	少	微				ロクロナデ・ヘラ	ロクロナデ		10YR8/3	10YR8/3	107	
53	22		28H	覆土	土師器	碗	14.0			並	微	微	微		0.7/12		ロクロナデ	ロクロナデ		7.5YR8/4	7.5YR8/4	106	
53	23		28H(35H)下土坑	覆土	土師器	甕				並	少	中	微	極微			ナデ・沈線・ミガキ	ハケメ		10YR7/4	10YR7/4	138	
53	24		28H(35H)下土坑+21 II層	覆土	土師器	碗	13.4			並	微	微	微		2.7/12		ロクロナデ	ロクロナデ		10YR8/3	10YR8/3	108	
53	25		44H	覆土	土師器	碗	14.4			並	微	微	微		2.3/12		ロクロナデ	ロクロナデ		7.5YR6/4	7.5YR6/4	109	
53	26		44H P-37	床面	土師器	甕	22.4			並	微	少	微		0.6/12		ヘラ	ヘラ		10YR6/3	10YR6/3	110	
53	27		45H	覆土	土師器	碗	12.0			並	微	微	微		2.3/12		ロクロナデ	ロクロナデ		5YR6/6	5YR6/6	111	
53	28		46H P1154	覆土	土師器	碗	16.0			並	微	微	微		1.4/12		ロクロナデ	ロクロナデ		7.5YR7/6	5YR7/6	112	
54	29		47H カマド付近P-12・13	床面	土師器	皿	16.0			並	微	少	少		2.3/12		ロクロナデ	ロクロナデ		7.5YR7/6	7.5YR8/4	113	
54	30	G-27	49H P-2	床直	土師器	皿	14.8			並	微	少	少		1.5/12		ロクロナデ	ロクロナデ		10YR8/4	10YR7/6	114	
54	31		50H P-14	床直	土師器	碗	15.2			良	微	少	微		1/12		ロクロナデ	ロクロナデ		7.5YR7/4	7.5YR6/2	口唇部沈線	115
54	32		50H	覆土	土師器	碗	14.0			並	微	少	少		1.4/12		ロクロナデ	ロクロナデ		7.5YR7/6	7.5YR6/3	116	
54	33		58H カマド内 P-43	覆土	織文	甕	22.6			並	中	微	微		1.6/12		沈線・ハケメ	ハケメ		5YR6/6	5YR6/6	117	
54	34		60H P-8	覆土	土師器	碗	13.4			良	微	微	微		1.5/12		ロクロナデ	ロクロナデ		7.5YR7/6	7.5YR7/6	口唇部凹線	118
54	35		60H P-36・37	覆土・床直	土師器	碗	13.2	4.6	6.0	良	微	微	微		2.5/12	1/12	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切	7.5YR7/6	7.5YR7/6	口唇部打欠	119
54	36		70H	覆土	土師器	碗	13.0	4.4	7.3	並	微	微	微		1.5/12	2/12	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切・ナデ	10YR8/3	10YR8/3	120	
54	37		75H	覆土	土師器	皿	14.4			良	微	微	微		1.6/12		ロクロナデ	ロクロナデ		7.5YR7/3	7.5YR7/3	口唇部沈線	121
54	38		76H	覆土	土師器	碗				良	微	微	微				ナデ	ヘラ・ミガキ		10YR6/3	10YR7/4	122	
54	39		76H	覆土	土師器	碗	11.6			良	微	微	微		2/12		ロクロナデ	ロクロナデ		5YR5/4	5YR5/4	口唇部沈線	123
54	40		77H カマド付近 P-59	覆土	土師器	碗	(18.6)			並	微	中	微		0.8/12		ヘラ	ナデ		7.5YR5/4	7.5YR4/4	124	
54	41	I-19	79H		土師器	碗	13.0			良	微	少	微		1.5/12		ロクロナデ	ロクロナデ		10YR8/4	10YR7/4	126	

第2表 高屋敷館遺跡出土土器観察表①

国史跡高屋敷館遺跡環境整備報告書Ⅲ

図版	番号	グリッド	出土地点	層位	種別	器種	口径	器高	底径	焼成	稜	砂	骨	赤	遺存率(口)	遺存率(底)	外面調整	内面調整	底部調整	外面色調	内面色調	備考	整理番号
54	42		79H 周溝		覆土	土師器	椀	12.0			並	中	少	少	1.2/12		ロクロナデ	ロクロナデ		7.5YR6/4	7.5YR6/6	口唇部沈線	125
54	43		80H P-32		床面	土師器	耳皿				並	中	少	少	1.5/12		ロクロナデ+ ユビオサエ	ロクロナデ+ ユビオサエ		7.5YR8/4	7.5YR8/4		127
54	44		82H		覆土	土師器	皿	(16.2)			良	微	微	微	0.5/12		ロクロナデ	ロクロナデ		7.5YR6/6	5YR6/6		128
54	45		86H		覆土	黒色土器	有台椀				並	中	少	少			ロクロナデ	ヘラミガキ	糸切ナデ	10YR8/4	10YR3/1	内面黒色処理	129
54	46		2鉄(1H)カマドP-3・6	1層	土師器	広口壺	14.8				並	微	中	少	2/12		ヘラミガキ・ ヘラ・ナデ	ヘラミガキ・ ヘラ・ナデ		7.5YR8/3	7.5YR8/4		086
54	47		2鉄(1HA) P-35	床直	土師器	皿	16.0				並	少	中	微	1/12		ロクロナデ	ロクロナデ		10YR7/3	10YR8/3	口唇部沈線	087
54	48		2鉄(1HB)P-93・95	床面・床下	土師器	皿	14.8	3.5	4.6		並	少	微	微	2/12	2/12	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	5YR6/6	5YR6/6		067
54	49		35土		覆土	土師器	皿	15.2			良	微	少	微	1/12		ロクロナデ	ロクロナデ		10YR7/4	10YR7/4	口唇部凹線	072
54	50		4溝 P-2		覆土	土師器	椀	14.0	5.7	6.0	良	微	少	微	1.5/12	2/12	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切	10YR8/3	10YR8/4	外面刻線	084
54	51	M-2	4溝		覆土	土師器	皿	16.0			良	微	少	微	1/12		ロクロナデ	ロクロナデ		7.5YR7/3	5YR7/4		075
54	52	R-1	4溝 P-2	1層	土師器	皿	14.6				並	中	中	少	1.5/12		ロクロナデ	ロクロナデ		10YR7/3	10YR7/3	口唇部沈線	073
54	53	P-1	4溝 P-47	1層	土師器	皿	14.8				良	微	少	微	2.5/12		ロクロナデ	ロクロナデ		7.5YR7/3	7.5YR7/3		076
54	54	R-1	4溝 P-6	1層	土師器	小皿	9.6	2.3	6.0		良	微	中	微	1/12	5/12	ロクロナデ (一部ヘラ)	ロクロナデ	右回転糸切	10YR8/3	10YR8/3		074
55	55	O-1	7溝	1層	土師器	椀	12.0				並	少	微	微	1/12		ロクロナデ	ロクロナデ		10YR7/4	10YR7/4	外面黒書	055
55	56	R-1	7溝	覆土	土師器	椀	14.2	5.4	5.4		並	中	微	微	0.2/12	3/12	ロクロナデ	ロクロナデ	静止糸切	7.5YR6/6	7.5YR6/6		064
55	57		7溝 P-38		土師器	椀	14.4				並	少	微	微	1.5/12		ロクロナデ	ロクロナデ		10YR7/4	10YR8/2		063
55	58	R-1	7溝	覆土	土師器	皿	13.8				並	中	少	微	3/12		ロクロナデ	ロクロナデ		7.5YR8/4	7.5YR7/4	口唇部沈線	077
55	59	R-1	7溝	覆土	土師器	小甕	10.0				良	微	微	微	1.7/12		ロクロナデ	ロクロナデ		7.5YR7/4	7.5YR7/4	外面刻書	130
55	60	R-O, S-O	7溝 P-2・X	1層、覆土	土師器	甕	19.0				並	少	微	微	2/12		ナデ/ヘラ	ナデ/ヘラ		10YR5/2	10YR5/2		065
55	61	O-7	北土塁	II層	土師器	椀	11.8				良	微	微	微	1.4/12		ロクロナデ	ロクロナデ		10YR7/4	10YR7/6	内面煤付着	131
55	62	H-21	土塁	1層	擦文	甕					並	少	多	極微	極微		ハケメ	ミガキ		10YR3/2	10YR2/1		139
55	63	O-11	北壕	覆土	土師器	椀	11.0				並	微	少	微	1/12		ロクロナデ・ ナデ・ヘラ	コテあて痕		7.5YR7/4	10YR8/2		080
55	64	O-11	北壕	覆土	土師器	椀			6.0		良	微	少	少		6/12	ロクロナデ	ロクロナデ	静止糸切	10YR6/1	10YR6/2	底面刻書	079
55	65		北壕 P-73・86	床下・下位	土師器	椀	13.2	6.1	7.0		並	少	多	少	3/12	6/12	ナデ	ハケメ	砂底	7.5YR7/3	10YR7/3		085
55	66		北壕	覆土	土師器	皿	13.6				並	少	中	少	2/12		ナデ	ナデ		10YR8/2	10YR7/2	内面黒斑	078
55	67		南壕	覆土	土師器	皿	15.0				良	微	少	微	2/12		ロクロナデ	ロクロナデ		7.5YR8/4	7.5YR8/4	外面刻線	081
55	68	E-30	南壕	覆土	土師器	皿	13.8				並	中	少	微	2.5/12		ロクロナデ	ロクロナデ		7.5YR8/6	7.5YR8/6		082
55	69	G-30	南壕	覆土	土師器	甕	(18.0)				並	少	中	微	0.8/12		ヘラ	ナデ		7.5YR6/3	7.5YR6/1	口唇一部打欠	083
55	70	B-25	東斜面	I層	擦文	甕	22.0				並	多	微	微	0.8/12		ナデ・沈線	ナデ		7.5YR6/4	7.5YR6/4		068
55	71	C・D-30		覆土	土師器	皿	14.2	3.6	6.2	不良	中	少	微	多	2/12	5/12	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	7.5YR7/4	7.5YR7/3		012
55	72	F-20		II層		かわらけ?	16.0				良	極微	微	微	1/12		ロクロナデ	ロクロナデ		5YR7/6	2.5YR6/6	口唇部工具痕、 内面体部爪痕 多数	001
55	73	F-26		II層	土師器	椀			4.2		良	極微	少	微	極微	3/12	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	10YR7/3	10YR7/3	体部打欠(一部 V字状)、内 面刻線	013
55	74	F-27		覆土	土師器	椀	14.0				良	極微	中	少	微	1/12	ロクロナデ	ロクロナデ		5YR7/4	5YR7/6		014
55	75	G-18・19		II層・覆土	土師器	椀	15.4	6.8	6.4		良	少	中	少	2/12	1/12	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	5YR7/6	7.5YR7/6		015
55	76	G-21		II層	土師器	椀	13.6				並	少	微	微	1/12		ロクロナデ	ロクロナデ		10YR6/3	10YR6/3		069
55	77	G・I-21	P-203	確認面 II層	土師器	羽釜	20.6				並	少	微	微	2/12		ヘラ/ナデ	ナデ(一部 ハケメ)		7.5YR7/4	10YR7/4		070
56	78	G-22	P-394	確認面	土師器	皿	15.0				良	中	少	微	中	2/12	ロクロナデ	ロクロナデ		7.5YR8/3	7.5YR8/4		017
56	79	G-22		I層	土師器	皿	14.0				並	微	少	微	1/12		ロクロナデ	ロクロナデ		5YR7/4	5YR6/6	口唇部打欠有	019
56	80	G-22	P-393	確認面	土師器	羽釜	13.0				良	微	中	微	中	1/12	ロクロナデ	ロクロナデ		7.5YR8/4	7.5YR8/4	唇部分に沈線 状	018
56	81	G-25		II層	土師器	椀			4.8		良	微	少	少	微	4/12	ロクロナデ	ロクロナデ	右回転糸切	5YR6/8	5YR4/8		020
56	82	G-27		II層	土師器	椀	15.0				並	少	中	少	微	1/12	ロクロナデ	ロクロナデ		10YR8/2	10YR8/2		021
56	83	G-33		II層	土師器	椀			6.0		並	少	中	少	微	2/12	ナデ	ナデ	糸切ナデ	7.5YR7/4	7.5YR7/4		022
56	84	H-10		II層	土師器	椀	12.0				良	微	少	少	微	2/12	ロクロナデ	ロクロナデ		10YR6/3	7.5YR6/2	外面体部刻書	023
56	85	H-10		II層	土師器	皿	14.0				良	微	少	少	微	1/12	ロクロナデ	ロクロナデ		7.5YR8/2	7.5YR8/3	口唇部キザミ 状に打欠	002
56	86	H-26		II層	土師器	皿	15.0				並	微	微	微	1/12		ロクロナデ	ロクロナデ		7.5YR7/6	7.5YR7/6	口唇部凹線	025
56	87	H・I-34		II層	土師器	皿	14.0				並	微	微	微	1/12		ロクロナデ	ロクロナデ		10YR8/3	7.5YR8/3		003
56	88	I-11		覆土	土師器	椀	13.0				良	微	少	少	微	1/12	ロクロナデ	ロクロナデ		7.5YR6/3	7.5YR6/4	外面体部刻書	026
56	89	I-16		覆土	須臾器	坏	(15.6)			不良	並	少	少	少	0.6/12		ロクロナデ	ロクロナデ		7.5YR6/4	7.5YR6/6		132
56	90	I-20		II層	土師器	皿	12.2				並	少	多	少	3/12		ロクロナデ	ロクロナデ		7.5YR7/6	7.5YR7/4		028
56	91	I-21	P-233	確認面	土師器	椀	13.0				並	微	微	微	2.5/12		ロクロナデ	ロクロナデ		10YR7/3	10YR7/3	口唇部一部打欠、 外面刻線、 内面煤付着	029
56	92	I-21		II層	土師器	椀	12.8				良	少	中	少	微	2/12	ロクロナデ	ロクロナデ		7.5YR8/3	7.5YR7/4		030
56	93	I-21		II層	土師器	皿	13.0				良	微	微	微	2/12		ロクロナデ	ロクロナデ		7.5YR6/4	7.5YR7/4	口唇部沈線	031
56	94	J-17	P-111	確認面	土師器	皿	11.4				良	微	少	少	微	1/12	ロクロナデ	ロクロナデ		5YR7/6	5YR7/6	内外面塗上痕、 口唇部凹線	004
56	95	J-20		II層	土師器	椀	12.8	3.9	6.2		良	微	微	微	2/12	1/12	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	7.5YR6/6	7.5YR6/6		034
56	96	J-20	P-147	確認面	土師器	皿	15.0	2.8	6.6		良	少	微	微	2/12	3/12	ロクロナデ	ロクロナデ	静止糸切	7.5YR7/4	7.5YR7/4	焼き歪み	033
56	97	J-22		III層	土師器	椀	13.4				良	微	微	微	1/12		ロクロナデ	ロクロナデ		5YR4/6	5YR4/4	口唇部沈線	005
56	98	J-23		II層	土師器	皿	15.0				並	少	少	少	極微	1/12	ロクロナデ	ロクロナデ		7.5YR7/3	7.5YR7/4	口唇部打欠	035
56	99	J-23		II層	土師器	皿	12.4				良	微	微	微	1/12		ロクロナデ	ロクロナデ		10YR8/3	10YR8/3	口唇部沈線	036
56	100	K-24		II層	土師器	皿	14.8				良	微	微	微	1/12								

図版	番号	グリッド	出土地点	層位	種別	器種	口径	器高	底径	焼成	礫	砂	骨	赤	遺存率 (口)	遺存率 (底)	外面調整	内面調整	底部調整	外面色調	内面色調	備考	整理 番号
57	121	0-18		I層	土師器	皿	14.2	3.0	5.6	並	中	微	微	微	0.5/12	3/12	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	5YR6/6	5YR6/6		060
57	122	P-2		覆土	土師器	椀			5.6	並	少	微	微	微		5/12	ロクロナデ	ロクロナデ	右回転糸切	10YR7/3	10YR6/3	内面底部爪刺 突起多数	061
57	123	P-2		II層	土師器	耳皿	(9.0)			並	微	微	微	微	1.5/12		ロクロナデ	ロクロナデ		10YR5/2	10YR5/1		062
57	124	R-0		覆土	土師器	皿	12.0			並	中	少	少	少	2/12		ロクロナデ	ロクロナデ		10YR7/4	10YR7/4		011
57	125	R-4		確認面	土師器	椀	(15.6)			並	微	中	少	少	0.7/12		ヘラ・ナデ	ナデ		7.5YR6/6	7.5YR6/6		135
57	126		表採		土師器	椀			5.4	並	中	微	少	微		10/12	ロクロナデ	ロクロナデ	右回転糸切	5YR6/6	5YR6/6	打欠、小皿状 に作出	066
57	127		表採		土師器	皿	13.4			並	少	微	微	微	2/12		ロクロナデ	ロクロナデ		5YR6/4	10YR6/3		071

第4表 高屋敷館遺跡出土土器観察表③

画が見られ、内外面ともハケメ調整の9世紀中葉以前の資料で、高屋敷館遺跡周辺の野尻遺跡群を含めた出土資料群の中では最古段階にあたる。また、既刊報告書では非掲載の羽釜は、遺構外出土でロクロ使用の小型のもの(80)と非ロクロの大型のもの(77)が確認されており、大型のものは鋸部分を手で摘み延ばすような形で作出しておらず、外面のヘラ削りによる調整で突出させている。

墨書のある資料は、食膳具の第7号溝出土資料(55)のみで、刻書のうち煮炊具は、性格不明工房跡(第11号住居跡)出土の甕体部内面に刻まれたもの(9)や外面に刻まれた資料(59・118)がある。食膳具の刻書資料では、細い線描き気味の刻線(19・50・88・110・111)が多く、幅広の資料は遺構外出土の73のみである。その他、外面底部に縄の圧痕が見られる資料(8)、内面見込み部分に爪による刺突が多数見られる資料(122)がある。

食膳具は、口唇の打欠が顕著で、今回図示した資料についても13点含まれる。遺構外出土の85は、キザミ状に打欠を行っており、輪花を意識したような作出である。表採の126は、打欠後に破断面を擦り、小皿状に整形している。

また、食膳具のうち皿形の資料について、口唇端部を特徴的に作出するものが多くみられる。

A1: 口唇端部を浅く窪ませ、内傾させるもの
(16・31・39・76・107)

A2: 口唇端部を浅く窪ませ、平滑気味にさせるもの。外側はそのままのぼし上げるタイプ
A2a (47・85・93・94・100・121) と「て」の字気味に突出させるA2b (49・52・58・97・99・120) がある。

A3: A2のタイプに近似するが外面側が面取り気味に平滑面が作出される (34・105)

B: 凹線まで至らないものの、平滑な面が作出され、「て」の字気味に突出する (11・78・86)

これらの資料は、既報告の高屋敷館遺跡および隣接の野尻(3)遺跡でも出土例があり、一部須恵器扱の資料も含まれる¹⁾。主だったものについて第

58図に図示した。既刊報告書ではこれらの資料について10世紀中葉以降の年代を想定しており、高屋敷館遺跡の内郭内でも切り合い関係で古手の竪穴建物(住居)跡側から出土している。

その他、耳皿が第80号住居跡(43)と遺構外(123)から出土している。

既報告の出土土器は、主に11世紀前葉までを主体とする資料として捉えられ、12世紀初頭とされた年輪年代測定の結果と開きがある。

本章第3節で報告する橋脚の分析結果は、既報告の分析値とほぼ変わらない結果となり、高屋敷館遺跡の東側で11世紀末～12世紀初頭に橋脚が設置されたことと人々の活動は確実となった²⁾。

今回図示した資料の中で、遺構外出土資料の中にかかわりに類似する資料が3点(72・115・119)含まれる(第59図)。それ以外に54に図示した第4号溝跡の第1層出土の小皿は、ロクロかわらけの小型のタイプに類似した資料である。

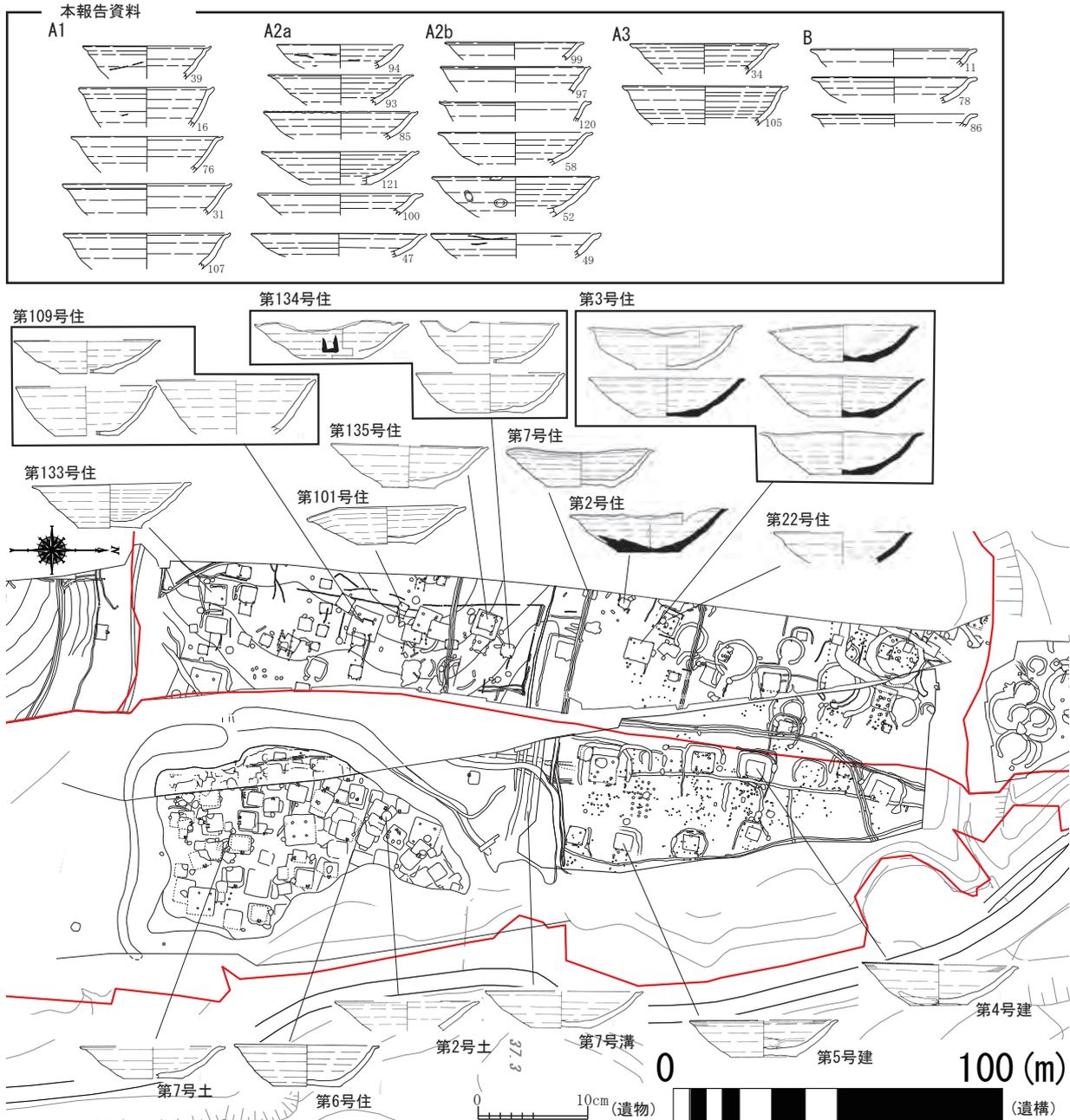
周辺の野尻(4)遺跡の遺構外からも12世紀後葉と判断されるかわらけ(手づくね・ロクロ)、白磁碗等が出土し、平泉期における居館が存在した可能性の指摘があり(羽柴2010)、12世紀代に高屋敷館遺跡及び周辺での土地利用は確実であると言える³⁾。

註

1) 図示した資料のうち青森県埋蔵文化財調査センター所蔵の資料は、筆者が資料調査で遺物全てを実見した。その結果、『野尻(3)遺跡II』で須恵器扱の資料は、他報告書で土師器とされている資料と同質で、海綿骨針を含み、色調は褐色～赤褐色を呈する。火罨痕や重ね焼き痕は確認されず、胎土分析も実施されていない。また、口唇端部以外の特徴として見込部分を凹ませる資料が定量含まれている。

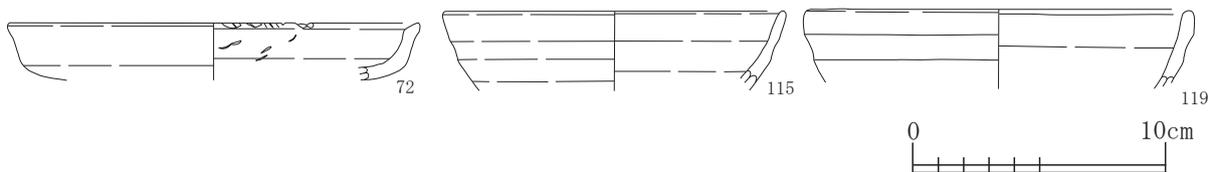
2) 壕について、既報告の報告書(青森埋文報第243集 青森県教育委員会1998)中で東壕の掘り直しに関する記述・図示(青森埋文報243集図15)が見られる。東側の橋脚が検出された地点の木柱が入った土層断面図の図示が見られないが、近接する図15の土層断面図と橋脚の位置関係と比較すると、V字状の壕の段階ではなく、前段階の段状の壕の時点で機能していたものと推察される。これらのことを総合すると12世紀前半の時点では壕が開口していたこととなり、一度埋め戻され、その後再度壕が掘削されていたことになる。その他、既報告の第2号井戸状遺構(青森埋文報243集図214)は南壕の落ち際から検出されているが、実質的には壕が埋没ないしは上面近くまで埋没した状況での掘削が想定される。

3) 前掲註2) その意味で、いわゆる「防衛性集落」は、確かに10世紀後葉以降に溝や土塁が伴う集落跡ではあるが、遺物が帰属しない時期での再利用や使用について考慮する必要があり、その扱いは十分注意すべきである。



※遺構図は（木村 2015）を利用。遺物のうち既報告資料は青理文報第 186・243・393・414 集（青森県教育委員会 1996・1998・2005・2006）掲載図を縮小し作成

第58図 口唇端部に特徴のある食膳具及び既往調査での出土状況



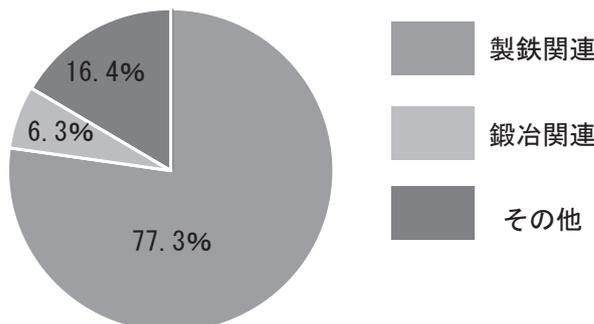
第59図 かわらけ類の資料

第2節 高屋敷館遺跡出土鉄関連遺物について

平成6・7年の青森県埋蔵文化財調査センターによる発掘調査では、鉄関連遺構2基(第1号・第2号鉄関連遺構)が検出されたほか、多量の鉄関連遺物が出土した(青森県教育委員会1998)。報告書では、鉄関連遺物について大型の炉壁片が一部掲載されているほか、羽口・鉄器が集成されているものの、遺構毎の出土重量以外の情報は不明であった。そこで、出土鉄関連遺物約356kgについて、肉眼観察のほか、強力磁石(TAJIMA製PUP-M)や標準磁石を用いて分類を行い、重量の測定・集計により、遺跡内で行われた鉄生産工程を推定した。

・ 出土鉄関連遺物の概要

製鉄関連と鍛冶関連遺物が出土している。北～西側の遺構からの出土重量が多くみられる。特に遺構内では、第1号鉄関連遺構、9H、土塁、北壕、9溝、遺構外では、調査区中央を南北に縦断するグリッドラインL～0において、15kgを超える顕著な出土重量が認められる(第5表、第63図)。種別毎の比率を出土重量全体で見ると、工程の判別が難しい遺物(羽口、鉄塊系遺物、含鉄鉄滓、再結合滓、石、その他)を除いて、製鉄関連遺物(炉壁・流動滓・砂鉄焼結塊・炉内滓)が77.3%、鍛冶関連遺物(椀形鍛冶滓・鍛冶滓・鍛造剥片)が6.3%認められ、製鉄関連が大半を占める。遺構毎にみると、製鉄関連遺物は、全体的にも出土量が多い第1号鉄関連遺構、9H、土塁、北壕、9溝から10kg以上出土しており、特に第1号鉄関連遺構からは、製錬炉で一般的に排出される種類の遺物が認められ(第62図2・3、5～18)、50kgを超える遺物が出土している¹⁾。鍛冶関連遺物は、製鉄関連遺物に比べて量が少ないものの、60H、3竪から1～2kg程度出土している。



第60図 鉄関連遺物出土重量比(種別毎)

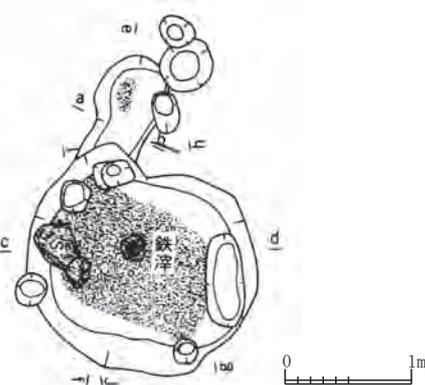
・ 高屋敷館遺跡の鉄生産

集計の結果、製鉄関連遺物が大半を占める。製鉄関連遺物を主体とし、他の遺構と比べて多くの出土重量が認められた北西側の範囲(第1号鉄関連遺構、9H、土塁、北壕、9溝付近)に製錬炉が存在した可能性が高いと考えられる。特に分析結果から、鋼精錬炉と報告された第1号鉄関連遺構Pit8については、歪ではあるものの、平面形が青森県周辺で検出される製錬炉(縦形炉)に近い形状を示しており、また、製鉄関連遺物を主体として、遺構内で最も多い出土重量が認められたことから、製錬炉であった可能性が高い。土塁や北壕、9溝からも多量の出土が認められた結果については、流れ込み等の要素も考えられるが、第1号鉄関連遺構との位置関係から排滓場として利用されたと想定される。鍛冶関連遺物については、出土重量は少ないが、鍛冶炉が検出された第2号鉄関連遺構のほか、鍛冶関連遺物主体で出土重量が多い60H、3竪の位置関係から、近い範囲での集中がみられる²⁾。このように、本遺跡では、製鉄・鍛冶関連遺物ともに出土重量の多い遺構が北側に多いことから、近接した位置において、集落内自給を基本とした製錬から鍛冶までの一貫した鉄生産が行われていたと考えられる。

註

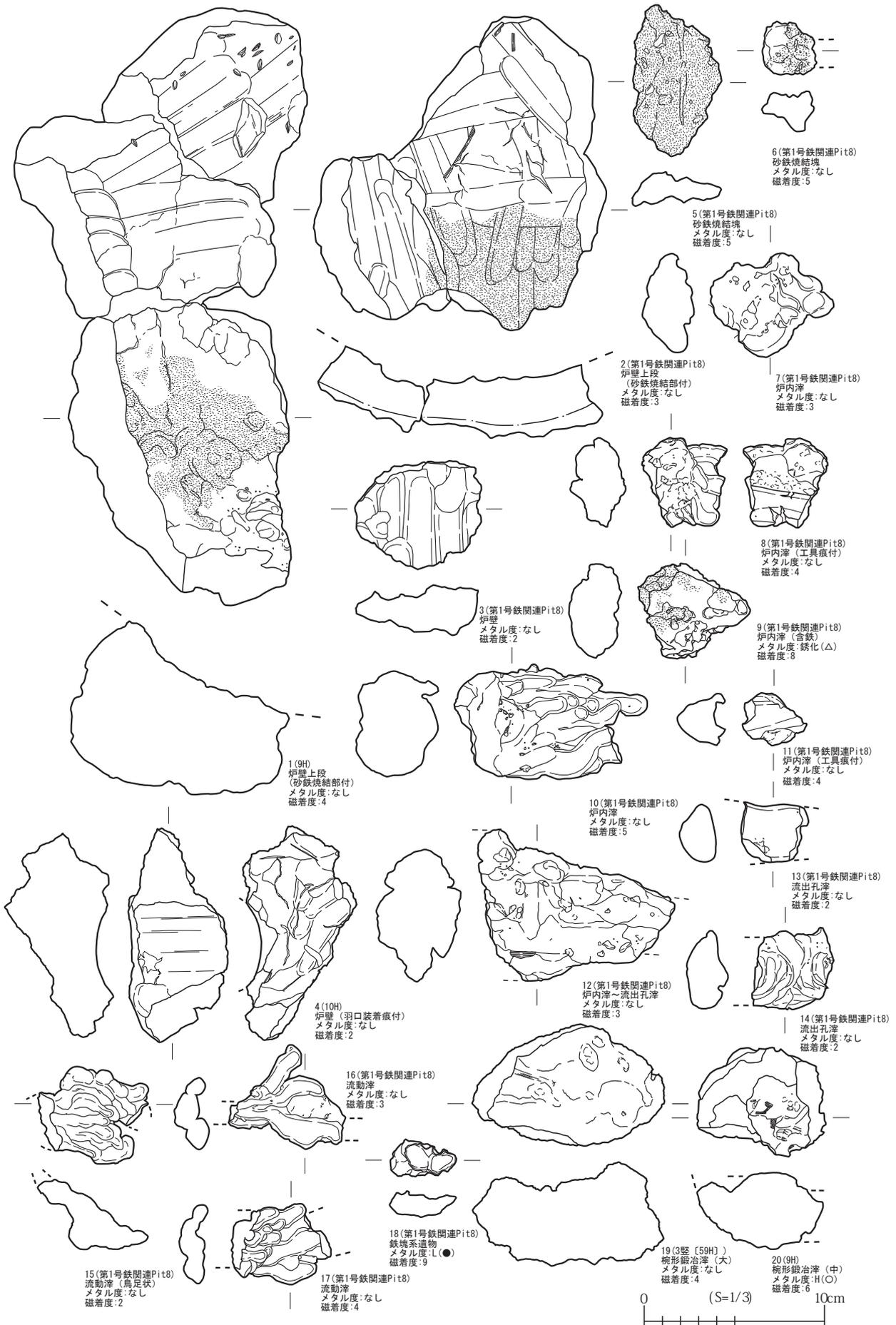
1) 第1号鉄関連遺構と9Hの出土鉄関連遺物については、遺物カードの遺構名のほとんどが両者併記された状態であったが、出土位置から判断し、第1号鉄関連遺構と9Hを区別して記載した。なお、両者ともに鉄関連遺物の傾向が似ているため、一括性は高いと考えられる。

2) 第2号鉄関連遺構については鍛冶炉が検出されている点から、60Hと3竪については出土重量の観点から取り上げた。鍛冶炉については、炉周辺からの鉄関連遺物出土が少ない例(炉を検出した遺構よりも周辺遺構での出土量が多い場合)もあることから、第2号鉄関連遺構は鍛造剥片のみの出土であるものの、ここで取り上げた。60Hと3竪については出土重量は多いものの、炉と思われる部分が認められないことから、排滓場の可能性が高いと考えられる。



青森県埋蔵文化財調査報告書第243集(青森県教育委員会1998) 図193を一部抜粋・スケール追加

第61図 第1号鉄関連遺構内Pit8



第62図 高屋敷館遺跡出土鉄関連遺物

遺構名	炉壁	羽口	流動滓	砂鉄 焼結塊	炉内滓	炉内滓 (含鉄)	含鉄 鉄滓	鉄塊系 遺物	椀形 鍛冶滓	椀形鍛冶滓 (含鉄)	鍛冶滓 (含鉄含む)	鍛造 剥片	鉄器	再結合滓	その他 (木炭・地蔵)	石	計 (g)
第1号鉄関連	9,584	438	16,850	952	19,108	529	6,541			9	49		12	45	1	130	54,247
第2号鉄関連(新)		484														249	732
第2号鉄関連(旧)	62											15					77
2H		307	5			113											425
2HA		1,052							1,136								2,188
3H		38	13		23												73
3HA		8	6														14
5H	450	100	628		314											21	1,513
6H	248	4	53		58		3	108			36					34	543
7H											33						33
8H	16		86		49				673								824
9H	18,628	1,496	1,098	159	2,609	506	233	11	479	295	65		8			428	26,015
10H	348		347		90												785
11H	183	1,760	52		147						416						2,558
13H	31	2,102			71					254						6	2,464
14H	34	171	111		4					148	105						573
15H	18	80	23		160		128	164	305					9		1	887
16H	13															40	53
17H	23	38	2		93		31		63		11		6				266
19H					22				44								67
21H		1,612	4		56										15		1,687
22H		1,856	12		420						36						2,324
23H	26	620	32		499	97			781								2,055
26H			4				6				49					10	69
28H	20		23														43
32H	1	1,208				212			512		178				290		2,402
34H		23					8										31
44H																	91
47H	160								91								160
49H									102						11		113
50H	128	2,051	30						338		134					6	2,687
51H	31		36				12		43								123
52H									123		58		28				208
53H			10														10
58H	29	800	21				171		457	255	248			87	6	64	2,138
3壁(59H)	111	463	116		163		591		1,953		2,056			31		350	5,834
60H	341	69	123		282		545		276	198	1,542			2,861	94	807	7,137
61H		673	2		81		186										942
62H			31				24				15						69
64H			29														29
66H									73								73
68H	87	810							42								939
70H	44	809	19		312		81		50		69						1,384
71H		36															36
73H		642															642
74H	259	87	79		272		94		464		212					98	1,565
76H		302	4		564				59								930
77H	2	1,295	45			29											1,371
79H	228	47	6			72	79		93								526
80H		194							139								333
81H		30															30
82H	10	26	93			77		9			135						350
85H						6				160							166
86H	68	51	116		77	61	40		454		73					159	1,099
土塁	1,884	1,712	11,857	8	6,137	401	13			164	35				7	612	22,829
東壕		1,486				0				23							1,509
北壕	2,140	5,004	4,824		9,200	407	215		1,266		49		308	70	2,158		25,640
南壕		247	41		64	0			239							90	681
4溝	83	181	255		1,970	0	6		368				62				2,924
7溝						106						5					111
9溝	1,377	94	12,958	89	2,650	586											17,754
10溝			304		169	128										20	620
11溝			10														10
2土	51	18	34						189							23	315
3土			26														26
4土			2			8											10
7土	21					4										38	63
12土						36											36
14土		55															55
22土											38					30	68
30土		636															636
33土							84	45									128
36土					12		12										24
37土		26			13		15				15					186	254
42土					32											8	41
44土									92							43	136
遺構外D-22					27												27
遺構外E-22		69															69
遺構外Fライン		426	11								33		27				497
遺構外Gライン	211	211	4,018	10	790	50	11		48							4	5,352
遺構外Hライン	221	825	2,397		573	227	82		44	101			8			120	4,597
遺構外Iライン	185	947	137		1,017	201			154	611						130	3,396
遺構外Jライン	77	46	330		3,007	340	449		319				106	64		371	5,107
遺構外Kライン	273	219	597		2,437	310	11		243				31			366	4,486
遺構外Lライン	350	111	6,941		5,854	474	319		759	279						352	15,440
遺構外Mライン	765	552	24,861	110	3,316	705			85	293						80	30,707
遺構外Nライン	844	508	28,191	19	3,834	458			24						42	211	34,191
遺構外Oライン	1,600	483	21,418		5,692	1,863	110		850	212			1		2	53	32,083
遺構外Pライン	101	106	1,379		1,634	62							2				3,284
遺構外Qライン	554	302	163		626	74										36	1,754
遺構外Rライン																5	5
遺構外Sライン		19															19
表採	6,709	178	460	259	747		101		293					132			8,880
計 (g)	48,627	36,239	141,319	1,607	75,403	7,811	10,323	219	13,713	3,002	5,688	15	614	3,298	469	7,340	355,686
重量比 (%)	14%	10%	40%	0.5%	21%	2%	3%	0.06%	4%	1%	2%	0.004%	0.17%	1%	0.13%	2%	

※下線は各遺構の出土重量最大値
※網かけは出土重量15kg以上

第5表 高屋敷館遺跡出土鉄関連遺物重量集計表



青森県埋蔵文化財調査報告書第243集 図4 (青森県教育委員会 1998) を一部改変・加筆

第63図 高屋敷館遺跡鉄関連遺物重量分布図

第3節 酸素同位体比年輪年代法による 高屋敷館遺跡東壕橋脚の年代検証

箱崎真隆(国立歴史民俗博物館)・木村淳一(青森市教育委員会)・木村勝彦(福島大学)・佐野雅規(早稲田大学)・對馬あかね(名古屋大学)・李貞(総合地球環境学研究所)・中塚武(総合地球環境学研究所・名古屋大学)

はじめに

青森県青森市浪岡地区(旧浪岡町)に所在する国史跡高屋敷館遺跡は、平安時代に築かれた土塁および壕で囲まれた環壕集落跡である。弥生時代の環壕集落のような大規模な環壕と土塁を伴うことから、本遺跡は発掘当初から全国的注目を集め(青森県教育委員会 1998)、中央政権と蝦夷との関係に絡めた「防御性集落」論の代表的存在として認知されてきた(三浦 1995, 三浦ほか 2006など)。

本遺跡において、環壕が築かれた年代は、他の遺構群と白頭山-苫小牧テフラ(B-Tmテフラ)との関係から、10世紀第3四半期と推定されてきた(船木 2009など。なお、B-Tmテフラの年代は近年の研究により西暦946年と確定した(Oppenheimer et al. 2017, Hakozaki et al. 2018))。一方で、その終焉時期には2つの説があり、土器編年や性格の近い他の集落遺跡の盛衰状況から遅くとも11世紀前葉とする説(八木 2006, 船木 2009)と、本遺跡の東壕で見つかった橋脚の年輪年代(光谷 1998)などを根拠に12世紀初頭とする説(畠山 2006, 三浦 2006など)が示されてきた。

後者の根拠のひとつ、橋脚の年輪年代の報告(光谷 1998)は、年輪数と年代のみが示され、統計評価値(t値)や年輪幅データのグラフが示されていない簡略的報告であった。光谷は日本各地の数多くの古建築や考古遺跡で木材の年輪年代を決定してきた実績を持つことから(奈良国立文化財研究所 1990, 光谷 2007など)、本遺跡橋脚の年代測定結果にも一定の信を置くことができる。しかし、年輪年代法では、得られた結果を確定的なものとするため

に、独立した別の研究機関・組織による検証が必要とされている(Baillie 1995)。そこで筆者らは、光谷が年代測定した2点を含む3点の橋脚を対象に、酸素同位体比年輪年代法(中塚 2015など)を適用し、光谷が求めた年代を検証した。

試料と方法

試料は高屋敷館遺跡の東壕から出土した橋脚(アスナロ材)3点である(表1, 図1)。各試料からノコギリを使用して円盤状の分析試料を分取した(図2)。試料はいずれも樹皮を欠くが、2点には辺材が認められた。試料の横断面を研磨し、0.01mm精度で年輪幅を計測した。得られた年輪幅の時系列データをクロスデーティングして、試料間相互の年代決定を試みたが、それは成功しなかった。

次に、各試料の横断面から厚さ1mmの薄板を切り出し、「板ごとセルローズ抽出法(Kagawa et al. 2015)」に従って、セルローズを抽出した。1年輪ごとに酸素同位体比測定用セルローズ試料を切り出し、銀箔で梱包して、総合地球環境学研究所の熱分解元素分析計-同位体比質量分析計を用いて酸素同位体比を測定した。得られた酸素同位体比の時系列データを、年代既知のアスナロ酸素同位体比標準年輪曲線(コード名(暫定):A00ICH01。青森県東通村猿ヶ森埋没林、青森市石江遺跡群、中道遺跡などのアスナロ材から作成(箱崎ほか 2014, 2015, 2016a, 2016b, 2017など))とクロスデーティングして、暦年代を決定し、先行報告の年代(光谷 1998)と比較した。なお、クロスデーティングは、一般的な年輪考古学の方法に従った(Baillie 1982, English Heritage 1998など)。

結果と考察

年輪年代測定の結果、3点の橋脚の酸素同位体比時系列データは、標準年輪曲線A00ICH01と極めて良く一致した(表1, 図3。相関関係の基準3.5を大きく超えるt値を示した)。3点の最外部の年輪年代は、いずれも11世紀末であることが明らかとなった。樹皮が残存しないため、伐採年の特定はできないが、

試料名	年輪数	樹皮	辺材年数	酸素同位体比 分析年輪数	t値(vs アスナロ 標準年輪曲線)	年輪年代(AD)*	
						本報告	光谷(1998)
橋脚1	132	-	11	129	13.32	1091	-
橋脚2	125	-	19	122	14.69	1097	1101
橋脚4	84	-	-	81	11.06	1085	1106

*年代に多少の差が見られるが、光谷は成長錐コアで、筆者らは輪切りの円盤で、それぞれ異なる部位を測定しており、部位ごとの辺材残存量の違いから生じた差であると考えられる。

表1 高屋敷館遺跡東壕出土橋脚年輪年代分析試料の概要



図1 高屋敷館遺跡東塚から出土した4本の橋脚

2点には辺材が残存することから、伐採年は数年～十数年加算して12世紀初頭と見積もることができると考えられる。

この結果は、光谷（1998）の先行報告と総合的であった。最外部の年輪年代に多少の差が認められたが、これは光谷と筆者らが完全に同一の部位を測定していない（試料採取の都合上できなかった）ことに起因すると考えられる。

なお、今回の分析に用いた標準年輪曲線A001CH01には、西暦775年の炭素14スパイク（Miyake et al. 2012）の再現試料のデータも含まれる。炭素14スパイクは、アメリカ、ロシア、ドイツ、ニュージーランドの年輪年代既知木材で再現されており（Usoskin et al. 2013, Jull et al. 2014, Gütler et al. 2015）、年輪年代法において世界共通の年代マーカーとして認識されている。したがって、今回の検証により、高屋敷館遺跡の橋脚には、世界各地の年輪年代法によって保証された暦年代が付与されたとみなすことができる。

試料の伐採年代は、環境に橋が築かれた年代とみなすことができ、12世紀初頭まで環境が存在したことを間接的に示唆する。ただし、この年代は、あくまで橋が築かれた時代の上限を示すということに留意すべきである。

高屋敷館遺跡の近くに所在する野尻（4）遺跡か

らは、12世紀後半の「かわらけ」が検出されており、この地域の土地利用は12世紀代にも継続していた可能性が指摘されている（木村 2015）。今回の分析によって、高屋敷館遺跡の重要な遺物に、確固たる年代が付与されたことは事実であるが、周辺遺跡におけるそのような遺物の検出状況からみて、これを高屋敷館遺跡の集落の終焉、さらには「防御性集落」の終焉と直線的に結びつけることは早計といえる。

木村（2015）は、高屋敷館遺跡の周辺において、「防御性集落」論に絡む大きなスケールの研究と、土器編年や遺跡内の住居変遷など小さなスケールの調査・研究が先行し、周辺の遺跡群を含めた中間的スケールでの総合的な研究がまだ十分ではないことを指摘した。文書史料の乏しい地域における集落の性格変化や利用実態の把握は容易ではない。今後も高屋敷館遺跡とその周辺遺跡において、様々なスケールでの多角的分析・検証を積み重ね、確固たる事実をもとに実態の把握につとめるべきである。

引用文献

- 青森県教育委員会（1998）『高屋敷館遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第243集。
- Baillie MGL. (1995) A slice through time: dendrochronology and precision dating. Routledge. 176p.
- Baillie MGL. (1982) Tree-ring dating and archaeology. CroomHelm. 274p.

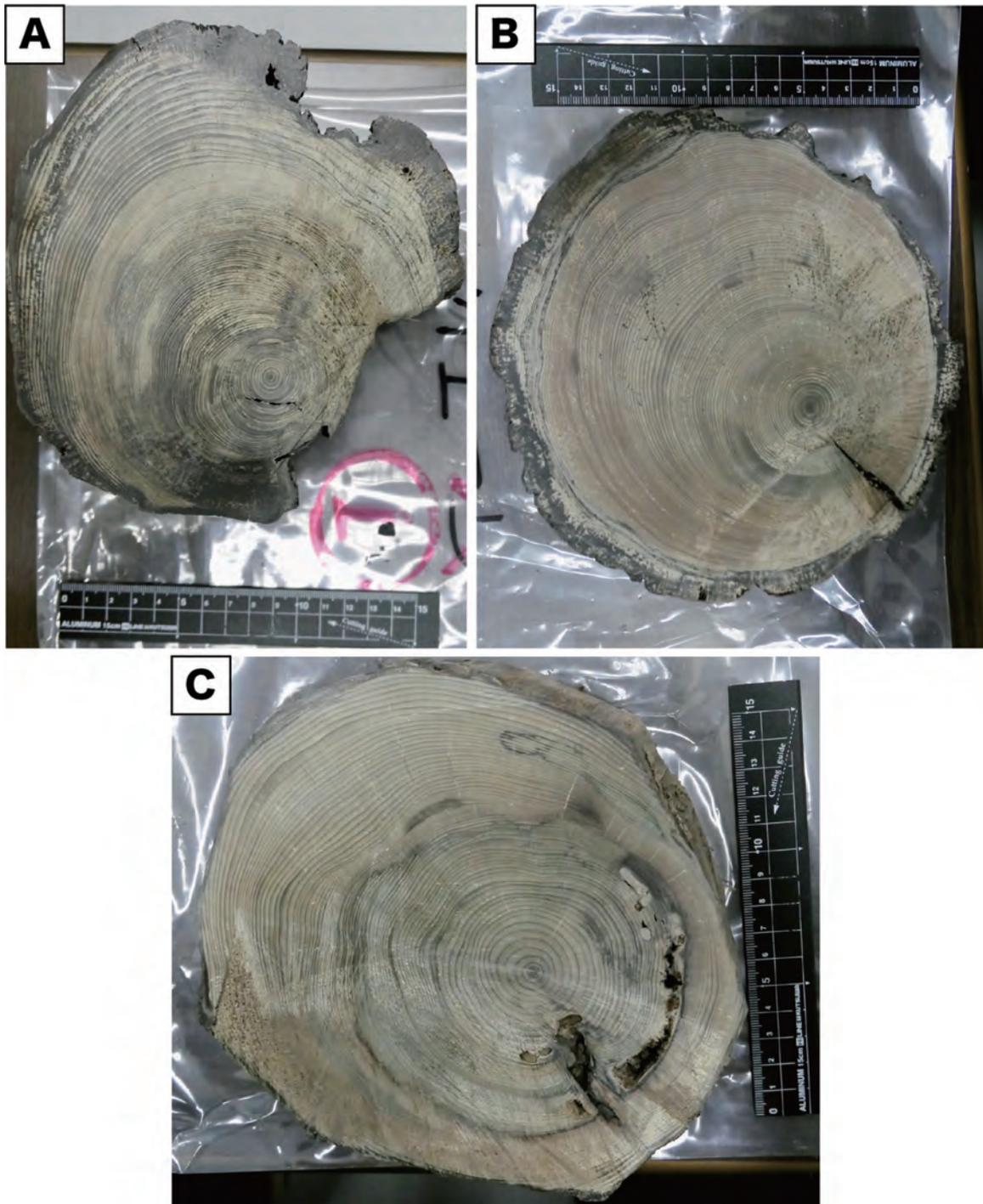


図2 年輪年代分析に用いた円盤試料

A:木柱 1, B:木柱 2, C:木柱 4

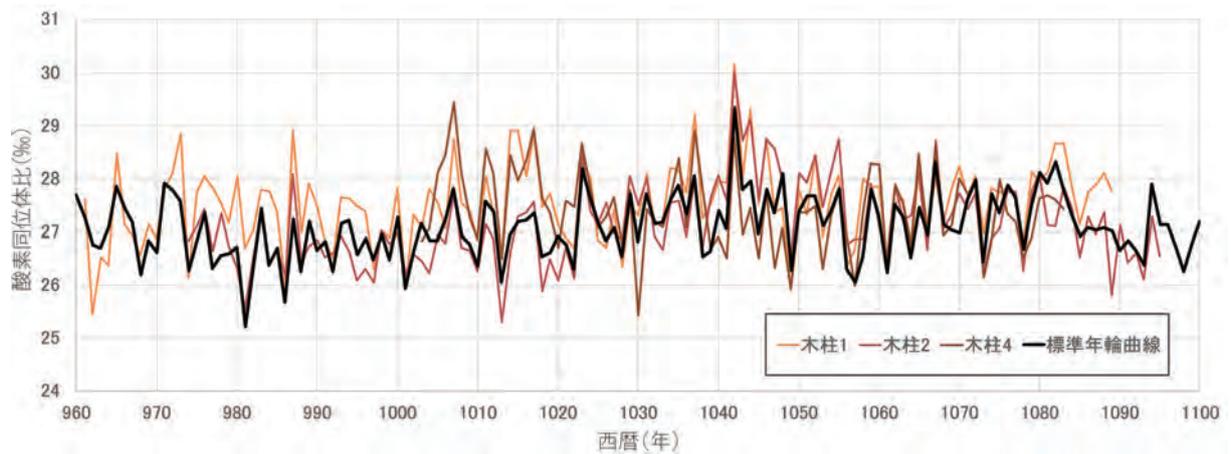


図3 標準年輪曲線と各試料の酸素同位体比時系列データの比較

- English Heritage. (1998) Dendrochronology: guidelines on producing and interpreting dendrochronological dates. <http://www.helm.org.uk/upload/pdf/Dendrochronology.pdf>.
- 船木義勝 (2009) 「「堀と土塁」 結界表現の諸相-青森市高屋敷館遺跡の基本的考察-」『秋田考古学』53、23-48頁。
- Güttler D., Adolphi F., Beer J., Bleicher N., Boswijk G. (2015) "Rapid increase in cosmogenic ^{14}C in AD 775 measured in New Zealand kauri trees indicates short-lived increase in ^{14}C production spanning both hemispheres", *Earth Planet. Sci. Lett.* 411: 290-297.
- 箱崎真隆・木村勝彦・佐野雅規・李貞・對馬あかね・小林謙一・設楽政健・木村淳一・中塚武 (2017) 「中道遺跡・川原館遺跡出土木材の酸素同位体比年輪年代測定」『川原館遺跡・中道遺跡・東早稲田遺跡発掘調査報告書』青森市埋蔵文化財調査報告書第120集、256-259頁。
- 箱崎真隆・木村勝彦・佐野雅規・對馬あかね・李貞・木村淳一・小林謙一・中塚武 (2016a) 「年輪酸素同位体比にもとづく青森市石江遺跡群の古代～中世の出土材の年輪年代測定」『第31回日本植生史学会大会創立30周年記念大会要旨集』、20頁。
- 箱崎真隆・中村俊夫・木村勝彦・中塚武 (2014) 「北日本産樹木を用いた酸素同位体比標準年輪曲線の構築」『名古屋大学加速器質量分析計業績報告書』XXV、54-61頁。
- 箱崎真隆・中村俊夫・大山幹成・木村淳一・佐野雅規・中塚武 (2016b) 「西暦774-775年の ^{14}C イベントと酸素同位体比年輪年代法に基づく青森市新田 (1) 遺跡アスナロ材の暦年代の検証」『名古屋大学加速器質量分析計業績報告書』XXVII、34-39頁。
- 箱崎真隆・中塚武・佐野雅規・木村勝彦・中村俊夫 (2015) 「北日本猿ヶ森砂丘の埋没木を用いた酸素同位体比標準年輪曲線構築」『第30回日本植生史学会北海道大会要旨集』、56頁。
- Hakozaki M., Miyake F., Nakamura T., Kimura K., Masuda K., Okuno M. (2018) "Verification of the annual dating of the 10th century Baitoushan Volcano eruption based on AD 774-775 carbon-14 spike", *Radiocarbon* 60(1): 261-268.
- 畠山昇 (2006) 「調査報告 高屋敷館遺跡」『北の防衛性集落と激動の時代』同成社、15-24頁。
- Jull A.J.T., Panyushkina I.P., Lange T.E., Kukarskih V.V., Myglan V.S., Clark K.J., Salzer M.W., Burr G.S., Leavitt S.W. (2014) "Excursions in the ^{14}C record at A.D. 774-775 in tree rings from Russia and America". *Geophysical Research Letters* 41(8): 3004-10.
- Kagawa A., Sano M., Nakatsuka T., Ikeda T., Kubo S. (2015) "An optimized method for stable isotope analysis of tree rings by extracting cellulose directly from cross-sectional laths", *Chemical Geology*, 393-394: 16-25
- 木村淳一 (2015) 「青森市高屋敷館遺跡周辺の方形区画について」『金沢大学考古学紀要』37、21-30頁。
- 光谷拓実 (1998) 「年輪年代法による木柱と板状木製品の年輪測定」『高屋敷館遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第243集、356頁。
- 光谷拓実 (2007) 「米山 (2) 遺跡出土土井戸枠の年輪年代」『米山 (2) 遺跡IV』青森県埋蔵文化財調査報告書第433集、205-206頁。
- Miyake F., Nagaya K., Masuda K., Nakamura T. (2012) "A signature of cosmic-ray increase in AD 774-775 from tree rings in Japan". *Nature* 486(7402): 240-242.
- 三浦圭介 (1995) 「北奥・北海道地域における古代防衛性集落の発生と展開」『国立歴史民俗博物館研究報告』64、197-222頁。
- 三浦圭介・小口雅史・斎藤利男 (2006) 『北の防衛性集落と激動の時代』同成社。
- 中塚武 (2015) 「酸素同位体比年輪年代法がもたらす新しい考古学研究の可能性」『考古学研究』62 (2)、17-30頁。
- 奈良国立文化財研究所 (1990) 「年輪に歴史を読むー日本における古年輪学の成立ー」『奈良国立文化財研究所学報』第48冊。
- Oppenheimer C., Wacker L., Xu J., Galván J.D., Stoffel M., Guillet S., Corona C., Sigl M., Cosmo ND., Hajdas I., Pan B., Breuker R., Schneider L., Esper J., Fei J., Hammond J.O.S., Büntgen U. (2017) "Multi-proxy dating the "Millennium Eruption" of Changbaishan to late 946 CE". *Quaternary Science Reviews* 158: 164-71.
- Usoskin I.G., Kromer B., Ludlow F., Beer J., Friedrich M., Kovaltsov G.A., Solanki S.K., Wacker L. (2013) "The AD775 cosmic event revisited: The Sun is to blame", *Astron. Astrophys.* 552: L3.
- 八木光則 (2006) 「北上盆地からみた東北北部の古代社会」『北の防衛性集落と激動の時代』同成社、133-155頁。

報告書抄録

ふりがな	くにしせきたかやしきだていせきかんきょうせいびほうこくしよさん							
書名	国史跡高屋敷館遺跡環境整備報告書Ⅲ							
副書名								
シリーズ名	青森市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第124集							
編著者名	木村淳一、設楽政健、箱崎真隆、木村勝彦、佐野雅規、對馬あかね、李貞、中塚武							
編集機関	青森市教育委員会							
所在地	〒030-0801 青森県青森市新町一丁目3番7号 青森市役所駅前庁舎 TEL 017-718-1392							
発行年月日	西暦2019年3月19日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		世界測地系 (JGD2000)		調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
たかやしきだていせき 高屋敷館遺跡	あおもりけんあおもりしなみおがほはあざたかやしきあざのじり 青森県青森市浪岡大字高屋敷字野尻	02201	330	40° 44' 12"	140° 35' 03"			史跡整備
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
高屋敷館遺跡	集落跡	平安			土師器・須恵器・擦文土器 ・かわらけ・鉄関連遺物			
要約	<p>国史跡高屋敷館遺跡の平成18年度から平成30年度までの環境整備工事について、事業概要・設計・施工内容を所収した。</p> <p>また、平成28年度に青森県埋蔵文化財調査センターから譲与を受けた、平成6・7年度実施の国道7号浪岡バイパス建設に係る発掘調査の出土資料について、史跡整備に必要な追加情報・分析結果を所収した。</p>							

引用・参考文献

- 青森県 2018 『青森県史通史編1』
- 青森県教育委員会 1983 『青森県の中世城館』 青森県文化財調査報告書
- 青森県教育委員会 1996 『野尻(2) 遺跡Ⅱ・野尻(3) 遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第186集
- 青森県教育委員会 1996 『野尻(4) 遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第186集
- 青森県教育委員会 1998 『高屋敷館遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第243集
- 青森県教育委員会 2005 『高屋敷館遺跡Ⅲ』 青森県埋蔵文化財調査報告書第393集
- 青森県教育委員会 2005 『山元(1) 遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第395集
- 青森県教育委員会 2005 『林ノ前遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第396集
- 青森県教育委員会 2006 『野尻(3) 遺跡Ⅱ』 青森県埋蔵文化財調査報告書第414集
- 青森県教育委員会 2006 『林ノ前遺跡Ⅱ』 青森県埋蔵文化財調査報告書第415集
- 青森県教育委員会 2008 『山本遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第461集
- 青森県教育委員会 2011 『乳井茶臼館』 青森県埋蔵文化財調査報告書第507集
- 青森県教育委員会 2014 『明神沼遺跡・福島城跡5』 青森県埋蔵文化財調査報告書第548集
- 青森市教育委員会 2006 『国史跡高屋敷館遺跡環境整備報告書Ⅱ』 青森市埋蔵文化財調査報告書第88集
- 青森市教育委員会 2014 『石江遺跡群発掘調査報告書Ⅶ』 青森市埋蔵文化財調査報告書第116集
- 青森市教育委員会 2018 『野尻(4) 遺跡発掘調査報告書Ⅱ』 青森市埋蔵文化財調査報告書第123集
- 弘前市教育委員会 2014 『油伝(1) 遺跡発掘調査報告書』
- おいらせ町教育委員会 2018 『史跡阿光坊古墳群整備報告書』
- 外ヶ浜町教育委員会 2012 『山本遺跡』
- 浪岡町教育委員会 2001 『平成12年度浪岡町文化財紀要Ⅰ』
- 浪岡町教育委員会 2005 『平成16年度浪岡町文化財紀要Ⅴ』
- 浪岡町教育委員会 2005 『史跡浪岡城跡環境整備報告書Ⅲ』
- 富山大学人文学部考古学研究室 2002 『津軽唐川城跡』 富山大学研究室報告第7冊
- 岡本孝之 1998 「外土壘環壕集落の性格」 『異貌』 第16号pp. 2-11
- 木村淳一 2015 「青森市高屋敷館遺跡周辺の方形区画について」 『金沢大学考古学紀要』 第37号pp. 21-30
- 久世辰男 2001 『集落遺構からみた南関東の弥生社会』
- 工藤清泰 1997 「考古学研究における境界性-中世・古代への視点から-」 『青森県史研究』 第1号pp. 120-145
- 関根達人 2017 「三重の壕をもつ北奥の古代集落-青森県外ヶ浜町山本遺跡-」 『古代国家と北方世界』 pp. 210-224
- 羽柴直人 2010 『東日本初期武家政権の考古学的研究-平泉勢力圏の位置づけを中心に-』
- 三浦圭介・小口雅史・斉藤利男 2006 『北の防衛性集落と激動の時代』
- 八木光則 2011 「北奥の古代末期団郭集落」 『古代中世の蝦夷社会』 pp. 55-90
- Renfrew, C. and Bahn, P. 1991 *Archaeology: Theories, Methods and Practice*. Thames and Hudson, London.

既刊埋蔵文化財関係報告書一覧

青森市の文化財 1	1962	『三内壺園遺跡調査概報』	青森市埋蔵文化財調査報告書	第 63 集	2002	『稲山遺跡発掘調査概報Ⅳ』
"	2	1965	『四ツ石遺跡調査概報』	第 64 集	2002	『市内遺跡発掘調査報告書』
"	3	1967	『玉清水遺跡調査概報』	第 65 集	2003	『雲谷山吹(4)～(7)遺跡発掘調査報告書』
"	4	1970	『三内丸山遺跡調査概報』	第 66 集	2003	『稲山遺跡発掘調査報告書Ⅲ』
"	5	1971	『野木和遺跡調査報告書』	第 67 集	2003	『深沢(3)遺跡発掘調査報告書』
"	6	1971	『玉清水Ⅲ遺跡発掘調査報告書』	第 68 集	2003	『近野遺跡発掘調査報告書』
"	7	1971	『大浦遺跡調査報告書』	第 69 集	2003	『市内遺跡発掘調査報告書 11』
"	8	1973	『孫内遺跡発掘調査報告書』	第 70 集	2003	『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅷ』
		1979	『蛭沢遺跡』	第 71 集	2004	『稲山遺跡発掘調査報告書Ⅳ』
		1983	『四戸橋遺跡調査報告書』	第 72 集	2004	『稲山遺跡発掘調査報告書Ⅴ』
青森市の埋蔵文化財	1983	『山野峠遺跡』	第 73 集	2004	『新町野遺跡発掘調査概報』	
	1985	『長森遺跡発掘調査報告書』	第 74 集	2004	『市内遺跡発掘調査報告書 12』	
	1986	『田茂木野遺跡発掘調査報告書』	第 75 集	2004	『江渡遺跡発掘調査報告書』	
	1987	『横内城跡発掘調査報告書』	第 76 集	2005	『栄山(3)遺跡発掘調査報告書』	
	1988	『三内丸山Ⅰ遺跡発掘調査報告書』	第 77 集	2005	『赤坂遺跡発掘調査報告書』	
青森市埋蔵文化財調査報告書			第 78 集	2005	『三内丸山(8)遺跡発掘調査報告書』	
"	第 16 集	1991	『山吹(1)遺跡発掘調査報告書』	第 79 集	2005	『市内遺跡発掘調査報告書 13』
"	第 17 集	1992	『埋蔵文化財出土遺物調査報告書』	第 80 集	2005	『合子沢松森(2)遺跡発掘調査概報』
"	第 18 集	1993	『三内丸山(2)遺跡発掘調査概報』	第 81 集	2005	『石江遺跡群発掘調査概報』
"	第 19 集	1993	『市内遺跡発掘調査報告書』	第 82 集	2006	『三内沢部(3)遺跡発掘調査報告書』
"	第 20 集	1993	『小牧野遺跡発掘調査概報』	第 83 集	2006	『合子沢松森(2)遺跡発掘調査概報Ⅱ』
"	第 21 集	1994	『市内遺跡詳細分布調査報告書』	第 84 集	2006	『新町野遺跡発掘調査概報Ⅱ』
"	第 22 集	1994	『小三内遺跡発掘調査報告書』	第 85 集	2006	『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅸ』
"	第 23 集	1994	『三内丸山(2)・小三内遺跡発掘調査報告書』	第 86 集	2006	『市内遺跡発掘調査報告書 14』
"	第 24 集	1995	『横内遺跡・横内(2)遺跡発掘調査報告書』	第 87 集	2006	『新町野遺跡発掘調査報告書Ⅲ』
"	第 25 集	1995	『市内遺跡詳細分布調査報告書』	第 88 集	2006	『史跡高屋敷館遺跡環境整備報告書Ⅱ』
"	第 26 集	1995	『桜峯(2)遺跡発掘調査報告書』	第 89 集	2006	『篠原遺跡発掘調査報告書』
"	第 27 集	1996	『桜峯(1)遺跡発掘調査概報』	第 90 集	2007	『月見野(1)遺跡発掘調査報告書』
"	第 28 集	1996	『三内丸山(2)遺跡発掘調査報告書』	第 91 集	2007	『市内遺跡発掘調査報告書 15』
"	第 29 集	1996	『市内遺跡詳細分布調査報告書』	第 92 集	2007	『新町野遺跡発掘調査概報Ⅲ』
"	第 30 集	1996	『小牧野遺跡発掘調査報告書』	第 93 集	2007	『合子沢松森(2)遺跡発掘調査報告書』
"	第 31 集	1997	『市内遺跡詳細分布調査報告書』	第 94 集	2007	『石江遺跡群発掘調査報告書』
"	第 32 集	1997	『桜峯(1)遺跡発掘調査概報Ⅱ』	第 95 集	2008	『野尻(4)遺跡発掘調査報告書』
"	第 33 集	1997	『新町野遺跡試掘調査報告書』	第 96 集	2008	『葛野遺跡群発掘調査報告書』
"	第 34 集	1997	『葛野(2)遺跡発掘調査報告書』	第 97 集	2008	『市内遺跡発掘調査報告書 16』
"	第 35 集	1997	『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅱ』	第 98 集	2008	『新町野遺跡発掘調査報告書Ⅳ』
"	第 36 集	1998	『桜峯(1)遺跡発掘調査報告書』	第 99 集	2009	『市内遺跡発掘調査報告書 17』
"	第 37 集	1998	『新町野遺跡発掘調査報告書』	第 100 集	2009	『阿部野(1)遺跡発掘調査報告書』
"	第 38 集	1998	『野木遺跡発掘調査報告書』	第 101 集	2009	『大矢沢野田遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
"	第 39 集	1998	『市内遺跡詳細分布調査報告書』	第 102 集	2009	『細越館遺跡発掘調査報告書』
"	第 40 集	1998	『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅲ』	第 103 集	2010	『市内遺跡発掘調査報告書 18』
"	第 41 集	1998	『野木遺跡発掘調査概報』	第 104 集	2010	『長溜池遺跡発掘調査報告書』
"	第 42 集	1998	『熊沢遺跡発掘調査概報』	第 105 集	2010	『葛野(3)遺跡発掘調査報告書』
"	第 43 集	1999	『市内遺跡詳細分布調査報告書』	第 106 集	2010	『石江遺跡群発掘調査報告書Ⅱ』
"	第 44 集	1999	『葛野(2)遺跡発掘調査報告書Ⅱ』	第 107 集	2011	『石江遺跡群発掘調査報告書Ⅲ』
"	第 45 集	1999	『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅳ』	第 108 集	2011	『石江遺跡群発掘調査報告書Ⅳ』
"	第 46 集	1999	『新町野・野木遺跡発掘調査概報』	第 109 集	2011	『市内遺跡発掘調査報告書 19』
"	第 47 集	1999	『稲山遺跡発掘調査概報』	第 110 集	2012	『市内遺跡発掘調査報告書 20』
"	第 48 集	2000	『熊沢遺跡発掘調査報告書』	第 111 集	2012	『野尻館遺跡発掘調査報告書』
"	第 49 集	2000	『稲山遺跡発掘調査概報Ⅱ』	第 112 集	2012	『石江遺跡群発掘調査報告書Ⅴ』
"	第 50 集	2000	『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅴ』	第 113 集	2013	『石江遺跡群発掘調査報告書Ⅵ』
"	第 51 集	2000	『桜峯(1)・雲谷山吹(3)遺跡発掘調査報告書』	第 114 集	2013	『市内遺跡発掘調査報告書 21』
"	第 52 集	2000	『大矢沢野田(1)遺跡調査報告書』	第 115 集	2013	『大矢沢野田遺跡群発掘調査報告書Ⅲ』
"	第 53 集	2000	『市内遺跡発掘調査報告書』	第 116 集	2014	『石江遺跡群発掘調査報告書Ⅶ』
"	第 54 集	2001	『新町野遺跡発掘調査報告書Ⅱ・野木遺跡発掘調査報告書Ⅱ』	第 117 集	2014	『市内遺跡発掘調査報告書 22』
"	第 55 集	2001	『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅵ』	第 118 集	2015	『市内遺跡発掘調査報告書 23』
"	第 56 集	2001	『稲山遺跡発掘調査報告書Ⅰ』	第 119 集	2016	『市内遺跡発掘調査報告書 24』
"	第 57 集	2001	『稲山遺跡発掘調査概報Ⅲ』	第 120 集	2017	『川原館遺跡・中道遺跡・東早稲田遺跡群発掘調査報告書』
"	第 58 集	2001	『大矢沢野田(1)遺跡発掘調査概報Ⅱ』	第 121 集	2017	『市内遺跡発掘調査報告書 25』
"	第 59 集	2001	『市内遺跡発掘調査報告書』	第 122 集	2018	『市内遺跡発掘調査報告書 26』
"	第 60 集	2002	『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅶ』	第 123 集	2018	『野尻(4)遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
"	第 61 集	2002	『大矢沢野田(1)遺跡発掘調査報告書』	第 124 集	2019	『国史跡高屋敷館遺跡環境整備報告書Ⅲ』
"	第 62 集	2002	『稲山遺跡発掘調査報告書Ⅱ』			

青森市埋蔵文化財調査報告書第124集

国史跡高屋敷館遺跡
環境整備報告書Ⅲ

発行年月日 2019年(平成31年)3月19日
 編 集 青森市教育委員会
 〒030-0801 青森県青森市新町一丁目3番7号
 青森市役所駅前庁舎
 TEL 017-718-1392
 印 刷 青森オフセット印刷株式会社
 〒030-0802 青森県青森市本町二丁目11番16号
 TEL 017-775-1431